
正し屋本舗へおいでなさい

剣岳 鳳哉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正し屋本舗へおいでなさい

【Nコード】

N0334Y

【作者名】

剣岳 鳳哉。

【あらすじ】

就職活動をしていた江戸川 優^{えどがわ ゆう}は、ベタな出会いから「正し屋本舗」という少し特殊な職場へ就職した。「正し屋」の仕事は依頼人が持ち込む依頼を解決すること。

優はここで雑用兼見習いとして癖が強すぎる上司に弄られながら、妖怪や幽霊といったかなり特殊な仕事に向き合っていく。癒し成分はもっぱらペット(?)の雀と狛犬たち。色気より食い気な主人公は甘味好き。

ありきたりといわないで（前書き）

誤字脱字には十分注意しているつもりですが、もし誤字脱字などがありましたら報告していただけると幸いです。

あまり描きなれていないので色々と読みにくいところもあるかもしれませんが、精進していきたいと思っています。
暇つぶしにでも読んでいただけると嬉しいです。

ありきたりといわないで

慣れない重さと大きさのビジネスバッグが、私に現実を突きつける。

手に持っているビジネスバッグは男の人用なので持ち手のところが凄く持ちにくい。
ビジネスバッグはケチらないで新しいの買えばよかったって何度思ったことか！

でも最大の敵はビジネスバッグじゃなくて、ヒールだ。

ヒールなんて履きなれてない所為で、叫んでゴロゴロ転がりまわりたいくらいきつい。
足全体の痛みがそろそろ無視できない状況になりつつある。

しかもそこに天敵である、動きにくくて快適さとは無縁のスーツが加わるんだから恐ろしい。

色が黒いから太陽の光は吸収するし辛いなんのって。

移動するときは普通の靴とジーンズ、着替えやすい恰好のほうがいいかも。

会社の近くに来たら着替えればいいよね。

げんなりと人が行き交う街中でうなだれている私の名前は江戸川えどがわ優ゆうといいます。

某眼鏡の少年とは何の関係もない、しがない田舎者ですとも。

これだから都会は、なんてぶつくさ八つ当たり気味に呟きながら立ち止まって天を仰ぐ。

「（うゝあゝ……なにこれ、凄くあつづいんだけど）」

ビルの隙間から見える雲一つない快晴は、今の私にとっては泣きたくなるくらい憎いあんちきしょうだ。

体中が水分を要求してる。特に喉とか口の中とか。

乾物の気持ちかわかる一歩手前つてところかなあ。

「（にしても、完全に就職活動を侮ってた）」

友達から就職活動が大変だと聞いてはいたけれど、まさかここまでとは。

あんまり器用なほうじゃないから勉強と就活を一緒にやる自信がなくて勉強を優先してたんだけど話だけでも聞いておくんだった。

次々に就職を決めていく友人たちに焦り始めたのは5日前。

まずは就職を支援している短大の就職課や公共機関を利用したんだけど、結果は——言うまでもない。

受かってれば、今こんな恰好してないもん。

「（ここは絶対大丈夫って言ってた就職課のおばさんが最後には神社でお祓いを受けてきなさい、だもん。ついてない以前の問題だよな……面接練習だって一発だったのに）」

はあ、と盛大なため息と一緒に肩が下がる。

うう。朝から歩きっぱなしだった所為で足は重いし、何十社も会社回ったけど全部落とされるし、本気で一回お祓い受けてこようかなあ……？

「そういえば、お昼ご飯もまだだっけ」

気づいてしまえば物凄く何か食べたくなってきた。

美味しいミートソースのパスタでもいいし、野菜とキクラゲが入ったラーメンも捨てがたい。

ああ、ハンバーグとかもいいなあ。

脳裏をよぎるお昼ご飯候補にうつかりよだれをたらしそうになった。危ない危ない。

今にも泣きだしそうなお腹を二、三回撫でてから気合を入れなおす。

（目標！食べ物のあるお店！目指せ！安い・美味い・早い！！ついでに美味しいデザートがあると文句なしの追加点！！）

えいえいおー！と心の中で自分を叱咤激励？して、棒切れを乗り越して電柱のようになった足に鞭を打って歩き出す。

でも、うん……現実ってやっぱり甘くない。

そんなの親が事故に巻き込まれて死んだり、テストで山を張ってたのに外した時とかに思い知ったけど。中学生、高校生、大学と何度、数学のあんちくしょーに泣かされたかッ！！

数学なんてヤマが当たらない限りどーにもならないよ。

「（せっかく、色々応援してもらってるのに……なんで私って要領悪いっていつか頭悪いんだろ）」

高いビルや無機質な色のコンクリートに囲まれた、息苦しい灰色のジャングルで飲食店を見つけたのはとても難しい。

ビジネスバッグの中には地図なんてない。

目標の会社にはタクシーの運転手さんやらおしゃべり好きのおばさま方に教えてもらってどうにかたどり着けていたんだけど……周りには忙しそうに速足で歩くビジネスマンやらビジネスウーマンしか見当たらない。せめて、コンビニがあればいいんだけど、コンビニがありそうな雰囲気はまるでない。

「前途多難すぎる……うう、もっとしつかりしないとなあ」

脳裏をよぎるのは数々のネタ、もとい失敗談。

昔から抜けてるせいで普通の人はしないらしい失敗が多かった。友達はそのな私を心配したりどうしようもないなーなんて言いながらも色々手伝ってくれたんだよね。私から言えば皆がすごくしつかりしてるだけだと思っただけ。

「（応援してもらってるんだもん、頑張らないと）」

大丈夫、私はついてる！

特に人間関係は、うん、ついてる。他は色々不足してるかもしれないけど。

にしても、難儀な世の中だなあ。

友達には恵まれてるし、親が亡くなったとはいえっても祖父母がちゃんと育ててくれた。

今はもう育ての親の祖父母も亡くなったけど、高校の先生が凄く姉御肌？で色々アドバイスや手続きをしてくれたから大学にだって行けた。……奨学金という名の借金はあるけど、仕方ない。

他にも近所の人にもよくしてもらっていたのに、私は何も返せないまま就職すらままならないこの現実。

うう、ホント申し訳ない。

「（学生の際はそれなりに大変だったけど、楽しかったなあ。うう、すっごく戻りたい）」

大きな大きなため息を吐いて、足元に置いていた鞆を手にとった。何だか私を追い越していく人たちが皆、すいすいと前に進んでいくような感覚に陥った。

自分なりに“止まっではいけない”と思って足を前に動かし続けてみても、結局は止まったままで。

って、うわー……私、今まで人様に迷惑しかかけてないような気がしてきた。

「ハローワークに通うより新しい求人誌買って特攻した方が確実かも」

鞆から取り出した求人雑誌を握りしめる。

表紙にでかかど書かれている煽り文句が、ものすごく憎たらしい。雑誌からしたらとんだ八つ当たりなんだろうけれど、それにしたって“これで決まり！”なんてと軽々と表紙に書くものじゃないと思うんだよねッ！

ぐぬぬぬ、編集者に会う機会があつたら絶対ぜーったい！

「（私が総理大臣並みに偉くなつたら文句言つてやる！）ふ、ふふふふ……！」

暑さと疲労と空腹のトリプルダメージで思考が普段以上に支離滅裂になつてゐる気がするけど、もう知らない。

大体なんでビルばかりなの！喫茶店の一件くらいあつてもバチはあたらないとおもう！

この時の私がもうちょっと冷静だったら、人が行き交う道のと真ん中で拳を握りしめて笑うなんてしなかったんだけどね。要反省だね、うん。毎回学習しないけど！

太陽光でジリジリ焼かれていた私を現実に戻したのは全身に感じた衝撃。

手が、熱い。

小さくて硬い何かが掌に刺さって地味に痛いのと、何故か凄く熱い。あと体を感じる異常は、お尻がジンジンして……やっぱり痛いってことくらいだ。

えーと、もしかして私、電柱か看板にぶつかった？

チラチラと周りの人たちが尻餅をついてるらしい私と正面にある“何か固いもの”へ向けられていた。

勿論、周りなんてまるで見えていなかった。

数秒経ってから自分が尻餅をついた無様な格好でポカンと口を開けていることを自覚する。

「（あれ、もしかして私ってば今、民衆の面前で間抜けにも尻餅ついている…？）」

じわじわこみ上げる羞恥心と闘いながら恐る恐る周囲を見渡す。

つい先ほどまで私のことなんて眼中にもなかったように歩いていた人達がチラチラ視線を送っていました。

でも、その対象は私ではないらしい。

全くじゃないけど私のことはちらっと視界に収めてすぐに別のモノへ向けられている。

だって、視線が地面に座り込んでる私に向いてないのだ。

「（なんか、ずいぶん大きかったしもしかして看板とか電柱にぶつかった？）」

恐らく私が激突したのは大きなものだ。

それが看板や電柱でないことを祈りながら天を仰ぐ。

顔を上げた私は、こうしてベタで使い古された感じの出会いを果たしてしまったのである。

ありきたりといわないで（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！

次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

食いしん坊といわないで（前書き）

個人的に実際に出会って一番困るタイプ〓美形。

絶対にいたたまれない。穴掘って隠れたい。

食いしん坊といわないで

結論から言おう。

ぶつかったのは人間だった。

思わずヒクリと口元がひきつる。

あっけなく地面と仲良くなった私の目の前にあったのは、電柱でも看板でもなかった。

アスファルト越しに伝わってくる熱と尻餅をついた時にぶつけたらしいお尻が、残念ながらこれが現実であることを教えてくれている。

ぶっちゃけ、有難迷惑だったりするんだけどね！

「（顔、あげるんじゃない……！！）」

後悔しても後の祭りだってことは、さすがの私でもわかったよ。

だって、相手がわざわざ屈んでるんだもんね！

……あの私なんて路肩の石ころだとも思っ
て、華麗にスルーしてくれと非常に助かるんですけど。

これが言えたらどんなにいいことが。

ちらつと差し出された手から周囲に視線を向けると、速足に歩いて
いたはずの人たちが好奇心丸出しで私に注目してる。

足を止めてるのは女性が多いのは、たぶん私がぶつかった人の所為
だ。

どーしてくれる、こっ恥ずかしいよ！

眩暈に似た症状を覚えて、とりあえず頭をぶんぶん振ってみた。
少しすっきりしたけど、やっぱり注目されるのって好きじゃないな
ー……なんか変な汗が凄いよ。

とりあえず、いつまでも座っている訳にはいかない。

それにさっきから目が合ってるような気がするんだよねー。

逆光で見えないんだけど、眼鏡がキラめいてるし、空気も心なしが
キラめいてる。

たぶん、これが美形オーラってやつだ。だって自慢の女友達もこん
なキラキラしたオーラまってるもん！

……これで、心の奥底にあった「もしかしたら、強面のおじさんか
もしれない」という怖すぎる脳内候補は消された。むむむ、美人の
お姉さんだったらいいんだけど、シルエットからして男の人だしな
あ。

「すみません、大丈夫でしたか？」

頭は一応働いてたけど、間抜けにも口をあけたまま固まっている
私に何かが差し出される。
とりあえず、ティッシュじゃないことだけは確かだ。

「どこか怪我でもしましたか？でしたら、病院へ……」
「」

「だ、ただ大丈夫です！なんのっ、なんっの問題もないです！」

差し出されたのはティッシュなんかじゃなくって、綺麗な手だった。

一瞬、この人は手のモデルでもやってるんだろうかと思ったけれど、そうではなさそうだ。

声や物腰の柔らかさからして……お、おじさんのほうが良かったかもしれないなあ……！

「ごくり、と思わず生唾を飲んで身構えた私の脳裏によぎる一抹の不安。

「（ま、まずいよね、これ！じ、事務所の人とかファンの人に殺されるんじゃないだろうか）」

個人的に期待するのは、キラキラオーラは持つてゐるけど顔は普通の好青年だよ！みたいなオチ。

大概是、そうなる筈だ。

街中に美形がゴロゴロしてゐる筈がない。女の子やら女の人々は美人さんとか可愛い子率が高いけど、男の人ってそんなにレベル高い人いないって相場は決まつてゐるらしい。

「――…そう、ですか。では、ここは人目がありま
すし、ぶつかったお詫びをするなら落ち着いて話せる場所の方がいいでしょう。荷物はこれだけですか？」

「荷物はそのバッグだけですけど……え?!こ、この近くに食べ物屋さんあるんですか!?!」

「喫茶店にありますよ。見つけないところにあるので、普通に歩いているだけではたどり着けない筈です。随分、歩いたみたいですね」

差し出された手をひっこめてもらって、私は自分で立ち上がった。知らない、しかもキラキラオーラをまとった男の人の手を握って立ち上がれる度胸なんて微塵もない。
後で握手料とか請求されても困るし。

目の前の人は、落ちていた鞆を拾って服をたたいている私に差し出してくれた。

ついでに、握りしめた所為でよれよれになった求人雑誌も、渡してくれたんだけど……その時に私は初めて相手の顔をしっかりとみた。

「（うん、見なきゃよかったな！アンタいる場所間違ってるよ！スタジオへ戻れ！ハウスっ！）」

もちろん、口になんてだせやしない。

出した瞬間に私はこの世に命を受けたことを後悔する羽目になると思ったから。

首謀者？そんなのファンの人たちに決まってるじゃないですか。

だれだよ、こんな眼鏡美人連れてきたの！！

街中に不釣り合いなとんでも美形連れてこないでよ神様！凄くいたまれないよ！

生まれての方、普通くらいの容姿で生きてきた私にはかなりひどい仕打ちすぎる。

私はこの人がテレビやら雑誌やらに出てても驚きはしないね、う

ん。

「そ、そうなんです！結構歩いて疲れちゃったのもう家に帰ろうかなーって思ってたところなんですよ。だから、お詫びとか全力で大丈夫なので、どうぞお気になさらず目的を果たしてください。こちらこそ、その、本当に失礼しました。今度から車と電柱と自転車、ついでに道行く人には気を付けます」

「そうですね、配慮に欠けていました。歩き通しでは疲れていて当然です。丁度、タクシーが来たのでこれで移動しましょうか」

そりゃないぜ、神様。

運よく？通りかかったタクシーを捕まえた彼はキラキラした笑顔を浮かべて、どうぞ、と私をタクシーへ誘導した。

つまり、もう逃亡は不可能だ。

逃走経路は完全に断たれて、状況は色々と絶望的。勘弁してほしい。

るーるー、と思わず遠い目になってタクシーの窓から空を見上げるけど、少しだけ視界が霞んでいた。
ぐすん。これは心の汗なんだ、きつと。

隣に座った彼は運転手さん相手に、これでもかといわんばかりの気品と優雅さ、ついでに金持ち感をばらまきながら行く先を指示している。

運転手さん、運転手さん、驚いてるのはわかるけど、口は閉じないとそのうち、涎でてくるよー。

「喫茶店には、5分程度で到着する予定です。飲み物だけではなく、軽食もあるので何か食べましょうか。オムライスや自家製パンのフレンチトーストが評判だと聞いています。デザート類も美味しいですよ」

「と、特に人気なのは？」

「アップルタルトと焼チーズタルトですね。どちらも何度か雑誌に載っていますよ」

隣の座席に座っている美形さんが言った言葉に思わずガツッポーズ。

私は、甘いものが大好きだ。
愛してるし、奴らはもはや主食であると日頃から声高らかに主張している。

ある種の極限状態にいた私にとって甘いもの——しかも、美味しいときた！————にありつけるといふのだからガツッポーズだってうっかりしてしまうと思う。

「甘いものが好きなんですね」

「好きじゃないです、愛してます。四六時中いつしょにいて、できればお墓の中までお供願いたいと心から思っています」

「これまで多種多様な方々を相手にしてきましたが、甘いものに対して愛を囁く人は初めてです」

背筋がむず痒くなる様な綺麗すぎる笑顔と、なんだか珍生物を見るような視線を頂戴した。

不本意とはいえってもこの手の視線には慣れているので、きれいさっぱり受け流す。

脳内を占めているのは、果てしなく甘美なスイーツたちの調べ。

うああ、どんな味がするんだろう！携帯電話と甘味との運命的な出会いを記録するノートを持ってきててよかった！！

テンションがぐぐぐーんと頂点に近い位置まで上り詰めていた私は、タクシーが止まると同時に財布に手をかける。

さっさと料金を払って甘味のもとへ行かねば！

「タクシーを止めたのは私ですから、私に払わせてくださいね」

「いやいや、相乗りって基本的に割り勘ルールが発動しますから！」

「わかりました、次からは考慮させていただきます」

さ、どうぞ。と、いつの間にかタクシーから降りた彼は、私が下りるべきドアの前にいた。

瞬間移動か！と戦慄した私は気づけば手を取られ、ついでに荷物も確保され、あれよあれよという間にビルの中へ。

どこからどう見ても、普通のビルだ。

地下へ降りる階段を下りて、どこの迷路だと悪態の一つや二つや三つきたくなるような道を歩く。

初めは一生懸命、道を覚えようとしたけど5回ほど左や右に曲がった時点で諦めた。地図があっても迷う。

「隠れ家的なお店ですねー。だけど、こんな立地条件の悪いところにあっってお店やっていけるのかなあ」

「それについても、お話ししますよ。まずは中に入りましょうか……お腹も空いているようですし、ね？」

「自己主張が激しいお腹の住人でごめんなさい」

「これだけ期待されれば店主も料理も嬉しいと思いますよ」

美味しい匂いに触発されたい腹の虫という名の住人が歓喜の悲鳴を上げた。

うう、少しは状況を考えて鳴って欲しい。

とっさにお腹を押さえたものの、過ぎたものはどうしようもない。

楽しそうな声に少しの居た堪れなさを覚えたけど、ソロソロと彼のあとを追うようにアンティーク調の扉をくぐった。

少しだけ気になったのは、窓枠の中心に鏡がはめられていたこと。店に入る前に身だしなみをチェックしろってことかなあ。

スーツ着てるし、
…追い出されたり、はしないよね……？

食いしん坊といわないで（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！
次も最後まで読んでもらえるように頑張ります！えいえいおー！

世間知らずといわないで（前書き）

基本的に、怖い話は好きだけど怖いモノは嫌いです。

あ、あと色眼鏡とコンタクトレンズも嫌いです。
サングラス

世間知らずといわないで

見知らぬ眼鏡美人に連れられて、足を踏み入れた喫茶店はとても
雰囲気の良いお店だった。

地下にあるのに、暗いとかジメジメした雰囲気はまるでない。

店の中に足を踏み入れた瞬間、どこかで嗅いだことのある香りが鼻
をくすぐった。

食べ物の匂いは全くない。

ただ、お店全体に薰っている凜とした清々しい匂いに疲れが少し
ずつ溶けていくような感覚がした。
知っているのに答えが出てこない、独特のもやもや感にムツと眉間に
力が籠る。

「あの席に座りましょう、落ち着いて話すには丁度……」
—— どうか、しましたか？随分険しい表情をしているようですが」

「へ？そ、そんなに酷い顔してました？！」

「酷い顔、ではないと思いますが眉間に皺は寄ってましたね」

「こんな顔でしたよ、と茶目っ気たっぷりに再現してくださいましたのはいいんだけど……顔のつくりが違うので正直比較の対象にはなりません。」

彼には美形補正があるかもしれないけど、私にそんな素晴らしいものは一切ない筈。
だからもっと歌舞伎役者みたいな顔になってたと思うんだ。

「お見苦しいものをお見せして大変申し訳ございませんでした。あの、この香りなんですけど……何の香りなのかわかりますか？どこかで嗅いだような気がして気になってるんですけど、答えがなくて」

「ああ、この香りは“菖蒲”^{しょうぶ}の香りですね。少し他のモノが混ざってはいますが悪いものではないので、安心してください。食事をしたり会話をする程度なら何の問題もないでしょうから」

上品で穏やかな笑みを称えた美形は、何をしても似合うらしい。着物姿で洋風の喫茶店にいるにもかかわらず何の違和感もありやしないのだ。

ときどき、神様って本当は不公平なんだって思うよ。そのキラキラの一つでも私に渡してくれれば、買い物するときに便利なのに！

一番奥の席に座った私達を見張っていたかのように、コックの恰好をした人が近づいてきた。

あくまで「コックの恰好」をした人だと私は思った。だって、脳内で描いていたコックさんのイメージをことごとく覆し

ているから。

筋肉隆々の厳めしい体つきに違わない、山籠もりから戻ってきたばかりのような風貌。

髪は撫でつけてあるものの、無精ひげはいただけないと思うんだ、私。

「久しぶりに顔だしたと思えば、なんだア？このちまっこいのは」

ザ・超重低音。

私たちが座っているテーブルの横に仁王立ちする大男さんから発せられた声はまさしくそんな感じ。

コックさんの服より、ヤのつく職業の人が着てる服の方が凄くイメージにベストマッチだよ！

うつかり壁際ににじり寄った私に気付いたのか、大男さんはジロリと高い位置から私を見下ろした。

「ひっ……？！っ、すいませんごめんなさいもうしません逃げませんから命だけは甘いモノ食べるまでとらないでください」

「誰が食つか……ッ！ッチ。おい、須川！なんだこのちびっこの！依頼人をここに連れてくんじゃねーって何度言やあわかんのだア？」

「おや？私がここに依頼人を連れてきたこと、ありましたか？ここにいる客が偶々（たまたま）、依頼人になったことは何度かあったと記憶していますが」

「……そーいや、今日はお前ら以外客はいねえんだっとな。んじゃあ、なんだ、このちまっこの」

どうやら、このおっかない人は眼鏡美人さんの知り合いらしい。

それはわかったけど：私、もしかしくてもとんでもない人についてきちゃったんじゃないだろうか。

「後で話しますよ。それより、私はいつものをお願いします。彼女にメニューを渡してあげてください、あとお茶もお願いしますね」

「しゃーねえな、ちょっと待ってろ」

相変わらずキラキラしい笑顔を浮かべた眼鏡さんに、大男さんは盛大なため息をついた。

衝立の向こうへ歩いていく巨体を観察しながら私は息をひそめる。いや、なんか目があったら何かが終わるような気がしたんだ。

私が戦々恐々としている間に、お水が入ったピッチャーとお洒落なグラス、メニューらしきものを持った大男がテーブルにモノを並べていく。

ことのほか、手つきが優しくて少しびっくりした。

「ほらよ。今日はオムライスセットがお勧めだ。値段は高いがどーせ、須川の奢りだろーから高いモン頼んどけや」

「高いといってもこの店じゃたかが知れてるでしょう。全く……これでもいいですか？では、このお勧めとアップルタルト、焼チーズケーキをお願いします」

「お前はいつものだろ？で、ちまっこいの。飲み物は？」

「……アールグレイのミルクティーで」

自分の背が高くて力持ちそうだからって馬鹿にするな！アリンこもミジンコも必死に生きてるんだよ！
そういいなくなるのをぐっと堪えた私は偉い。

大きな背中が店の奥へ来ていくのを確認した私は、すかさず彼が何者なのかを聞いてみたんだけど、返事はあっさりしたものだった。

「この店の店主ですよ。ここまでくるとどちらが本業なのか分からなくなりますが……ああ、そういえばまだ私も名乗っていませんでしたね。私は、こういうものです」

どこからともなくシンプルで無駄に高そうな名刺入れを取り出した彼は、一枚の紙を私の前に置いた。
一瞬、名刺ってどんなだっけ？なんて間抜けなことを考えたのは言うまでもない。

「（なに、この高級和紙使用の名刺。こんな手の込んだものみたことないんだけど）高そ……ええと、綺麗な名刺ですね」

「そうですか？まあ、あまり手の込んだものではありませんが」

「普通の名刺は持った時に色変わらないと思います。しかもこれ、和紙でできてるんですよね？うはー、すごいなあ……日本の技術」

初めはふつうの和紙だったのに、手に持ったところからサーツと色が透けた。

透明なアクリル板に和紙状の模様を加工してあるみたいだ。それだけならいいんだけど、花の透かしまでは言ってるんだから驚きもの。

最近の職人さんはすごいなあ、なんて光沢のある墨で書かれた名刺を透かしたり軽く振ったりしてみただけで元には戻らなかった。

「須川 怜至、と申します。貴女のお名前をお聞きしてもいいでしょうか？」

「え？あ、はい！すみません……えーと、私は江戸川 優といいます。名刺とかはまだ、その、持っていないので渡せないんですけど……って、そうだ！ちょっと待ってください」

就職先が決まってから作ろうと思っていたので名刺なんてないけ

ど、名前くらいはしっかり伝えておきたい。

メモ帳に書くっていう手段もあったけど、おもしろい名刺を見せてもらったお礼には程遠いから、面白味はないモノのそれなりに丁寧な字で書いた名前を見てもらうことにした。

「はい！いっぱい書いたのでどうぞ」

「…………履歴書、ですね」

「丁寧には書いてあるので読める時にはなっているとおもっんですけど、さっきの名刺に比べたら面白味がないですね」

「いいえ、私にとってはとても面白いものですよ。ありがとうございます」

綺麗な笑顔を浮かべて、履歴書を受け取った眼鏡美人こと須川^{すがわ}怜至^{れいし}さんは熱心に私の履歴書を読み始めた。

少しだけ緊張するけど、面接を受けてる訳じゃないのでずいぶん気楽だ。

あーあ。他のところでもこんな風にリラックスして面接受けられたらよかったのにな。みーんな怖そうなおじさんなんだもん！

少し手持無沙汰になった私は、改めてじっくりもらった名刺を見ることにした。

「あの、ここにかいてある“正し屋本舗”って社名ですよ？モデル事務所が何かですか、やっぱり」

「事務所はあっていますが、モデル事務所ではありませんね。簡単に言ってしまうと何でも屋、みたいなものです。少し特殊かもしれませんが、それなりの収入はありますよ——…興味が？」

「あります！どんなことするんですか？やっぱりペット探したり、浮気を突き止めたり、犯人を尾行したりするんですか？」

「似たようなことはしていますよ。人を探したり、物を探したり、場所を特定したり——…といっても、江戸川さんが考えているような方法ではないとおもいますが」

「へえー、なんだか探偵みたいな仕事なんですね」

ほんとにあつたんだ、とお水を飲む私に須川さんは苦笑して、懷から何かを取り出した。

深緑色の布に包まれていたのは写真。

若い男女の写真から子供が映っている家族写真、ペットを取った写真、家の前で記念撮影をしている写真、観光地でとられたと思われる写真……とまあ、統一感のない写真が30枚近くテーブルの上に広がった。

これだけみると、普通の写真屋さんか写真コレクターなんだけど………そういう、楽しい写真じゃないことはすぐに分かった。

「（なん、か……冷たくて、重い感じがする）これ、ってあんまりいい写真じゃない、ですよね？」

「……その通りです。私の本業はこういったモノを適切に処分することであつたり、目には見えないモノによって私生活がままならなくなっている方を本来の状態に戻す手伝いをしています」

「それって、もしかして……れ、霊能力者ってやつですか？」

「そういったものの一角でしょうか。まあ、霊能力者や祓い屋、霊媒師、退魔士などという職業を^{なりわい}生業としている者は、見えない方からすると胡散臭い職業でしょう？」

まさか本人を前にして「そうですね」なんて言えるはずもなく、とりあえず、曖昧な笑顔で濁しておいた。

でも、確かに須川さんはなんだか他の人とは何かが違う気がする。顔はいいし無駄にお金持ちそうだけど、そういうんじゃないかって……ここにいないみたいなのに、誰よりも近くにあるような、そんな不思議な感じなんだよね。

「他には、一二月祭り（じゅうにつきまつり）の手伝いもあります。命に係わる霊現象なんてしょっちゅうあるわけではないので、そちらの仕事は滅多にありません。代わりにそういった能力のある、もしくは“ある”と思い込んでいる”方の選定や斡旋でしょうか”

「な、なんか凄いことになってるんですね」

「最近はめっきり減りましたが、少しでも油断すると偽物やペテン師といったものが増えますからね。他にも問題としては依頼人の質、でしょうか。本当に困っているのか、それとも単なる気休めなのか……そのあたりの見極めも大切なんですよ」

どうやら、彼は霊能力者の紹介窓口に似た仕事もしているらしい。

一通り聞いたのはいいけど、お腹が空きすぎていつも以上に脳みその働きが鈍っている気がする。

彼の言っていることは理解できなくもないけど、正直、かなり常識から外れているとおもっう。

私はお化けとか幽霊はいるって信じてる方だ。

でも、進んで怖い目にはあいたくないし、遭^あおうとも思わない。

お化けや幽霊はテレビと本と口コミだけで十分だ。

……
今更だけど、履歴書って名刺代わりになるのかな……？

世間知らずといわないで（後書き）

む、ちょっと短い…かな？

ここまで読んでくださってありがとうございます！

いいカモだなんていわないで（前書き）

書き終わったー！！と歓喜したのもつかの間、気づけばデータが消えていた罨（しかも2回連続で）

こゝ、これがしんれーげんしょーか！！（確実に違う

いいカモだなんていわないで

生き返った！と歓喜するのは、私の胃か脳か。

今の私は、今日一日の中で一番幸せだ。

空っぽになったお皿とティーカップを見て、ついさっき味わったばかりの極上デザートを思い出す。

程よい甘みのチキンライスがふわトロの半熟卵に包まれて、仕上げにキノコと野菜の旨みがたっぷり、デミグラスソースがたっぷり、かかった美味しいオムライス！

付け合せの大根サラダもシャキシャキしてて美味しかったし、スープも野菜がゴロゴロ入ってほんとに美味しい。

そして衝撃的だったのは、リンゴタルトと焼チーズケーキ！

どっちもタルトの生地はサクサク。

チーズケーキの方は濃厚で舌触りは滑らか、甘いだけじゃなくてレモンと多分、柚子か何かだと思うんだけどその風味がこっ、いい具合に口の中に広がって鼻に抜けてく。

リンゴタルトはリンゴの煮詰め具合もさることながら甘さと酸味のバランスが文句なし。

でも、お気に入りなんていってもカスタードクリーム！すごい美味しかった！なんだあのカスタードクリーム！もう2〜3切れ余裕で入っちゃうよ！

二つともミルクティーによく合うし、私好みだし、是非ぜひティクアウトしたい。

「すごい、おいしかった……特にタルト！すごいですよこれ、絶対行列できますよ！」

「こんなに喜んでもらえるなら連れてきて甲斐がありますね。怪我もないようですし、安心しました。考え事をしながら歩くのは、やはりよくありませんね」

「わかります、わかります！私もよく、ぼーっとしながら歩いたり、半分寝ながら歩いたりすることがあるんですけど、そういう時に限って電柱やら看板にぶつかっちゃうんですよねー」

「よくあるかどうかは別としても、ああいう風に人にぶつかったのは初めてだったので、久々に驚きましたよ。不思議な縁もあるものですね」

偶然といえば、これは偶然。

でも偶然にしてはかなりの低確率だともう、お互いに考え事を
していて衝突するなんて。

これが漫画だと「この人は私の運命の人なんだわ!」とかつてなるんだろうけど、相手を見て、それから自分の顔を鏡で見るべきだ。

「(これがドラマか漫画なら間違いなく相手だけじゃなくて、ぶつかった側の人間も美人じゃなきゃダメなんだよ)」

ふ、と思わず遠い目になった私は悪くない。

自分の容姿くらい把握してるからね、うん。

須川さんみたいな人の隣に立つには役不足すぎるし、そもそも同じ
ところに立てる気がしない。

なんていうか、次元が違う。

「江戸川さんは就職活動中、でしたね」

「はい。絶賛就活中です」

「もしよければ、ウチで働きませんか？」

「……え？」

「考え事をしていた、といいましたよね？実は、私の事務所で新しく人を雇おうと思っていましたんです。商売柄、堂々と求人誌に乘せるわけにはいけないので、知人を訪ねていたところなんですよ」

そういえば、須川さんって霊能力者なんだっけ。

話をしていると忘れそうになるけど、改めて客観的に見てみると彼は確かに、どこか“特別”だ。どこら辺が特別なのかって聞かれると答えに困るんだけど……不思議な感じがするんだよね。

美形のオーラだ！って言われちゃえばそれで納得できるんだけど。

「知名度もある程度ありますし、基盤はできたので人を入れるにはいい機会だと思ってます。仕事の内容は貴女的能力に合わせて調整しますし、少しずつ慣れていけば問題はありません。給料は勿論、諸々の手当や保障もしています。必要経費はこちらで持ちますし、悪い条件ではないと思うのですが……」

「悪いどころか好条件すぎて怖いんですけど……そ、それに！私なんかを雇うより、もっとこう、能力の高い人とかそこらへんゴロゴロしてますよ？そりゃ、雇って貰えんと助かりますけど、生まれてこの方、一度もお化けとか幽霊とかそういうのみたことないし」

「能力が高いだけの人間なら探せばいくらでもいるでしょう。ですが、周囲に馴染みにくい場合が多いんです。正し屋は業界内ではお

そらく、頂点といっても過言ではないほどの実力があります。ただし、これはあくまで我々の領域……つまり限定的なものなのではない」

「んと、つまり、普通の人にも気軽に足を運んでもらえるようなお店にしたいから、普通の人間がほしいうことですか？」

「ええ、一言で言ってしまうえばそうなります。祭りのこともありませんし、地域には馴染んでおかないと今後、かなりやりにくい。そこで、正し屋の周囲の方に親しみを持っていただけるような人材を探していたんです」

な、なんだか過度の期待がかけられているような気がする……！
親しみやすい、っていうのは人によるだろうし、そういうのはやっぱり美人に任せるべきだと思っただよ。いや、話しかけにくいのはわかるけど話してみたら意外と……みたいな展開がいいんじゃないか！

黙り込んだ私に、彼は複数の紙を差し出した。
つ、次は何？もしかしてこの店の料理って物凄い高かったりした？！

「雇用の条件です。記載している給与は手取りなので毎月最低でもこの金額が口座に振り込まれます。休みは基本的に週休2日制ですが祝日がある場合は祝日も休みとします。有給は1年で12日、といったところでしょうか」

「すみません、今日からよろしくお願いします!!」

「……他にも条件がいくつかあるんですが、見なくてもいいんですか?」

「百聞は一見にしかず、です!それに、なんとかかなりそうな気がします」

白状すると、書面に書かれていた給与の金額を見た瞬間に決めま

した。

初任給でこれはない！これはないよ！！しかも手取りでこの金額とか破格すぎる。

こ、これなら奨学金だってあつという間に返せる気がする。

べ、別にお金に目がくらんだんじゃないよ！

説得力はないけど、霊能力者の人がどんな仕事するのも気になるし、普通とはちょっと違う職業って誰でも一度は憧れると思うんだよね。

私もお化け屋敷とか大嫌いだけど、怖い話は好きだし、テレビの心霊特集とかもよく友達とみてた。

肝試しの経験はないし、コックリさんとかもやったことはないけど、興味はあつた。

ありきたりだけど、霊能力とかがあれば、なんて想像して友達と盛り上がったこともあるし。

「では、この契約書に署名をお願いします。実印は持っていますか？」

「えーと、たしか鞆に……あ、みつけ！えーと、ここに押せばいいんですか？」

「はい——……これで契約成立、ですね」

「もうこれでハローワークと大学の就職課を往復しなくていいし、求人雑誌とにらめっこしなくてもいいんだ。それに動きにくいスーツも足痛くなるヒールもおおさらばできるって、こんなに嬉しいことだったんですね」

少し大げさじゃないですか？と苦笑する須川さんに、そんなことはない！就活って凄く大変なんですよ！？と苦勞談を力説した。

美形の苦勞は私にはわからないけど、同様に美形は私たちの苦勞なんて微塵もわからないのだ。

「なんだあ？お前、こいつの下で働くのかよ」

「ついさっき、就職完了しました。これで私も堂々たる新社会人の

仲間入りです」

どうだ！と胸を張っていると頭をゴワシツと掴まれて、そのままぐるんと半回転させられる。

首がグキツていったよ！あだだだ、もげる！もげるって！！！

須川さんに背を向ける形で、私は上半身を捻る羽目になった。

うわ、最近というか運動なんて殆どしてなかったからバキツていったよ。やばいな、これ。

「喜んでるとこ、水差すよーで悪イが、コイツ、かなりアレな性格してんぞ」

「あ……アレ、ですか？」

現実逃避を始めた思考を現実に戻したのは、近くで聞こえる超重低音。

な、なんか、すごくエロまっちょりしてる！体の芯に響くっていうか、色々危険だよこの声！

頭にあった手がいつの間にか肩をつかんでいる。に、逃げられない！

「見た目に騙されんだよ、特に女はな。ちまっこいのにや、コイツの面アはあんま好みじゃなかったみてえだけだな」

「いや、好み以前に美人過ぎて怖いっていうか、あの、なんていうか世の中の不条理をうっかり覗いちゃった感じがします。隣に並んで歩けば、部下っていうより召使いかお手伝いさん見習いにしかみえません」

「よし！よく言った。ま、こんだけ図太けりゃ大丈夫だろ」

ペイツと元の向きに戻された私の正面には、相変わらずキラキラした笑顔の須川さん。

後ろで大男さんの狼狽えたような声が聞こえるけど、なんでそんなに慌てる必要があるんだろう？なんて考えていると、頭に衝撃。

正確に言えば頭を支えている首に大ダメージだ。

「あだだだだ！ーい、痛いっ！ち、縮む~~~~ッ！ー！」

「し、しっかしあれだな！中学生だか高校生だかは知らんが、最近のガキは随分しっかりしてらァ」

「雅。いい加減に叩くのをやめなさい。貴方のところの修行僧ならまだしも、女性なんですよ？」

「いや……あの、それより、私、成人して数年経過してるんで、ガキはちよっと」

「はア？」

「そういえば、この生年月日からいくと成人していますね」

大男さんの反応にも傷つくけど、そういえばって須川さん……貴方もさりげなく酷いと思います。
会話がぴたりと止まって、音は店内に流れるBGMだけになった。
うわぁ、沈黙って重かったんだね！

「――……さて、随分長居をしてしまいましたね。江戸川さん、事務所には明日、ご案内いたします。引っ越しも同時にする予定なので家に帰り次第、荷造りをお願いします。家具やベッド、その他日用品で必要なものは新しく買い換えましょうか。もし思い入れのある家具などがあれば、引っ越し業者に言ってくださいね」

「え？ちよ、ちよつと待ってください！ひ、引っ越し？」

「ここに書いてあるでしょう。雇用条件の一つ、事務所での住み込み、と」

「ほ、ほんとだ」

「お前、読んでなかったのか？ふつー、目くらい通すだろ？！」

「いや、だって……就職する方が大事だったし」

もし、雇用条件をしつかり読んで躊躇したら踏ん切りがつかなくなりそうだったんだもん。

条件の中に“頑張りようがない”条件があつたりなんかしたら、サインはしなかっただろうし。

後でじっくり見ようと思ったんです、なんていっても大男さんは信じてくれなかった。

……たぶん私も、なんだかんだで見ない気がするんだけどさ。

「（引越し、かー……心機一転！って感じ。ちょっと不安だけど、何とかなる、筈）」

自分にそう言い聞かせながら、テーブルの上で小さな水溜りを作っているコップを手取る。

汗をかいたグラスは、ひやりと冷たくて、とんとん拍子で就職したことが嘘でも妄想でもないことの何よりの証明のように思えた。

「（うん、これも、きっと何かの縁だね。応援してくれてた人に恥ずかしくないように、ちゃんと、がんばろう）」

氷が解けて、中に閉じ込められていたミントの葉がぷかりと浮かんだ水を煽る。

清涼感のあるミネラルウォーターが喉を滑るように落ちていった。

いいカモだなんていわないで（後書き）

悔しくて不貞寝したので更新が遅れました。無念。

ここまで読んでくださってありがとうございます！
次もがんばるぞーい。

閉話 カモはネギをしょっていく？（前書き）

一応、これで序章的なものは終了、の予定です。

さ、触りにしては長かったなー（遠い目

閉話 カモはネギをしょっていく？

私の部屋は今、すっからかんになっていた。

余計なものがなくなって、一番初めの―――なにもない、何も入れない状態になった部屋を見て思わず、ため息がこぼれた。

一般的な女の子よりは少なく、男の人よりも多い荷物はものの1時間ほどで外に運び出された。

ビニールシートの上に広げられた家財道具を見て立ち止まったり、何事かと尋ねる人は多かったけど、比較的近所付き合いは良かったので変な誤解は受けなかったと思う。

一応、ちゃんと説明したし。

「昨日の今日で引っ越しなんて引っ越しの神様だつてびっくりだよ、きつと」

空っぽになった部屋から出た私は、ブルーシートの上に広がる家財道具を見て回った。

引っ越し業者の人たちが丁寧すぎるほど丁寧に扱っていたのは基本的にホームセンターで買った組み立て式のものだ。

運び出されている最中、物凄く申し訳なく思ったのは言わなくてもわかるだろう。

すつごく申し訳なかった。うん。

「（でも、引っ越しの費用どころか業者さんの手配までしてくれる会社って滅多にない、よねえ）」

引っ越し宣言を受けたのは昨日。

で、引っ越しは宣言通りに行われた。

驚いたのは引っ越し業者の人が殆ど全員女性で構成されていたことなんだけど、こっそり話を聞いたらそういう指定を受けたらしい。

まあ、引っ越しとはいえ男の人が部屋に上がって家具を運び出すのって少し、気後れするし。

一応こんなでも女だから、見えないところの埃とか賞味期限がアレな缶詰とかは見られたくないわけです。

「江戸川さま、室内の確認ありがとうございます。不備などはありませんでしたか？」

「あ、はい。名前を書くのってここでいいんですね？」

「……、はい。ありがとうございました。丁度、鑑定が終わりましたので、確認をよろしくお願いいたします」

恭しく頭を下げた一番偉い人っぽい女の人に見送られ、ビニール

シートの前に立っている人に近づく。

敏腕鑑定士！という看板を背負っていてもおかしくない知的美人は私と目が合うとうつつすら微笑を浮かべる。

美人だ。問答無用で美人だ。私が男だったら、今この瞬間にどうやって連絡先を聞き出すか考えていただろう。

「お待たせいたしました、電化製品を含む家財道具をすべて算定させていただいた上村と申します。今回の引き取り金額ですがこの金額になりました。確認をお願いします」

「え、こ、こんなに！？い、いいんですか！？これ、殆ど組み立てたものだし、電化製品だって結構長い間使ったのに」

「使用状態が大変良かったのでこの金額になります。同意いただけましたらこちらにサインを」

言われるがままにサインをした私ははっと我に返る。

実は、雇用契約書にサインした後、その場にいた大男さん――

――もとい、黒山 雅さん――にしこたま怒られたのだ。

契約書の類にサインする前には、必ず隅々まで目を通せ！って。

本気で食べられるかと思った。重低音って、ほんと体の芯に響くね……一瞬、地震かと思った位だし。

今回の引っ越しなんだけど、実は『契約後は速やかに住まいを「正し屋本舗」事務所二階の住居区域へ移し、そこでの生活することに同意する』って雇用条件の欄に書かれてたんだよね。

引っ越し自体はいいとしても契約した翌日に引っ越していうのはいくらなんでも焦りすぎだと思う。

何か理由があるのかな、なんて考えたりもしたけど、さーっぱりわからなかったので諦めた。

「（にしても、私にとってホントに大事なものって鞆一個で間にあつちやうんだなあ）」

必要最低限の貴重品は友達にもらったアクセサリーと形見のダイヤのネックレス（といっても結婚指輪をネックレスにしたやつだから、ダイヤっていつでも小さいんだけどね）、あとは貯金通帳とお財布、携帯電話と充電器、連絡先が書かれた手帳と卒業アルバムが3つだけ。

服や下着といったものは何故か処分するよう言われた。

よくはわからないけど、言われたとおりにしていくうちに大切なものは見事に旅行用のカバンに収まったのだ。なんだか自分がものすごく、小さい人間のように思えて悲しくなったのはここだけの話だ。

うう、鞆一つの青春とか虚しすぎるんですけど。

引越し終了を見計らって到着したタクシーの中で、諦めにも似た笑みがこぼれた。

あー、運転手さん、いいんです。放つといってください。
いますごく荒んでるんで。

よし、こーなったら、あとで甘酒を自棄呑みしてやる！

「……こ、この中から、ですか」

「気に入ったものがないようなら作らせます。希望はありますか？」

私が就職した会社の名前は『正し屋本舗』という少し変わった会社だ。

でも、そうじゃないことがわかった。

変わっているのは『正し屋本舗』という会社ではなくて、経営者――

――そう、須川さんその人だった。

彼の容姿が整っているのは一目見ただけで十分すぎるほどに理解できる。

それに身に着ける服とかモノから高級感が漂ってるから、お金はあるんだろうな―とは思ってたけどここまでだとは思わなかった。

「……………須川さん」

「なんでしょっつ?」

「多分、ちょっとばかり私と須川さんの金銭感覚にずれがあると思います」

「そういえばそうですね。先ほどから安いモノばかり見えていますし……これはよくできているように見えますが、まだまだです。あちらに置いてあるものの方が素材も職人の腕も格段に上ですから、あちらの方がいいでしょう」

「ちょ、ま、待ってください！そーじゃなくって……あああ、ストゥプ！お願いだから早まらないでください！桁っ、桁みて！！一桁どころか二桁多いです！」

「この価格なら安い買い物です。ですが、このデザインは女性には向きませんね。クローゼットはあるのですがもう少し小さめの箆笥と姿見を買いましょうか。木も悪くないですが、陶器製のものもあるようですし、そちらも見て決めた方がよさそうですね」

一人、何かを理解したように頷いたかと思えばすたすたと別の売

り場へ歩いていく。

私はそれを追うのに必死だし、追いついたら追いついたで高級家具をポンポン買いそうな彼を止めるのに必死だ。私こんなに疲れる買い物初めてなんですけど！

こんな感じで店内を回って、別の店へ日用品を買いに行く頃にはもう、ほとんど気力は残っていなかった。日用品も高かったけど、家具に比べたらどうってことない。

普段の私なら絶対に躊躇するような値段だったけど、家具店で感覚が麻痺しちゃったんだ、絶対。

「さて、一通り当面の生活に必要なものは揃ったので、少し休みましょうか。昼食もまだでしたし、ちょうどいいでしょう。何か食べたいものはありますか？」

「食べたいものですか……あ、美味しいわらび餅が食べたいです！」

「それならいい店を知っています。そこなら町の案内もできますし、楽しみにしててください」

花も見惚れるような笑みを浮かべる須川さんを見るたびに、形容しがたい敗北感に襲われながらハイ、と首を縦に振った。運転手に店の前で止めるように告げ、車の中で正し屋がある町について教えてくれた。

正し屋があるのは、縁町^{えにしちやう}というあまり大きくはない町。

面白いのはたった一つの町に、12ヶ所の公園とそれに通じる社があるらしい。

社に社に通じる道や公園にはその社をつかさどっている神様が好んでいる樹や花が植えられてて、毎月、どこかしらの公園で祭りが開催されるんだって。

これを『十二月祭り（じゅうにつきまつり）』と呼ぶんだけど、このお祭りは物凄く有名だ。

縁町はお祭りだけじゃなくて、腕のいい職人さんを育成することと力を入れている町だってこともあって、競うように自慢の品を祭りに出店する。だから、いいものが並んで、それが他の街だけじゃなくって海外にまでその評判は轟いている。

「でも、そのお祭りの手伝いって言っても『正し屋』って職人さん、いないですよ？何を手伝うんですか？」

「依頼されているのは神を迎える準備と神卸しまで、ですね。後は呪符や御守りの類を社で売ってもらうくらいでしょうか？」

「すみません、神様とお知り合いなんてきてないんですけど。」

「ひくつと□元がひきつったのを自覚した。」

でも、もう就職してしまったものは引き返せないので早く慣れるように頑張ろうと思う。

なんか立派なこと言ってるように聞こえるかもしれないけど、ぶっちゃけ私にできるのはこの位しかないんだよね！

こうして、私は目くるめく(?) 非日常と日常の境目へと足を踏み入れちゃったんです。たははー

閉話 カモはネギをしょっていく？（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！

これで一応、序章みたいなものは終わりです。次から、なんやかんやで癒し成分入れていこうかなあ…等と目論んでいるので、もしよければ暇つぶしにでも読んでやってください。

PS・お気に入り登録してくださっている方がいるらしいことに気付きました。思わず、目薬さしてからもう一回確認しちゃったほど…。

ありがたやゝ、ありがたやゝ。

いや、あの、本当にありがとうございます！がんばるぞー、ふぁうとー！

備考と補足があります。

…小説外で説明する必要がなくなるくらいの文才が欲しい（ボソッ

十二月祭りじふにがつまつり

正し屋がある縁町は、職人による伝統工芸や日用雑貨の他にも月の最後3日間で催される“月祭り”という祭りが有名。

これらはひと月を無事に過ごせたことに感謝してその月を司っている神様への感謝の気持ちを表す為に昔から行われていた。今現在はその意味合いが半分、職人たちの腕を競う、もしくは限定品の商

品を売り買いする機会として認識されている。

洒落にならない森林浴（前書き）

正し屋での生活（仕事？）がスタートです。

世の中上手いことばかりではありませんよねー。

洒落にならない森林浴

今一度、^{いまいちど}神様に嫌われるようなことをしたのか聞いてもいいですか。

私が『正し屋本舗』という一風変わった会社に就職したのは、三日前のこと。

三日前に契約書にサインして、二日前に引っ越しを終え、昨日は町の人に挨拶して回った。

正し屋のある縁町は、古き良き日本と現代の技術をうまく組み合わせた風情ある町として有名なのは日本国民なら誰もが知っている。

でも、聞くと実際に見るとのではやっぱり違う。

職人さんの町だって聞いてたから、イメージとしては怖い顔の職人さんだらけで緊張感にあふれてる筈だ、と思っただけ……凄く優しくかったり、気持ちのいい人だらけだった。

仕事をしてる時はイメージ通りの顔になるんだけど、仕事をしてない時は話しかけやすいおじさんだったりおじいちゃんだったりする。お店を仕切っている奥さんは、気前のいいお母さんみたいな感じで、すぐく買い物しやすそうだったんだよね。

食べ物も美味しいし、景色は綺麗だし、文句なんてあるはずない。……甘味処も多いもんね。

で、だ。

本来なら、今この時間は確実に正し屋で仕事をしている筈だった。

整理して欲しい書類があるっていったし、その為にわざわざ最新のパソコンまで買ったから、てっきり初仕事は書類の整理とデータ入力だと思ってたのに。

「研修するにしたって、森はないとおもいまーす」

なんかもー……笑うしかない。

ご飯を食べた後、出かけるから車に乗るように言われて車に乗ったまでは覚えてる。

で、気づいたら見覚えのない森の中にいた。しかも一人ぼっちで。なんだこれ。

見覚えがないのは途中で爆睡した私が悪いんだけど、お腹はいっぱいな上に、隣から優しい感じの美声で「時間がかかりますから、眠っていても構いませんよ」なんて言われたら即寝落ちだと思う。

一人寂しく、森の中で小さな主張を試みたけど、やっぱり何の返事も突っ込みも帰ってこなかった。

うう…虚しい。せめて友達と一緒になら豪快かつ華麗に突っ込んでくれるのに!!

「にしても、なんで森なんだろう？事故ったって訳じゃなさそうだしなあ」

だって、事故なら近くに車が転がってたり、血痕的なものがあってもおかしくない。

それに事故るなら大体は崖とかに気付かなくてバーンっ！ってなると思うんだけど勿論、崖なんてない。

ちよつとした溝？とか段差みたいなものはあるんだけど、それで事故るとは思えなかった。

だって、木が生い茂ってる所為で車が通れるような幅がない。

立ち上がって周りを見渡してみたけど、湿ったような土と苔の生えた太い木が無数に生えているだけだった。

地面に倒れてる木もあるんだけど、座る気にはなれない。

まだ日中なのに殆ど陽の光が差し込まない所為で、カビとか生えてそうなんだよね。

座った瞬間にぬめっとして、つるっといったらやだし。

「て、うわああ？！なんでこんなところに木が……れ？木じゃない」

何かに躓いて、どうにか転ばずに済んでほっと胸をなでおろした私の視界に飛び込んできたのは、初の人工物。

頑丈な作りで、なんだか沢山お菓子が入りそうな登山用リュックサック。

誰のだー？落し物ですよー！なんて叫んでみたけど、当たり前のように返事はなかったから、中身をちょーっと思わせてもらうことにした。

「なんか生きるのに必要なものがいっぱい入ってる……って、この高そうな封筒！須川さんの手紙だ！」

私の中ではもう、高そうなもの〃大体須川さんの仕業っていう方
程式が完成している。

一緒に買い物するには悟りが必要なんだよね。

いそいそと手紙をあけて薄暗い森の中で読み上げる。

普通なら声に出して読んだりしないんだけど、声でも出さないとや
ってらんないんだよ。察して欲しい。

「むー、なにになー？」 優君へ 突然ですが、この森を自力
で抜けていただきます。用意したのは水と方位磁石（特別製なので
なくさないように。森を出られなくなりますよ）、地図と食糧、あ
とは携帯用の図鑑が2冊、携帯鍋、ナイフ、御守りと懐中電灯です。
火をつけるマツチも入っていますが、山火事にならないように後処
理はしっかりしてください。貴女なら多分、恐らく、八〇%程度は
大丈夫だと思いますが十分気を付けるようにして下さいね。健闘を
祈っています P.S. 到着地点は食事が美味しいことで有名な
旅館です。甘味も用意しておくので頑張ってくださいね っ て、
な、なんか突っ込みどころ満載過ぎて、突っ込む気力がまるでおき
ないんですけど」

ちらつとカバンの中身を確認したけど、確かに手紙の内容通りのモノが入っていた。

その他に、よくよく調べてみるとリュックには寝袋や毛布も括り付けられてるし、着替えも2着はいたから物凄く困るってことはない。地図で確認したら川沿いになんとなーく歩いていけば大丈夫っぽいし、川さえ見つければこっちのものなんだよね。

有難いことに、今いる現在地のとこに印もある。

西とか東とか北とか南とかって地図で見てもさっぱり分かんないけど、方位磁石があるし……大丈夫、だよな？

あ、でも結局ここがどの辺の森なのかさっぱりわかんないままじやね？なんて気づいたのは五分後でした。

洒落にならない森林浴（後書き）

やっとアップできたー！！

み、短いけどいい…よね。うん、だって章の始まりだし！

うう、一日に1話更新を目標にしてるんですけど…執筆速度って上がらないモノですねえ（遠い目

なにはともあれ、ここまで読んでくださってありがとうございます！

洒落にならない森林探索（前書き）

森と海なら、必要最低限の装備で生きていけると思う。

食べ物以外の外ならいっぱいあるしね！おすすめは秋と春。
調理いらぬのは圧倒的に秋。夏は蚊がいそうだからマジ勘弁。

洒落にならない森林探索

どうやら私は、大変な場所に不法投棄されたようです。

クレーターみたいな場所から脱出した私は、とりあえず、色々考えた。

最終目標は、旅館で食べる美味しい甘味。
とりあえずの目標は川を見つけること、川が見つかったら寝やすそうな場所を確保することだ。

あと、できるだけ食料も確保したい。

食料確保っていつても、食べられそうな木の実がとれる木はなさそうだし、山菜も食用野草もなさそうだから川で魚を捕まえるしかない。薦みたいなのがあるからそれで罾を作った方がよさそう。

なんで私が食べられそうな山の幸を知っているのかといえば、私が田舎に住んでいたから。

いや、田舎に住んできると娯楽が少ないからついつい、こー、山とか川で色々採取するのが楽しくて楽しくて。山菜とり、秋の果物狩り（山ぶどうとか栗とかね）、キノコ狩りなどなど、ホントに食べられるものと食べられないモノ、ついでに現代社会には到底必要ないよーなサバイバル術が自然に身についたわけです。あんまり嬉しくないけど、有難い。

「森の中なのに、なんでこんなにマイナスイオンを放出することを放棄してるのさ」

大体、変だと思っただよね。

私の知ってる森は、ここと同じくらい木が沢山生えてても、陽の光が差し込んでた。

鳥の声も、虫の鳴き声も、木の葉がこすれあつて出す心地い音も…

「（ここには、ない）」

それだけじゃなくて、この森は他の森とは“根本的なもの”が違つてるような気がする。

一体何が違うんだらうと歩きながら考えた。幸い、時間だけはたくさんあつたから。

歩いて、歩いて……気まぐれに携帯で時間を確認したらスタート地点から2時間近く歩いていた。

水の流れる音はまだ聞こえない。

耳が拾う音といえば、枯葉の上を歩く私の足音や自分の呼吸音くらい。

足を止めると、しいん、と耳が痛くなるくらいの静寂に包まれるのが嫌で私は五分だけ近くにあつた岩に腰を下ろして休んだ後、また地図と方位磁石を頼りに歩き始める。

山歩きには慣れてるからまだ疲れてはいないけど、少なくとも日

が沈む前に川を見つけない。

雨が降ってる時に、水の近くにいるのは危ないけどそうでない限りは川辺で野宿するのが一番いいって教わった。理由はいざという時の飲み水が確保できるからだ。

それに、きれいな川だったら魚も捕れるし、水辺でとれる食用野草は結構多い。

「あ………そ、つか。変だ変だっと思ってたけど、生きてないんだ、この森」

いろんなものが、生きてない。

厳密に言えば森——…木とか森を構成してる一つ一つ自体は生きてる。

例えば、土の中の微生物とか大嫌いなミミズとかね？確認してないけど、きっといるはず。

あー、うーん、上手に言えないけど、生き生きしたマイナスイオン溢れる森じゃないのは確かだ。

できるだけ長居はしたくないのでキリキリ歩こうと思います。
ええ、キリキリ歩きますとも。

決意を固めて歩くこと三時間、時刻は午後3時30分。

ご飯を食べるのを我慢して無心で歩いた甲斐があつて、うつすら水の音が聞こえてきた。

ちなみにご飯（カロリー〇イト、チョコ味！結構好きなんだよね）は一日2本。それで計算すると12日は持つ計算だ。本当はもっと食べたいけど、何かあるかわからないし、無事にたどり着けるかどうかわからないから余裕をもって置くにこしたことはない。

でも、やっぱりお腹は空くから、飴玉を一口に入れてる。レモン味です、うま〜。

ちなみに飴玉とチョコレートが食料の中に入っていました。流石です。遭難したとき、これらがあるのとないのとじゃ生存率がごばーっと違つてテレビの特集でいったし間違いないと思う。

「なーんか、疲れてるせいかもしれないけど……歩けば歩くほど、空気がでろろんってなってるような」

つまりは、山を登れば登るほどに、なんだか凄く空気が澱んでい

く気がする。

暗さは森の中で目が覚めた時よりも深まって、空を仰いでも生い茂ったよくわからない木の葉っぱで殆ど空は見えなかった。木ばっかりだし、似たような風景ばかりだから方向感覚もおかしくなってきたて、自分がどこを歩いてるのかわからなくなることが結構ある。

幸い、方位磁石と地図があるからいいんだけど、もしこれで何も持たずにはいったら完全に迷子だ。

食べ物になりそうなものも一切ないし、雨が降らなければ水の確保も難しい。

いや、そもそもこんな暗い森の中に入ろうって人間の気がしれないよ。

私みたいに不法投棄されたならともかく。

文句と森に関する疑問をぶつぶつ口にしながら（だって寂しいんだもん！なーんにもないんだよ？！）、水音がする方へ歩いくこと30分、突然、なんの前触れもなく黒い、影が遠くの方で揺れた気がした。

進行方向だからこのままいけばよく見えるはずんだけど……なんだか、凄く、近づきたくない。

近づけば近づくほど、シルエットがはっきりしてきて、ものすごく、嫌な予感しかない。

太い木の枝から垂れ下がるひも状のモノの先端には大きな、そう
人の、形をした黒いモノが音もなく、ぶら下がっ
てる。

頭では見えてるものが人だったもののはわかってるんだけど、そ
う簡単に認めたくなくてこの目で確かめるまでは前方の黒いモノに
ついては深く考えないことにした。

黒い影に近くづくごとに、変な汗が滲み出てくる。

知らないうちに体をできるだけ縮めて、影から身を守るような姿勢
で歩いていることにふと気づく。

「（もうこれ以上、近寄りたくないけど……でも、知らないといけ
ない気が、する）」

歩きながら、ぼんやりとこの森について考えてたんだけど、たぶ
ん…この森は“裏・雲仙岳^{うんせんだけ} 樹海^{じゅかい}”だと思う。

正し屋がある縁町から車で3時間くらいかかる場所に“雲仙岳”
って名前の山があった筈だ。

この山は日本の絶景50選に選ばれるくらい有名だから流石の私で

も知ってたんだよね。

この山、実は双子山になってるんだけど……正面にある雲仙岳のすぐ後ろにほとんど同じ大きさの、でも、雰囲気が真逆の山がある。その山は通称“裏・雲仙岳 樹海”っていわれていて、自殺の名所中の名所としてある意味、雲仙岳よりも有名なんだけど……。

「す、須川さあ……な、なんでこんなところに置いてくのー?! うう、黒いのあれだよ、絶対ぜったいアレだよな?! こんなところで野宿するのほんとに勘弁して欲しいんですけど」

裏・層仙岳はときどき、テレビで取り上げられる。

勿論、ニュースでもあるけど主に心霊番組で。

自殺の名所って基本的に、そーゆー特集で取り上げられることが多いんだけど、この山に限って必ず何かの映像や写真が撮れてるみたい。

「は、ははは……これはあれだよ、確実にお化けいるパターンだよ。間違いないよね」

自殺の名所〃仏さんごろごろ。

超有名心霊スポット〃お化けさんごろごろ。

うう、今日の夜は寝ないほうがいいかな？でも歩きっぱなしだから絶対寝ちゃう。

「（朝まで熟睡できればいいけど、金縛りとか初体験しちゃったらどうしよう！？須川さんに呪文的なもの聞いておくべきだった…？あ、でも確かバッグの中に御守りが入ってた……ってやっぱりどー考えても心霊スポット決定だ）」

がつくりと肩を落として頂垂れたところで助けてくれる人なんてどこにもいないんだけど、落ち込むくらいは自由にさせてほしい。

半泣きになりながら鞆の中から御守りを取り出して、手首にしっかり結びつける。

その上で落とさないように握りしめて、じりじりと黒い物体と間合いを取りながら前進していくことを決めた。女は度胸だ！根性だ！

よ、よし！須川さんからの御守りだから絶対効果はある！……箒。

「って、あ、あれ？あの黒っこの何処どこいったんだろ……？まさか移動した、なん、て、ことはないよね……？！」

恐る恐る、背後を確かめる。

ゆーっくりゆうーっくり振り返ってみたけど、何もなくてホッとした。心底ほっとしたよ！

で、今度は正面を向くときも細心の警戒心を持って振り向いた。

だって、よくあるパターンでしょ？後ろ向いた時は何もいないんだけど正面向いたらドーン！ってパターン。あれはないわー、ほんとないわー！！

「ハッ？！も、ももももしかしたら、さっきのって死体じゃなくて……えーと、えーと」

じわじわと物凄い汗が全身から吹き出てきた。

あ、あれー。なんかすごい寒いんですけど。

御守りを持つ手が震える、ついでに足も思い出したみたいにガクブルしてきた。

「や、やっぱり、お、おおおおお、おば、お化け……？」

うひょあああああ、と奇声が体の底から吹き出て声になった。声が出るとようやく生まれたての小鹿的なことになってた足も動き始める。

方位磁石と地図を左手に握りしめ、右手には御守りをがつつりもったまま、お化け（仮）がいた場所から逃走を図る。

好き好んでお化けのいるところにしようとする人間の気がしれないよ！！

全力疾走して、走りに走って、筋力の限界を悟ったところで私はそのまま崩れ落ちた。

服が汚れるとかもーどーでもいい。

息がしにくいどころか、息を吸い込む度に肺が「つかれたよー！はたらかせんなよー！」って悲鳴を上げてる。つまり、痛い。息苦しいんじゃないくて、痛い。こればかりは運動が得意な人にはわかるまい。

「っゴホ…げぼッ、ぜひゅー……う、運動…ぜひゅー……不足、だ」

深呼吸を繰り返して、ようやく状況判断ができるまで回復した。
冷や汗じゃないある意味健康的な汗をぬぐって、よろけつつも立ち
上がって、現在地を見渡す。

相変わらず木はあるけど、さっき私を取り囲んだ木とは少し、
雰囲気が違う。

それに土も少しだけ砂っぽいし、小石が多く混じってる。

なにより、水の音が近くから聞こえてくることを考えると、ほんの
数m先に川がある筈だ。

「な、何とか今日中に見つかった……ええと、次は寢床探して、乾

燥した木拾って、ついでに蔦で罫をつく…あ、でもその前に魚が住んでそうな川かどうか確認しないと。あーもー、ほんとよかった」

実は、今日中に川が見つかるかどうかわからなかったんだよね。だからすごく嬉しかったんだけど……この時の私は、すっかり忘れていた。

私がいるのが、かなり特殊だったことも、ついさっき見たモノのことも。

たぶん、これから私にとっての本当の始まり。

洒落にならない森林探索（後書き）

前のが少し短かったのでちょっと長め？に…と思ったんですが、書いてる最中は長く感じて、いざ読むと短い罷w

これから少しずつホラー要素がはいつてきます、おそらく。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

次もまた、頑張りますのでよければお付き合いくださいませ。

P S ・お気に入りの件数が1件から2件になっていることに気付きました。

ありがたやゝ、ありがたやゝ。すかさず拝み倒したのは言うまでもないと思います。うう、うれしすぎる！がんばるー！！

洒落にならない野宿 1 (前書き)

最近、美味しいモノに飢えています。

美味しいモノが食べたいのに、何を食べたいのか出てこない……く
ーちーおーしーやー。

洒落にならない野宿 1

この森の、夜を恐れるのは生き物として当たり前の行動だ。

目の前に広がる川を見た瞬間に、知らないうちに溜まっていたらしい疲労感が押し寄せてきた。

気が緩んだ瞬間に、疲労感が容赦なく襲ってくるのはわかっているけど、どーせなら寝るときに襲ってきてほしかったよ。今日はまだやらなきゃいけないことがいっぱいあるのに…。

現在進行形で私は、今現在川沿いを歩いています。

勿論、上流に向かって。

そうそう、肝心の川なんだけど幸いにも綺麗で、そのまま飲んで
も問題はなさそうだった。

ただし、いくら見た目が綺麗でも飲むときは煮沸消毒必須。

生水をそのまま飲むなんて行動は最終手段です。ええ、最終手段ですとも。

「流石、だなあ。川だろーと何処だろーと関係なしに空気が重苦しい。普通、どんないけ好かない森だって常に水が流れてるところは
大体清々しい空気だって相場は決まってるのに」

見る限りではごくごく普通の川だ。

幅は大体6〜7m位で川辺は浅いけど、中央に行けばいくほどそれ
なりの深さがあるんだろう。

この位の川なら1〜2 m程度の深さだろうけど。

川辺には大小さまざまな小石と上流から流れてきたらしい枝が転がってるくらいで、ゴミがない分中々にみられる光景ではある。でもやっぱり、好きじゃないモノは好きじゃない。

川から少し離れたところを歩きながら今夜の寝床を探す。

言っておくけど、森の中で野宿はしたことない。いや、町の中でも野宿はしたことないんだけど。

寝床の条件としてまず、優先したいことがあった。

「雨風以前に、このどんより空気が少しでも薄らつてるところじゃないと。絶対怖い夢見る」

いくら神に二物も三物も与えられた須川さんからの御守りがあるといっても、やっぱり不安要素は極力減らすに限る。

キョロキョロと落ち着きなく周囲を見渡しながら、ときどき遠くの方に黒い何かが見えることがあったが綺麗さっぱり見なかったことにして歩みを進める。ぶら下がってるのが森の奥の方に5〜6体見えた時は、さすがにゾツとしたけどやっぱり見なかったことにした。

目があるかどうかはわからないけど、目なんかあった日には色々
終わりだともう。

万が一を考えてこそこそ歩きながら、半ば必死に探し始めて数十
分。

川に近いからわかる、空の変化にうつそり目を細める。

まだ夏だから5時や6時では真っ暗にならないけど、流石に少しず
つ明るさを欠きはじめている。

少し焦り始めたころ、今まで見てきたものとは少し違う景観にな
ったことに気付いた。

樹や苔と小石ばかりだったのが、今じゃ木と苔と大岩小岩中岩に
変わったなーと思っていたら、壁のような、岩肌剥き出しの崖が現
れた。

岩がゴロゴロしてたのは間違いなく、この崖から落ちてきたものだ
ろう。

…とつさに、落石注意の看板がないかどうか確認した。

なかったけどね!!

歩いてる途中でみたのは薄汚れてなんか赤茶色の何かが付いたのだ
けだ。

文字は辛うじて読めたよ？読んだ瞬間に、読むんじやなかったって
思ったけどね！

そつと元あった場所に看板を伏せておいたのは言うまでもない。

お蔭でこの森はインスピレーション通り（？）自殺の名所だって
確信したけど。

いらない、いらないよ！そんな確信ッ！！

「あ、でもなんか良さそうな所みつけ。洞窟、なのかな……？」

崖、といつてもそこは石をくりぬいた用な場所を見つけた。

耳を澄ませば水の流れる音が聞こえてくる。
川のある方へは10m程度なんだけど、木があるせいで川自体は見えない。

「立地条件は優良！さて、問題はこの洞窟の中、だよー……な、
中に黒いのとか仏さんとかがゴロゴロしてないことを切に願おう。
あ、あと熊とかいないといいな」

持っていた地図と方位磁石を一旦、背負ったバッグにしまいこん

でから、ズボンのベルト部分にひっかけて懐中電灯を手取る。反対側の手には相変わらず御守りを握りしめていますとも。黒いのに遭遇しないと言い切れないからね！

「よし、お、おじゃまします」

こそこそと体を縮めて、洞窟の中に潜入する。でも、洞窟に足を踏み入れた瞬間、拍子抜けした。

「洞窟っていうよりは“一人用かまくら”って感じ、かも」

手を伸ばして少し余裕があるくらいの広さだけど、雨風は十分凌げるし、入り口が凄く大きいわけじゃないから熊は入ってこられないだろう。

こーゆーときばかりは背が小さくてよかったなーと思う。人間もいつか伸縮自在になれば素晴らしいのに、なんて呟きながら、天井やら壁やら地面やらを照らして確認を続ける。

変なものはなく、かえって過ごしやすそうだった。

崖というよりも石に似た質感の壁や天井にあたる部分は特に汚れて

いる訳でもないし、返り血だとかそれに類するものは見当たらない。地面だって掘り起こしたような跡がなければ、死体も白骨も動物の死骸も見当たらなかった。

「あんまり澱んだ感じもしないし、ここにしようかな。あつたかそうだし、ギリギリだけど足も伸ばせそうだし上々だね。この森にあるんじゃないかったら絶好の秘密基地になるのになあ」

もつたいないもつたいない。

そんなことを呟きながら、歩きながら集めていた枯れ木や折れた枝を寢床に置いてから近くを探索することにした。

川の水を携帯用の小鍋にいれる為に川辺へ向かう。

途中で蔦^{つた}を取って、編み編みしながら川辺周辺を見渡す。

まだ明るいけど、山の天気は変わりやすいので、さっさと編んでしまうに限る。

ちなみに、編んだ蔦は石などで作った囲いの中に仕掛けておくのだ。

上手くいけば魚が捕れる。うまくいかなければ何も取れないけど、明るくなったら沢蟹^{さわがに}でも探そうと思う。沢蟹、お味噌汁にすると美味しいんだよ！

あ、調味料も少しだけバッグに入ってた。よく見てなかったから気づかなかっただけ、ほかにも簡単な救急セットもあったから

1 週間はもつ筈。

ふ。なんだか本格的なアウトドアでもやってる気分だよ。

「目的地にたどり着くところに野生の女になってたらどうしよう。とりあえず朝一番に魚の有無を確かめて、お湯沸かしたらタオルで体拭こう……髪も洗いたいけど……水が冷たすぎなかったら最悪川に特攻だな。人もいなさそーだし、すっぱんぼんになっても恥ずかしいところがいいよね！」

流石に人がいたら一瞬悩むかもしれないけど、人がいないなら悩む必要もない。

バツと脱いで、じゃばつと水浴びだ！

川で水浴びといっても深いところまで行く気はさらさらない。

深いところに行けばいくほど足を取られやすくなるからだ。

だから浅瀬から少しだけ進んだ、でも中央に近づきすぎない場所でする。

罾を完成させて、それを設置したら素早く川から上がって水をくむ。

水をこぼさないように注意しながら、今日の寢床へ戻り鍋にふたをしておく。

虫が入ったら嫌だからね。

「枝、もうちょっと拾ってこようかな。川はいいとして、このあたりも気になるし……黒いの、いないよね？」

安全は確かめておくに越したことはない。

寝ている間に取り囲まれてました、残念！とかつていう状況だけは断固しても避けたいのです。

某有名ホラー映画の髪の長い女性みたいなのと寝起き一発で遭遇したら昇天できる自信がある。

……かといって、須川さんみたいな美形の顔があるのも勘弁だけど。

普通の起床をすべく、私は周囲探索を決めた。

暗くなったら嫌なので、歩く範囲は狭くする。

念の為にしっかり地図と方位磁石、非常食が入ったカバンを持っていく。

最悪、戻れなくなってもこれさえあれば何とかなるからだ。

懐中電灯は装備済みだし、御守りに至っては肌身離さず握りしめている。

「んー、とりあえずは脅威になりそうなものはない、かな？」

相変わらず、どんよりした空気だけど他のところよりはマシだ。

考えたところで答えは出ないんだけど気になる。

川の近くだから、って訳じゃないと思うんだよね。

水自体は綺麗でも空気が澄んでるって訳じゃなかったし。

本当に変な所だなー、なんて考えながら乾燥した枝を拾いあつめる。

ついでに、お茶になりそうな野草を見つけたのでそれも摘んでおい

た。
乾燥させるのも悪くないけど、煮出せば十分お茶として飲める。

こついう知識の源は近所のお婆ちゃんだったり、お爺ちゃんだったりするんだけど……こんなところで役に立つとは思わなかったよ。

「お。これ確か擦り傷とか切り傷に効くって草だ。ちょっと摘んでいこうかなー。ダメもとで、治らなかつたらそれはそれだ……し？」

木の根元に偶然見つけた薬草を摘もうと近づいたまでは良かった。そんでもって、屈んで手を伸ばしたのもまだまだ問題なかったと思うんだ。

ちよつとアレだったのは——……偶然目についた薬草のすぐ傍に見慣れた、でも見慣れない生き物が転がっていたこと。

「す……雀って、美味しいんだっけ」

盛大に混乱していた私の口から出たのは、かなり、色々間違った一言だ。

お腹は空いてたけど食べる気はなかったよ！ほんとだよ！！
ただ何となく、近所に住んでたお爺ちゃんやお婆ちゃん方がもこもこでふわふわな寒雀かんすずめを見て懐かしそうに話してたのを思い出しただけで！！

遠くから、もしくはそれなりに近くからは見た覚えのある、庶民的かつ愛らしい鳥を私はマジマジと観察した。

木の根元に転がった、両掌に収まるサイズの鳥は雀とよばれる種類に間違いない。

ただ、ふかふかの羽毛と艶やかな羽が赤茶色で汚れていた。

私から見て右側の羽が広がって、何かにかまれたような生々しい傷跡がある以外は普通の雀だ。

「すずめー……こんなになってどうしたの。お前さん、ふつー空飛んでるから普通はがぶつとやられないでしょーに」

そつと小さな体を手で掴んで、傷に触らないように地面から持ち上げる。

持ち上げるとほんのり温かった。

丁度薬草も見つけたし、薬草すり潰したやつを塗って包帯巻けば完成だ。

効くのかどうかはわからないけど、何もしないよりはいいと思うんだよね。

薬草を摘んで、しっかり枝を鞆に結び付けてから雀を両手で持つ。御守りは手首に結び付けてあるから問題なし。

「この森で生きて生物にあったの、すずめーが初めてかも」

よしよし、と頭を親指で軽く撫でてから駆け足で帰路につく。

怪我をして弱ってるすずめーには悪いけど、正直、かなり救われた。掌から伝わってくる温かさは、気味の悪い森に一人ぼっちで不法投棄された私にとって神様に近い。

変な黒いのはいるし、鳥の鳴き声すら聞こえない、自殺の名所で動物とはいえ、いるのといないのでは雲泥の差だ。

無事に元気になってくれるといいな、と心の底から思った私はまだ、衝撃的な事実に気付かない。

.

洒落にならない野宿 1（後書き）

すずめー、を飼いたいと冬にもこもこしたのを見るたびに思います。
……ときどき、雀みると焼き鳥を思い出す。じゅるり

ここまで読んでくださってありがとうございます！

洒落にならない野宿 2（前書き）

そういえば、数年前、ホラー小説を書いて半ば憑りつかれていたことがありました。懐かしいなあ…。

原因は多分、ネットで見まくっていた心靈写真及び映像。靈感？そんなものの微塵もありません。

洒落にならない野宿 2

注意：ちよつと、生々しい（流血的な意味で）表現があるので苦手な方は から下を読まないことをお勧めします。大丈夫だよーん、とおっしゃる方はずずいーっとお読みください。

何かが争い、食い合う音を聞きながら堕ちていく……

もともと、辛気臭くて陽の光が届きにくい森だったのに、どーしてこういう時だけ色がつくんだと文句を言いたかった。

だって、お日様が真上に上っても殆ど光を取り入れなかったのに、沈みかけて異様に赤い夕陽だけは取り込むってありえないと思う。いや、あつても私は許したくないね！凄く気味悪いから。

薄暗かった森は、燃えるような赤に近い橙色に染められ、黒みを帯びた木や枝、葉……土に至るまで、まるで血液をばら撒いて乾燥させたような色になっている。

わかり易いのは固まりかけた血、つてところだ。

ほら、うっかり包丁で切ったりとかカサブタが生乾きの時の色。

それが濃淡の違いこそあれど、容赦なく一面に広がってるんだから不気味だと思う。実際、不気味だし。

「すずめー……おまえもこんな物騒かつ不気味極まりない森の中で大変だったね。私と違って空飛べるから自由自在なんだろうけど、鈍くさかったからカプツってやられちゃったんでしょ？大丈夫だよ、私、生きた鳥は捌いたことないし、捌く予定もないから安心してね」

サラサラの羽毛（まさしく羽毛だ。うん）を指で撫でながら、私は一生懸命話しかける。

正直、自分で何を言ってるのかはわからないけど、こんな音のない森で弱つてくのは自分だったら勘弁してほしいもん。多少、なんか色々よくわからなくても音はあった方がいいと思うんだよね！

両手でしっかりと雀の体を包んで、私は足早に夕日に照らされた道なき道を歩く。

少ししか歩いていなかったこともあって、私は比較的早く寢床と決めた場所にたどり着いた。

「……なんだろう、何の変哲もない洞窟もどきなのに凄くほっとする」

やっぱり、すっぱり収まる程度に狭くて寝るのに適した暗さだか

ら？

首をかしげつつ、そつと雀を入り口付近、一番やわらかそうな土の上に置いて、そそくさと寝袋を広げた。

勿論、というか寝袋を広げる下には川辺に行く途中に集めた綺麗な落ち葉や葉っぱを敷いてある。

高そうな寝袋を好き好んで汚すなんて庶民代表の私にはできないんだ。

クリーニング代とか結構高いしもったいないもんねー。

寝袋を広げて、その横に鞆を置いてからタオルを敷き、ペットボトルとつい先ほどむしった薬草を用意する。適度な大きさの石を見つけたので、鍋に汲んでおいた川の水を少し使って汚れを流す。

それから適当な石を同じように綺麗にしてからゴリゴリ薬草をすり潰せば一応完成だ。

「うわ、なんか薬っぱい匂い！昔の人の知恵ってすごいなあ……私なんかよりも頭使ってるんだろっなあ」

教えてくれた近所のおじいちゃんおばあちゃんに感謝しつつ、肝心の雀を土の上からそつと持ち上げる。

よしよし、まだ生きてるな。偉い偉い。

親指の腹で頭をなでなでしてから、怪我をしている所にペットボルの水をかけて傷口をきれいにする。

本当は飲み水のことを考えると川の水を使いたかったんだけど、煮沸消毒もしてないのであきらめた。

傷にばい菌が入って飛べなくなったら、雀だって悲しいだろうし。

傷口は綺麗になった。

「えーと、このできたてはやほやのすり潰した薬草をぺちよつと乗つけて――　なんか、鶏肉に香草練りこんでるみたいな気分だな――」

「……」

「でもって、包帯でくるくるくると」

見よう見まねで包帯を巻いて、救急セツトの中に入っていた小さなはさみで包帯を切り、ほどけないように結べば完成だ！

痛々しい傷跡は白くてやわらかい包帯の下に隠れたし、出血もあらかた止まってたから後はこの雀の根性に掛けるしかない。

よしよしと仕上げに頭を軽く撫でて、綺麗なタオルの上に乗せる。タオルは3枚あったから2枚は洗って使いまわせばいいし。

「にしても、真っ赤だなあ……ここが自殺の名所じゃなかったら素直に感動もできるのに」

そもそも、だ。

私に靈感なんて特殊なものはないと思う。

今までお化けを見たこともなければ、金縛りにあったことだってない。

嫌だなんて思う場所があったけど、周りの人も同じように感じてたし私が特別って訳じゃなかった。

黒いのが視えたのは、間違いなくこの森が特殊な場所だからだとおもう。

ほら、よく怪談とか番組の体験談再現みたいなのである心霊スポットにいった不思議な体験をしたり怖い思いをしたりする、アレだ。

あれって、霊能者の人とかが言うには“たまたま”お化けとかと波長があって、うっかり視えちゃったのよってな具合らしいし、今回見えたのはそんな感じのものだと私信じてる。

「超能力とか霊能力とかあったらいいなあ、とは思ってソレはソレ、これはこれ。実際に視えちゃったうのは嫌だなー……お目覚め一発、怖いお化けのドアップとか無理だもん、ほんとに。トイレの上やら下から髪の毛ぶわあああああ！みたいなのも無理。すっごく無理」

ないない、と思わず首を横に振った。

盛大な独り言だけど、ほぼ一日、超有名な心霊スポットかつ自殺の名所に放置されれば独り言や愚痴の一つや二つや三つは言いたくなる。

幽霊怖い、的なことをボヤキながらマッチを取り出してよく乾いた枯葉を乾いた枝の上に置いていく。

それからマッチで火をつけて、フーフーしながら火が消えない程度に大きくなるのを待った。

キャンプファイヤーとかは小学生の時にやったし、キャンプの経験もあるけど新聞紙やら燃えやすい紙、燃料を駆使してたから、枝と落ち葉だけっていうのは初めての試みだった。

最悪、タオルを小さく切って燃やすことも考えたんだけど……やってみるもんだなあ……。

そうそう、マッチって偉大だ。

火打石とか棒を擦り合わせて火を熾さなきゃいけないなんてことに

なつてたら確実に色々諦めてたもん。

「このお茶、結構おいしいかも。緑茶よりのハーブティーみたいな感じ？色も綺麗だし、うん。いけるいける。あー……きつと練りきりのお供に最適だ。無事にこの森から出られたらこのお茶で練りきり食べよう。そうしよう、もうこの荒んだハートを癒せるのは練りきりさんしかない」

お茶と共に今日の食事、カロリーメイトをゆっくり時間をかけて食べた。

その後、できることは寝ることだけ。

つまるとかつまらないとか以前にもものすごく疲れてたらしく、寝袋の上でごろんと転がれば数分で眠気に襲われた。

ぼーっとしながら、雀の様子を確認して、あくびと共に目を閉じる。

小さな洞窟の中から視えた景色は、闇に染まっていた。

光は勿論、虫の鳴く声も聞こえなくて、夜さえも溶けてしまっているような暗闇。

寢床にしている洞窟の中は、たき火のお蔭で僅かに明るい。

だからこそ、私は眠りに落ちるまで“本当に”恐怖するということを知らずにいた。

私はどちらかといえば、よく夢を見て、夢を見たことを覚えて
いる方だった。

内容はいつも空想と創造、もしくは願望が私の中で膨らませたり
縮ませたりしたもの。

大体カラーで、声もついてて味もするし、痛みのようなものも感じ
られた。

流石にコントロールすることは難しかったけど、小さなころはコントロールもできたから、寝るのが楽しくて楽しくて！……その所為で、友達からは「優ちゃんは良く寝るね」と言われ、大人からは「寝る子は育つ」というからきつと大きくなるわね」なんて言われた。

言っておくけど、縦にはあまり育たなかった。横には……うん、もう何も言わない。

とにかく、寝るのが好きだった私はそれなりに夢のバリエーションだって知ってる。

怖い夢だつて、見た。

誰かが死んだり、殺しあっていたり、憎み合っていたり、お化けがでたり、幽霊に襲われたり、呪われていたり、なにもなくなっていたり。

でも、それはあくまでも夢でしかない。

（な、に……？これ。こんなの、しらない）

夢の中は、真っ暗だった。

真っ暗ではあったけれど、そこには音と温度がある。

これは別に珍しいことじゃない。

普段よく見る部類には入らないけど、声や温度だけの夢だってあったから。

（これは……だれ？）

強烈な、感情が私に流れ込んでくる。

夢の中の中心はいつも“私自身”なのに、この日の夢は違った。

“私”の見る「私自身の夢」なのに、“私以外”の「私じゃない誰か」の夢をみている。

暗闇の中で、たくさんの声が聞こえてくる。

どれもこれも「苦しい」とか「悲しい」とか「辛い」だとか、拳句の果てには「憎い」「許さない」「殺してやる」「道連れに」などと物騒極まりない色に染まっていく。

そして、最後には 生々しい音と共に噛み砕かれ、嚼られ、引き千切られ……断末魔の叫びと助けを求める声を残して消えていく。

知らない、私の中にも存在するかもしれない……深い感情。

生々しい他人の声や感覚を借りて私はそれらをただ、傍観していた。

正直なところ、「私」には害なんて、ない。

でも、うつん……だからこそ、怖かった。

自分の夢を、自分の頭を、自分の心をじわじわ乗っ取られていくような恐怖。
私が知らない私ですらない、明らかな他人に浸食されていくような感覚は、どうしようもないくらい怖かった。

（醒めて…醒めてっ、醒めろ…ッ！！なにこれ、こんなの知らない！
気持ち悪いッ、醒めろってばっ！！）

何度も何度も呪文みたいに、馬鹿みたいに繰り返した。

その間、ずっと『何か』が“何か”を食らう音だけが響く。

まるでお腹を空かせた動物が夢中で、肉を喰い千切り、骨を噛み砕き、溢れだした血液を舐め、啜る音。

命を、食らいつくす音に私の夢は支配される。

もう、聞こえるのは痛みに呻く生き物だったモノが発する音と、まだ辛うじて繋がっている誰かの必死に助けを乞う、報われない声だけ……

.

洒落にならない野宿 2（後書き）

ここまで目を通していただき、ありがとうございました！
うむむ。ちよっとホラー（ホラーか？）っぽさが出てきたような出てきてないような、微妙な所に突入です。

雀かわいいよ、雀。

洒落にならない野宿 3 (前書き)

目指せ！せくしーしーん！！

と、掲げている時点で多分、自分は痛い人。

洒落にならない野宿 3

私を悪夢から救ってくれたのは、弱い筈の、強い存在。

私の悪夢を終わらせてくれたのは、悲鳴でも恨み辛みの声でも

なかった。

小さな、本当に小っちゃくて、うつすら聞こえただけなんだけど意識するとそれはしっかり私の中に入ってくる。

チチチチチ、という可愛らしい鳴き声は少しずつ、苦痛に満ちた音を消していく。

完全に聞こえなくなったわけじゃないけど……でも、親しみやすいその鳴き声にすっかり泣きそうになる。

夢の中だから、泣くことはなかったけど、でも泣きたいくらいほつとした。

じんわりと体の末端が温まっていく。

いつの間にか、冷たくなっていた指に安心感と血液が巡り始めるのを感じて深く、息を吐いた。

まだ、頭の片隅に悪夢の余韻が残っている。

絶対に普段の生活では聞くことができない沢山の声は頭の奥底で、反芻して安心感や血液と共に全身にばら撒かれていく。

（手…震えてる）

カタカタと震える手をぼーっとしたまま観察していると、小さな

音がした。

たき火の消えた洞窟の中は外と変わらない暗さで、夢の中みたいに真っ暗だった。

濃淡すらない完全な黒い空間に少しずつ、呼吸が浅くなっていく。

そんな中で、聞こえてきた音のは枯葉が擦れ合う、独特の軽い音。

枯葉なら、寝袋の下に敷き詰めてある。

そこから聞こえてきた音なら聞かなかったことにしてすぐに寝ることができなのに、音が聞こえてきたのは明らかに“外”だった。

「ッ……！！」

近づいてくる、そうわかった瞬間に私はあわてて両手で口を押えてた。

私だって、こんなことをしたって相手に息をする音が聞こえなくなるとは思ってない。

音は微かに、でも少しずつ近づいていた。

カサカサと自分の足音を極力消そうとしているような、そんな印象を覚える足取りだった。

私は体をゆっくりゆっくり ————— 音を、たてないように細

心の注意を払って ————— 体を丸めていく。

視線は、外につながる唯一の入り口に固定されたままだ。

視えないのはわかってる。

でも、どうせ目を閉じたところで広がるのは変わらない暗闇なんだから、少しでも相手の隙を見て逃げ出せる用意しておいた方がいい。ガチガチとかみ合わない歯が音を立てているのに気づいて、私は指を歯の間に挟んで音を止めた。

（気づかないで、そのまま、行つて…ッ！！）

お願いだから、と入り口をにらみつける。

鼻の奥がつーんと痛んで、瞳に涙が溜まっていくのがわかったけどそれを拭う余裕がない。

余計な音を立てないように細心の注意を払って、息を殺した。

（あ、れ……？ちよつとま、つて。音が、増えてる…？）

増えている、音に戦慄する私を放置して、音は増えていく。

沢山の音はいたるところから聞こえてきている。

それらが目指すのは、この洞窟なのかもしれないと考えた瞬間、頭の中に不安が一気に噴き出した。

「（これやばいよね！？どーかんがえても私、危ない感じだよね？！たしかにこの洞窟は寝るのにちょうどいいけど、集会と集合地点には向かない！幹事っ、いるならしつかり場所決めくらいしとけっ！幹事がいないならいいだしっぺ！もつとわかり易くていい場所あったでしょ？！なんでよりによってここなの！怖いってば！私が怖がっても出るのは涙と鼻水と奇声くらいだって考えりゃわかるでしょ！私より馬鹿だなーっていわれても知らないんだからね！弁解もフォローもしてあげないんだからっ）」

怖すぎて、なんだかもー腹立ってきたんですけども！

いつの間にか体の震えは止まっていたので啜っていた指を歯の間から外す。

来るなら来い！と八つ当たり気味に入り口をにらみつけていると、足音が一斉に止まった。

「（あ、あれ？も、もしかして私の開き直りが通じた？）」

それはそれでいいんだけど、緊張と不安がじわじわと戻ってきた。戻ってこなくてもいいってば！どっかに帰れ、恐怖心！！ぎゅっと手を握りしめた私の耳を大きな咆哮が突き抜けていった。

「（は……？）」

今のは、なんだ。

あっけにとられて思考を放棄した私の耳に、今度は悲鳴とも絶叫ともつかない声や唸り声、怒号のような音が次々に飛び込んでくる。何かの動物が喧嘩というより死闘を繰り広げているらしい。生々しい音がひっきりなしに聞こえてくる。

いったい、なにがどうして私の寢床の前で決闘なんぞ始めたのかはわからないけど、今のところは安全だ。

敵が自分の目の前にいるんだから、脇役かつ雑草的な私に構ってい

る暇なんて微塵もない筈だし。

よそ見してる間に相手にカプツとやられちゃ堪らないもんね。

最終的に生き残ったのがお腹一杯になってどこかに行ってくれればとりあえず、日の目は拝める。

……動物は好きだけど、野生の掟に首を突っ込む度胸も覚悟もないもんね！

もし外にいるのが犬っぽいだけじゃなくって、熊っぽいのか、荒ぶった鹿っぽいのか馬っぽいのかだったら間違いなく彼らの夜食になる。

私はこの森を抜けて、見つけた野草のお茶で美味しい練りきり食べるって決めたんだから死ぬわけにはいかない。どうせ死ぬなら美味しいモノ全部食べて存分にゴロゴロしてお風呂入って、昼寝してる時にして欲しい。

相変わらず聞こえてくる生々しい争いの音をBGMに、ついさっき見てい時のことを思い出した。

「（あの時のって、雀の鳴き声……だよな）」

雀といえば、枕元にいるはずの怪我をした雀くらいしか思い当たる節がない。

っていつても、所詮は夢の話だから枕元の雀が助けてくれた〜なんてお伽噺的展開にはならないのが現実だ。

色々想像力豊かな私でも現実と夢の違いくらいは認識できる！

……ときどき、寝ぼけて美味しいものと枕を食べちゃうことがあるけど。

「（でも、仕方ないと思うんだ。だって両手で抱えられるくらい大きくて美味しそうな豆大福が目の前にあるんだよ?! 食べないなんて人間じゃないよ）」

他にも食べ損ねた美味しいモノシリーズについて考えを巡らせていた私の耳に、再び雄叫びが飛び込んできた。

反射的に反応したことで我に返る。

いや、すっかり忘れてたけど外ではサバイバルな戦いが……って、妄想してる場合じゃなかった！

慌てて意識を“外”に向けると、唸り声も悲鳴も、物音もなにもしなくなっていた。

何もない、暗闇と重い静寂が広がっているだけでさっきまで“何か”がいた形跡も、きれいさっぱり消えている。

「……………ねよう」

多分、今日はもう何も起こらない。

外に出て確かめるといふのは、ちょっとした自暴自棄。言い方を変えれば、自殺行為。

そもそも、明かりが全くないから何があっても真っ暗で視えないから、朝にならないと何があったのかわからない。……朝になっても何があったのかわからない可能性がものすごくあるけど、それはそれだ。

「おやすみー」

あったことも見たこともない神様はきっと、私に寝ろっていつてるんだ。

もごもご小さくつぶやいて私は寝袋に潜ってようやく深い眠りにつ
いた。

目を覚ました私は、昨日作っておいたお茶を飲んで喉を潤して直
ぐに外へ出た。

寝床を後にする前に、雀を診たけど気持ちよさそうに眠っていた
のでそっとしておいた。
元気になるまで一緒にいてほしいけど野生の生き物なんだから、と
っとと治して森から出ていくのが一番だと思う。ここ、住むには向

かないからね。

外に出た私は、とりあえず昨日の夢だか現実だか全く判別がつかない時のことを思い出して周囲を確認してみた。

「やっぱり何にもない、か。動物っぽい足跡も、人間っぽい足跡も、毛も血の跡も……むむむ。夢の中で夢みてたってこと？」

そんな器用なマネができるなんて今まで気づかなかったけど、と少しだけ真面目な顔をしてみる。

いや、誰も見てないんだけど、雰囲気ってやつだよ。うん。

独り言を呟きながら、探索と調査をやめて目的の川に向かう。

昨日の罾に魚がかかっているかどうか確認して、居たらお持ち帰り、居なかったら罾を回収して今日の夜泊るところの近くに仕掛ける。

次に、川で体を洗う。

正確に言えば、汗とか泥とか汗とか汗とかを綺麗さっぱり洗い流して、ついでに身に着けてた下着を洗って鞆にぶら下げて歩く。

いや、あの、恥ずかしいよ?!ちゃんと人並みの羞恥心くらいあるよ!?

でもいいじゃないか！ここ人なんていやしないんだから！下着が乾くのを待つ暇があったら先に進んで少しでも早く森から出られるように歩く方がいいに決まってるじゃないか。美味しいご飯だって食べられる確率が上がるんだもん、こちとら必死だ。

「つ、つべたい……！！う、ううう……でも、我慢できない温度じゃない……夏でよかった。冬だったら確実に死んでたね」

裸足になってそのまま服も脱ぐ。

どーせ誰も見てないんだし、相手は魚だ。跳ねて服が濡れるのは勘弁してほしい。

滑りやすい川底の石に気を付けながらゆっくり進んで罨を覗き込む。

「……いた……！！……しかも3匹！うわあ、おいしそー！塩焼きにして食べよう！うん。あ、あとの近くで山菜も探そう。きつとある！ある筈だ……！」

きゃっほー！と思う存分喜んで、私は先に水浴びを済ませることにした。

魚は一度は言ったら出られないような罫を作つてあるのでご飯を食べ逃すなんて危険性はない。

だつたら早く身支度を済ませるに限る。

「魚が食べられると思つたらなんか水の温度も気にならなくなつてきた！いよおーし、今日も頑張つて歩くぞ！明日にはつけるように真ん中よりちよつと上までいつてやる！」

綺麗な水の流れる川で、成人した女が独り言を豪快に言いながら素っ裸で水浴びしてるこの状況こそ、たぶん異常だ。しかも、場所が自殺の名所として有名な森の中。

「……………独り言、ひかえようかな」

冷静になった時、ふと自分の現状を思い出してうなだれた。
私、山を下りるころには立派な野生人になってるかもしれません。
うう……腰に葉っぱとか巻いてたらどうしよう。

気が付くまで、もうすこしだけ……

.

洒落にならない野宿 3（後書き）

ここまで目を通してくださってありがとうございます。

作者としては頑張ってホラーを書いているつもりなんです。でも、あとで読み返すとどーしようもない三流ホラー？になっている罫。

あれー？（冷や汗

洒落にならない山登り（前書き）

本当は続けてアップしたかったのですが、仕事やらなにやらが重
なって全く書けなかった……む、無念！

…閉話とか、はさんでもいいんかなー……はさみたいなー……

洒落にならない山登り

私の知らない、知らなかった世界は想像してたよりもずっと近い場所にあつたらしい。

おあずけを喰らってる犬もきつとこんな気持ちなんだろうな、と火をじつと睨みつける。

川で水浴びをした私は、魚を無事に確保した。
それから、寢床にしていた洞窟の入口付近で火を熾し、魚を焼いている真つ最中だ。

じじじじ、と実に美味しそうな音と共に枝にさした魚が焼けていく。

荷物の中から取り出した塩で味付けして、川辺で見つけた野草は魚

一匹と一緒に鍋の中。

潮汁もどきでも、お腹が一杯になるのはやっぱり汁系だね。

ぐーと主張するお腹から聞こえてくる音に、空腹感が加速して行く。

生焼けの川魚は食べたくないからものすごく我慢してるけど、やることはもう殆ど済ませた。

荷物はまとめたし、お茶のストックも作ったから問題ない。

後は本当にお腹を満たして元氣よく歩き始めるだけ。

昨日は変な時間に目が覚めて、変な夢？を見たけどそのあとはぐっすり眠れたので体力的にはなんの問題もないし、あとは川沿いに頑張って歩けばいいだけなので気楽と言えば気楽だ。

なんの目印もない森を不安まみれのまま歩き続けるのは、体力的以前に精神的にきつい。

一人で山を移動するのは、想像以上に精神力がいる。

しかも私の場合、知らない場所にぼーっと投げ出されて予備知識どころか心構えすらできてない。

そんな山の中で必要最低限のものをうまく活用しながらゴールを目指すっていうのはかなり、大変なことなのだ。いや、楽しんでもうていえば楽しんでもるんだけど。

「あ、そうだ。包帯かえるよー、おいで」

「チュンっ」

「地味に賢い雀だね、偉い偉い」

タオルの上にいる雀は逃げる気配もなく、わさわさと近づいた私を不思議そうに首をかしげつつ、素直に包帯がある方の翼を差し出すような姿勢をとってくれた。

人差し指で頭と人間でいうと頬つぺた（鳥で言えば耳のところ）をもしょもしょ撫でてから、取り出しておいた包帯と魚と薬草をとってくるついでに採取した昨日の薬草をすり潰したものを用意する。

「……あれ？何か傷跡がさっぱりないんだけど」

「チチチチ」

「いや、あの、答えてくれてるのはわかるんだけど何言ってるのかまではわかんないんだ、ごめん。えーと、それで、羽の方は良い感じなの？」

「チュンッ」

「元気そうだし大丈夫っぽいね。一応包帯は巻いておくけど、明日見て大丈夫そうなら包帯は取るから、一足先にこの森から出て仲間と合流してね」

「……………」

ぶいつと明後日の方向をむいた雀に思わず首をかしげる。

何か凄く人間らしい仕草で拒否された気がするんだけど、気のせいだよな？

でも、ま。白い包帯が痛々しいけど元気そうだし—安心と言えば—安心だ。

「そういえば、雀……君、餌は？」

「チチチチ」

「カブトムシとかバッタとかカエルとかコオロギとかゴキブリとかは大丈夫だけど、芋虫系と毛虫みたいなのか蝶々および蛾は心の

底から無理だからね！ミミズなんて有益虫だってわかつちゃーいるけど無理にも程があるってもんだし、自分でどうにかできそう？」

おそろおそろ確認すると、彼だか彼女だか不明な雀は「任せておけ！」的な勢いで鳴いた。

ほっと胸をなでおろして手当を済ませた私は、雀をどうやって運びながら山登りをするか考えつつ、焚き火に向き直る。

香ばしく、とても美味しそうに焼けているのを確認して、ついでに鍋の方も味見。

うむむ、なかなか美味しい。野草が魚の臭みとかうまい具合に消してくれたみたい。

川魚じゃなくて海魚だともっといい感じになるんだろうけど、ここは川だから流石に海の魚は泳いでないもんね。うう、美味しい焼き魚食べたくなってきた。

もぐもぐとすかさず魚にかぶりついた私にならって、雀もぴよんとタオルの上から飛び降りて地面へ降り立つ。

そのままトトトと跳ねたかと思えば、おもむろに地面をつつき始める。

ああ、うん、餌ですね。私の嫌いな類たぐいの餌を食べていらっしやるんですね。了解です。

さつと雀から目をそらして目の前のご飯に集中する。

昨日は朝ごはんを食べたつきり、カロリーメイト1本だけだったからかなりお腹が空いてたらしい。

よくよく考えると、お腹すいてて当然だよな。

もぐもぐ咀嚼をしながらふと、昨日の黒い影と夢のことを思い出

した。

森を歩いているときに見た黒い影は確かに、人の形をしていた筈だ。頭もそうだけど手足だってそれらしいものがあつた。

まじまじと見たわけじゃないけど、あれは確かに人だの形をしていたと言ひ切れる。

「（でも、夢に出てきた殆どは獣みたいな、唸り声だった）」

人の唸り声を聞いたことはないけど、あれは間違いなく獣の唸り声だ。

悲鳴や絶叫は“人”のモノで間違いなかった。

でも、その発生源はおそらく獣で間違いないだろう。

「（喰い、荒らされてた…とかだったら私も危ない、よね。まさか日本で動物に頭から食べられるかもしれない心配することになるとは）」

たははーと食べ終わった魚の骨をパラパラとそのへんに散蒔いて（有機肥料だ！）、鍋を川で洗えば即出発できる。

リュックを背負って立ち上がった所で、下から雀の鳴き声が聞こ

えてきた。
どうやら「飯を食べ終わっ」たらしい。

「お前、どーしよつか。流石にリュックの中に入れるのはダメだろ
うしなあ」

しゃがみこんで、雀を見ると雀も当たり前だというように鳴いた。
もしかしたら私の言葉をわかってるんじゃないだろうか。
何か言葉でも話すんじゃないだろうかと雀を見つめていると、雀は
羽ばたくマネを始めた。

「ちょっと、だめだよ！一応まだ怪我人…いや、怪我鳥なんだから
！あーと、うーんと、肩はあれだし……よし、ここでいいか」

「チュンツ！チチチチチ」

「あててて。もしよもしよダメだって！こちよばしい…ツ」

頭の上に雀を乗せてみたんだけど、雀は嫌がる素振りも無く嬉し
そうに鳴き出した。
流石に頭の上でフンとかはしないと思う。しないといいなー。

いろんな意味での恐怖心を胸に、私は立ち上がる。
歩いてる最中に落っこちたりしないよね？

はじめはヒヤヒヤしながら怖々歩いていただけ、すぐに頭の上の存在にも慣れて順調に歩いてた。

川辺を歩くか川辺に近い森の中を歩くかで少し迷ったものの、結局川が見渡せる範囲で森の中を歩くことにした。川が見えなくなったら、また川辺に戻ってそこから歩けばいい。

そう決めてからは、随分気楽に山登りができた。

「んにしても、雀すずめーって呼ぶのも味気ないよね。貴重すぎるじゃない体験を共にしたことを踏まえて親しみを込めて“チュン”って喚ぶことにしたよ。ほら、チュンチュン鳴くし、響きが可愛いと思うんだよね。呼びやすいし」

「チチチチッ、チュンチュンッ」

「ごめん、抗議されてるのが喜んでるのかさっぱりわかんないよ…
頭の上だから見えないんだ」

頭の上で寂しそうに鳴くチュンに話しかけながら、ただひたすら獣道を進む。

ある程度まで登ってきたのか、徐々に傾斜がきつくなってきたけど、昨日ぐっすり寝たおかげで体力はある。

精神的にもチュンがいてくれるからまだ大丈夫。

逆に言えば、いなかったら今の私はかなり極限に近い状態だった確固たる何かを持って言い切れる！

いや、何かってなんなのはわからないんだけども。

頭の上にいるチュンに話しかけながら、4時になるまでは歩くと決めていたのでそれまでは頑張ることにした。時々、5分小休憩や飴を食べることで疲れをやり過ごしながら進もうと決意したのは確か数時間前だったと思う。

実際、岩つばいものや倒れた木を跨いだり登ったりしたけどそれなりに順調だった。

“それ”を見てしまうまでは。

「……す、須川さんのばか……!!」

地面に手をついて頂垂れた私はここで初めて、入る会社を間違えた
と心から思った。

洒落にならない山登り（後書き）

やっとupしたのになんたろうこの短さ。無念すぎる。

行き当たりばつたりにも関わらず、目を通していただいて本当に嬉しいです。ありがとうございます！

P S ・お気に入りが増えていました。すつごくすつごく嬉しいのに、なんだか申し訳ない気分です。精進します、ええ、頑張りますとも！

洒落にならない発見（前書き）

正し屋を書くたびに「優（主人公）じゃなくて本当に良かったな」なんて思う作者は多分何か間違ってる。

洒落にならない発見

見てしまったものを、見なかったことにできればいいと心から思う。

山に放り出されてから、今日で2日目。

まだたった2日目だから生きているのは当然として、チュンという可愛い同行者も増えた。

不可解かつ不気味なものに遭遇したりもしたけど実害はないし、ただ寝ぼけてたつてことも考えられるからなかったことにしてる。唸り声とかもその原理で空耳として処理した。

だってもし、幽霊だったよーんとかってオチだったら怖すぎる。

ただでさえ“自殺の名所”で、知る人ぞ知る“心霊スポット”という特殊すぎる場所に一人つきりで放り出されて容量オーバーしまくってるのに、未知との遭遇が加わったら確実にパーンってなる。頭的な何かが。

「……チュン、これは、どーみてもビジネス的なバックですよね」

ちゅん、と頭の上で小さな鳴き声。

鳥類に聞いたってわからないのはわかってるけど、聞かざるおえないこの状況。

急斜面の山を登った所で、発見したのは見慣れてしまった森に強烈すぎる自己主張をしている物体。

何が怖いって、自然の森って雰囲気丸出しのところにポツーンと妙に綺麗なビジネスバックがコロンと転がってる。

しかも、その横には靴らしきもの。

おそろおそろ、カバンが置いてある上を見る。

「（よし、いない）」

ほっとため息をついて、恐る恐る近づいてみる。
へっぴり腰なのは仕方ないと思うんだ。

腐りかけた人間と見たくないのはきつと全人類共通だろーし。

ビジネスバックが置いてある横の草むらを覗き込むと、そこには、
想像どおりの、でも想像とは少し違った形のものがあった。いや、
モノっていったらばちが当たるかもしれないから訂正しておくけど。

「……腐りかけてないにしても、人骨も、ちょっと……いただけな
いと思う」

ちゅん、と上から同意するような鳴き声が聞こえてきて私は思わず「そうだよなー」なんてつぶやいた。

黒いスーツは汚れは目立たなかったけど、Ｙシャツは薄汚れている。
ただ、靴下に泥がついてないのは少し不思議だった。

靴脱いで歩いたなら普通は泥、つくよね？

「遺書っぽいものもない……って、なんか、胸のところに刺さった形跡がある、よーな？」

どばつと冷や汗がいろんなところから分泌され始めた。

頭の中で流れているのは水曜サスペンス劇場で流れるテーマソング。咄嗟に思い浮かんだのは『エリートサラリーマン謎の失踪！雲仙岳の裏の顔と隠蔽された過去！』というサブタイトルの殺人事件。うわぁ、ってことは私もしかして探偵的なことしなきゃいけないのかな？

ミイラや腐りかけた死体、生の死体はちょっと嫌だけど白骨になっただけはあまり怖くない。

ほら、骨格標本とかあるでしょ？友達でちょっと変わった趣味の彼氏さんと付き合って、プレゼントで人体模型と骨格標本を買ったらしい。友達は医療関係の勉強をしたから助かったみたいだけど、私だったら美味しいケーキを買ったほうが何十倍も嬉しいんだけど。

「と、とりあえず地図に丸つけて……と。後は免許書と時計とか携帯とかあればそれも持って行って警察に渡したほうがいいよね。流石にこのまま放っておくのは気が引けるし。これ、ちゃんと家族の人に渡しますから、安心してください」

南無南無、と手を合わせてからビジネスバッグの中をあさる。声をかけたのは、化けて出られるのが怖いからだ。やだよ、目覚めた瞬間にオバケのドアップとか！

カバンを漁っていると財布を発見した。

中には少しのお金とカード類があったので免許書を抜き取った。遺留品の一つとして持っていくのは、写真入りの手帳を見つけたのでそれにした。

それ以外は手を付けずにそのまま置いておく。変にいじると証拠とかが消えちゃうって、はきもの刑事がいったもんね！

遺留品はちょうど良くバッグの中にあった未開封の封筒があったのでその中に入れた。

これでリュックの中でバラバラにならなくて済むよね。

免許書をちらっと見たけど、20代後半から30代前半の中々かつこいい男の人だったらしい。

「うーん…自殺っぽくはないけど深くは関わりたくない……あー、なんか、ぶら下がってるんですけど」

呟きながら歩き始めて、30分程度たった頃、今歩いている所から50mほど離れた場所に見えたモノに思わず顔がひきつった。

鬱蒼と生い茂った木々のから偶然に見えたモノは、昨日見た黒い

影とは違つと直ぐに分かつた。

あの黒い影は揺れないだけじゃなくて――…つて、あれ？あの黒いのつて服、とか身に付けてなかったような気がするんだけど。

それに気づいた瞬間、ブワツと鳥肌がたつた。

ついでに悪寒も感じた所でわれに帰つた私は、慌てて腕を擦る。

薄ら寒いつていうかなんというか…凄く気づかなきゃよかったと思つた。

「いく、べきだよー……な、生っぱかつたらやだなー！さっきみたいに骨っぽい感じになつてたら夢にも出ない、筈なんだけど。白骨つて近くで見ても標本見てるみたいでなんか怖くないし」

流石に、骨格標本を送られた友達の部屋になんとも泊まっていれば慣れる。

はじめはびっくりしたけど、服とか着てて完全にインテリア扱いだったし…慣れつつ怖い。

朝起きた時に、顔の真横に倒れてきたらしい骸骨の顔面があった時は、近所迷惑も考えずに大絶叫したけどさ…誰だつてそうなると思ふんだよね。

でも結局放っておくのは後味が悪いので恐る恐る、近づいた。

お決まりのように足元に手提げ鞆があつたからそこから免許書と時計を預かった。

これはポーチにいれさせてもらって、同じように地図に場所を書いておく。

「……わたしはなにもみてない、ほんとうになにもみてない、血の気のない真っ白い足っぱいのとかハイヒールとか黒くて長い真っ黒の髪の毛がだらあーってなっていたりとかそういうのはぜんぜんまるつきりなんにもみてない」

自分に言い聞かせるように呟きながら、本来の道に戻る。

一応目印でチュンとチュンのベッドになっていたタオルを木の枝に結びつけておいたので迷うこともなく無事に帰れたんだけども。

精神的にぐったりして帰ってきた私を出迎えてくれたのは、癒しの塊のチュンだった。

心配そうに首をかしげながら私の表情を伺う健気すぎる姿にうっかり泣きそうになったのは内緒だ。

動物ではあるけど、心配してくれてるっただけで嬉しい。

「チュン、もうこの森やダヨー!!!今なら『翼をください』って

曲作った人に勲章贈れる！本気で翼が欲しい…びゅーんとひとつ飛びでゴールしたい」

「ちちちちつ、ちゅんちゅんちゅん！」

「慰めてくれるの？いい子だねえ…ありがとう。も、もうちょっと頑張る…あ、あれだよ。マネキンか蠟人形的な何かだと思えばきつと…！」

リュックを背負い直してから、チュンを頭の上に乗つけて再出発。

この時は明るい歌を無理に歌ってテンションをどうにか上げようとしたり、好きなもののことを考えたりしてどうにか気を紛らわせることができたんだけど…やっぱり、心のどこかに視界に入った光景がずっと引っかかっていた。

.

洒落にならない発見（後書き）

短いですが、一旦ここで区切りです。

ここまで読んでくださってありがとうございます^^

洒落にならない発見2（前書き）

牡蠣が食べたい。ものすごく、ものすごく、牡蠣が食べたい。

牡蠣の酒蒸しと牡蠣フライが食べたい。でも、生は食べられない…

でも、殻つきの牡蠣は高い…お金、ない。ぐすん。

洒落にならない発見2

がつくりと、私は綺麗な落ち葉の上に崩れ落ちた。

時間は丁度4時を回ったところ。

遠くの方からカラスが騒ぎ立てる声が聞こえてくるけれど、それも長くは続かなかった。

耳を澄ませると川の音が聞こえてくるから、川からそう遠く離れていないのは間違いないんだけど…明らかに今までとは違うものが目の前にそびえ立っている。

「なんでこんな所に鳥居があるんだろ？神社っぽいのがあるわけでもないし、お寺っぽいのも見当たらない…よね」

周りの景色は、鳥居がある所為か、木が生えていない。

住宅街にある最低限の遊具しかない公園のような広さがある。砂場と滑り台、後はブランコ位なら設置できそうだなーなんて思いながら周囲を見回して、鳥居の奥に灰色の何かが見えた。

所々、色が剥がれた朱色の鳥居の奥にあったのは、苔が生えた犬の石像。

狛犬と呼ばれるものだ気づいたのは、少ししてからだ。苔に覆われているせいで全体の形はわかったんだけど、表情が全くわからない。

何となく座ってるのがわかるシルエットと、耳の具合とかで犬だろうと見当をつけただけだから本当はお稲荷さんかもしれないけど。

「今日はもうここでもいいや……疲れた」

脳裏をよぎるのはここにたどり着くまでに見た数々の、死体。

死体っていつでも殆どが骨になってたけど、中にはまだその、新しいものなんかもあったりしてガリガリとMP的なものを削ってた。

腐敗臭っぱいのがなかったのが不幸中の幸いなんだけど、正直、かなり喜べない。

流石、自殺の名所として有名なだけはあるよねー、なんて言いながら薄ら笑いが浮かんだ。

「でも、明日の朝、魚がいつぱい掛かってれば立ち直れるかもしれない」

楽しいこと、楽しいこと！とそこまで考えた結果、そこにたどり着いた。

見ちゃったものはもう忘れるか、気にしないことにするしかない。ただでさえ、不気味で薄暗い森にいるんだから気持ちだけでも、前向きにいかないと！

…本音？本音は、自分も木の枝に宙ぶらりんになったり、包丁でぐっさりて人生を終えたくないんだ。

まだ甘いものも死ぬほど食べてないのに死んでたまるか！

「チュン、今日はこのワンコさんの横で寝ようね。狛犬って確か神社とかにいる守り神的な偉い生き物だった筈だから、黒っぽいのかもどうにかしてくれるかもしれないよ」

「…ちゅん、ちちちち」

「……なんか、鳴き方にばりえーしょんがでてきたね、チュン」

「ちゅんちゅんっ」

相変わらず可愛らしい鳴き声だけど、チュンがなんとなく呆れてるのはさっきから伝わってきてる。そりゃ、頭の上でチュンチュン言われ続けたら、はんなりとは分かってくるものですよ。嬉しいような、切ないような…。

宣言通り、狛犬らしき石像のすぐ横を寢床と決めたら後は昨日のように枝を集めることから始めた。枝拾いのついでに川から水を鍋に汲み、集めた枝で火を焚き火をする。周りに木はないから山火事になるなんてことはないと思う。

「元々、森が暗いせいであっという間に真っ暗になるね」

「ちゅん」

焚き火が安定した時点で、もう当たりは闇に包まれ始めていた。

黙り込むと静寂が当たりを覆って、時々聞こえてくる音は焚き火の爆ぜる音だけ。

パチパチという音は枝に含まれていたらしい水分が蒸発する音だと

昔何かのテレビでみたっけなー、なんて思いながら川の水を沸かして作ったお茶を飲む。

夕食のカロリーメイトはついさっき食べ終わったから、疲労回復のためにぐっすり寝れば一日が終わる。

狛犬の横に寝袋を敷いて、ごろんと横になった。

芝生のような草が生えている御陰で、ふかふかのベッドとまではいかないまでも快適に眠れそうだ。

くああ、と欠伸をしてから寝袋のすぐ横にちょこんと座っているチユンの頭を撫でてやる。

気持ちいいのかグリグリと自分から頭をこすりつける仕草は何度見ても癒やしだ。

「そういえば、包帯取るの忘れてた。おいで、包帯とるよ」

「チチチチッ!!」

「そんな抵抗しなくても……もしかして包帯とりたくないの？」

「ちゅんっ！」

「……図ったようなタイミングで鳴くね、おまえは。まあ、いいや。」

明日の朝には包帯とるからね？」

「……ちゅん」

少し遅れて返事らしき鳴き声を返した野生の雀はピョンピョン小さく跳ねながら私の顔のすぐ横で眠る体制を取り始めた。

…本当に、野生、だよな？ なんか、目覚めた時から野性っぽさを微塵も感じてないんですけど。

私よりも先に寝始めた臆病であるはずの野生雀を観察してみたけど、答えは出そうにないので諦めて寝ることにした。
一日中歩きっぱなしだったことや、精神的なダメージが自覚している以上にあっただみたいであっという間に眠りに落ちた。

だから、疲れや睡眠欲によって注意力が普段以上に鈍くなっていた私は、頭上から熱心に視線を注がれていたことにも全く気付かなかった。

ついでにいうなら、眠っていたはずのチュンがパチリと目を開いて
じっとその視線の主を観察し始めたことにも気づかない。

だって、ほら、寝たあとだったしこれで気づくほづがどうかしてる
とおもうんだよね！

洒落にならない発見2（後書き）

み、みじかい!!（汗

最近リアルが忙しくて1日〰2日うつpはかなり難しい感じになります。

ストックとかないからなあ…orz

次は普通通りの長さでかけることを祈っています。がんばります、はい

んでもって…やっぱり登場人物が人間1人と雀1羽って厳しいです（爆

ここまで読んでくださってリがとうございました！

そして、アクセスしてくださってありがとうございます!!

閉話 観察というより高みの見物（前書き）

ちよつとばかり変化をつけようと思い、今まで殆ど出番のなかった上司様サイドのお話を挟んでみます。

れつつ・さんどいつちー！

閉話 観察というより高みの見物

巡り逢うべくして巡り逢った のかもしれない。

持っていた筆を置いた所で、今日処理すべき仕事片付いた。

墨が僅かに残っている硯と筆を手に専用の洗い場へ向かう。
硯と筆を片付けたら風呂に入ったら眠るだけなのだが、店が終わったら電話をすると雅が言っていたのでそろそろ電話がくる筈だ。

手を動かしながら、普段とほとんど変わらない作業を終えて風呂場へは向かわずに事務所の椅子に腰掛けて、冷めてしまったお茶を一口飲み下す。

「――…経歴は一般的、家族構成はやや特殊ではあるものの特筆すべき問題はないようですね」

机の上にある履歴書と“報告書”に目を通しながら、自分の目で確かめた情報を追加していく。

出会いは珍しい不注意からだった。

考えを巡らせながら歩いていた私に、彼女がぶつかったのだ。

私に衝撃は殆どなかったが、少し驚いて視線を下に向けると地面に手を付いたスーツ姿の幼顔の女性がいた。

状況を理解していないのか、口と目を開けて呆然としている様は、中々面白い。

周囲には、ぶつかった衝撃で投げ出されたと思われる男性用のビジネスバッグと草臥くたひれた求人誌があった。

物思いにふけっていると、電話のベルが鳴る。

時計は、10時を回ったところだ。

仕込みを終えて一息ついた頃だろうと推測しつつ、電話を取る。

「もしもし？」

『遅くなって悪かったな。あー、今大丈夫か』

「ええ、仕事も片がつきましたし、契約に必要な諸々の手続きも明日には完了します」

普段の仕事は8時前後には終わる。

今日はそのほかにも臨時の仕事があった為に遅くなったが予想の範囲内だった。

『っはー…相変わらずだな、お前は。完璧すぎんのも大概にしねえーといつかザックリやられんぞ』

「貴方と違って日頃の行いがいいので大丈夫ですよ。で、要件はなんですか？十中八九、彼女のことだとは思いますが、一応聞いておきます」

『わかってんなら聞くんじゃないよ、まったく、嫌味な奴だな。……なア、本当にあのちまつこいのを雇う気か？』

「そのつもりですよ。雅、^{みやび}あなたも気づいたでしょう？彼女は“こちら”の人間です」

こちら、というのは“視えない”人間やそういったものの縁^{えん}が薄い人間ではないことを言う。

簡単に行ってしまうえば、江戸川 優という女性には肉体を持たぬものの縁があるということだ。

一般的に、こちら側ではない人間は、私たち“見える”人間にとって一番厄介で扱いが難しい。

“見える”のなら余分な説明は不要であり、予備知識がなくとも1を見れば、2もしくは3くらいまでならば理解できる。

これが“視えない”人間ならば、1もしくは0から説明をしなくてはならない。

中には言葉で説明しても理解しようとしないうる者もいる。

こういう人間は自分自身に命にかかわる実害が生じなければ決して理解しようとしないのでから面倒極まりない。

『そりゃー…まあ、店に入ってきた時点でわかったけどよオ。ありや、どーいった特性持ちだ？俺らの系統じゃねエってことだけは確かだが』

「名刺の色は無色透明でした。私のような系統でもないでしょうね、近しいものは感じましたが」

『……オイオイ、お前さんでもわからねえのか?!』

「私にだってわからないことの一つや二つはありますよ。ただ、“彼ら”曰く彼女の傍はとも居心地がいいそうです。興味深いことに、神仏クラスの方もかなり好意的で、式になってもいいと言いついたものもいました。理由は霊力が好みだから、とのことだったのですが……」

『なんつーか、神ってそんなんでいいーのかよ』

「神によりますね。私の知っている方々はかなり人間に近いところで暮らしていたこともあって、神という括りの中では変わり者に部類されていますが実力はありますよ?」

受話器の向こうで聞こえる唸り声の御陰で彼の心境を推測し、ため息を吐く。

この黒山 雅という男も十分変わり者ではあるのだが、当人は全く自覚していないらしい。

山を降りて日常生活を営んでいる僧侶は少なくない。

けれど、大抵が寺や神社といった家業を次ぐか一般人に混じって就職し静かに生活しているものが殆どだ。

中には霊媒師や霊能力者などと名乗り仕事をするものもいるが本物は数えるほどしかない。

大概は“見える”だけであったり“感じる”だけしかできないものばかりだ。

「どちらにせよ、本物になるかどうかはいろいろ試してみないとわかりませんからねえ」

『試すって……、もしかしてお前ッ！！またあの無茶な方法で力を引きずり出そうってんじゃねーよな？』

「あの”とは“どれ”のことですか？」

『真冬に滝修行1週間と護摩焚き修行1週間ぶっ続けはないだろ。あと、ど素人に霊場で山伏修行はなァ……お前、真面目に教える気なかっただろ。ずぶの素人を放り込むのは命捨てるつつてるよーなもんだろーが』

「命を捨てる覚悟があると宣言し、契約したのは彼らです。それに、いつでも退避していいとも伝えて、ついでにいつでも脱走及び離脱できる状況も整えていました。そのことに彼らも気づいていたことも分かっていきます。なにより——耐えられればその後の修行にも耐えられるでしょう？」

『お前の修行はただの鬼の所業だ。修行じゃねーよ』

「私も始めは一般的な修行内容を紹介しましたよ。ですが、どうし

ても短期間でと言ったのは彼らでしたし、必ず修行をして身に付くものではないことや忍耐力や強い意志が必要だとも伝えました。それでも、と無理を言って修行を承諾したのですから自己責任でしょう？」

正し屋にくる人間は大きく分けて二通りいる。

まずは、依頼人と呼ばれる本来の仕事を持ち込んでくる方たち。彼らが居なければ商売は成り立たないので、基本的には歓迎している。

中には無茶を言ってくる方もいるが、こちらで定めた契約を破らない限り“客”として扱う。

問題なのはもうひと通りの人間たちだ。

彼らは依頼人としてこの店にやってくるが、どれも契約に違反する依頼を持ち込んだり、話にもならない要求を突きつけてくる。大抵、話を通じないので実力行使に出ざるおえない。

雅が挙げた修行の例は、実際に修行として行われていることだ。ただし、意図的に体力的にも精神的にも厳しい内容にした。

けれど、修行よりも厳しい事態に直面する可能性が非常に高いことを彼らは知らなかった。

それは、稀にある“本物”や“当たり”と呼ばれる質の悪いモノが相手になった時だ。

視えなければ避けることができず、退ける術と力がなければ引き込まれ、知識がなければ対策を練ることも実行に移すこともできない。

彼らは読経や呪符、神具を使いさえすれば簡単に封印または退けられると考えていたようだが実際はそんな簡単なものではないのだから。

実際、そういった状況に直面したときに必要なのは精神力と素質。他にも状況を判断する能力や実力、経験など多様な要素が必要で、それを補正もしくは具現化しやすくする手段や道具として呪符や神具を用いる。

呪符なんて買おうと思えばどこでも購入ができるし、神具も同じだ。もしこれらだけで、全てを片付けられるなら私たちのような職業の人間はいらなくなる……少し考えれば分かりそうなものだが。

この程度のことわからないまま相手の力量を身誤ってしまえば、その先に待つのは恐怖を伴う死か多大なる代償しかない。

『まあ、あの連中に関して言えば俺らにとってもいい“見せしめ”になったけどよォ…アレをあのちみっこいのにやしねーよなァ？』

「彼らと彼女とでは前提が違います。そもそも、勧誘したのは私ですし、色々と興味もありますから悪いようにはしません。まあ、じっくり時間をかける余裕もないので少しばかり強引な手段に放つてしまいますが黒と白を付けるので死ぬようなことはないでしょう」

恐らく、と心中で付け加えたが口には出さない。

それから暫く情報を交換してから電話を切った。

時計をみると十一時になる十五分前で、かなり長い間話し込んでいたことに気づく。

「やれやれ……明日から、賑やかになりそうですね」

風呂場へ向かうべく腰を上げた私の視線に飛び込んできたのは、彼女に“支給”する道具だった。

正し屋の事務所にはそぐわないそれらを受け取った彼女の反応を想像するだけで口元が緩む。

彼女はきっと、私と私の日常を変えてくれるのだろう。

さあ、高みの見物といきましょう
か
…
?

閉話 観察というより高みの見物（後書き）

とりあえず、こんな上司嫌だ。
怖すぎる。

読んでくださってありがとうございました！！

洒落にならない遭遇 1（前書き）

冬になるとおでんが食べたくなくなります。

ちなみにおでんの具ではこんにゃくが一番好きです。二番手は竹輪。こんにゃくっていえば白いのより黒いの方がレアっぽい気分になる。

洒落にならない遭遇 1

この日も変な夢を、みた。

始まりは真っ暗で、ぼつーんと暗闇の中に私が立っていた。

昨日もこんな感じの夢をみたからわかるんだけど、間違いなくこれは夢だ。うん、夢だ。

私の頭にあるのはこれが“夢”だという安心感。

目が覚めて真っ暗で……うう、もうやめとこう。昨日のはあれだよ、大分寝ぼけててお腹の虫が鳴らした音を誤変換したんだ！耳とか頭とかが！

「にしても、こんな服持ってた記憶ないんだけどな……来てる服はズボンだし」

自分の足と来た覚えのない白いスカートがひらひらしている。スカートなんてめったに履かないから、スカートの柄とか色くらいなら覚えてる。

「メルヘンな服着る夢を成人し終えて見るとは思わなかったなあ」

じーっと白スカートを見ていると無性にふわふわスポンジのショートケーキが食べたくなった。クリームは甘めがいい。

で、スポンジの間には生の苺をしっかりと挟んで、一番上には大粒の真っ赤な苺を所望します！

仕上げる

アールグレイにミルクを少し入れて、一緒に食べられたら例え自殺の名所だろうが、オバケがいっぱいいる廃屋だろうが立派な当分補給の時間になる。間違いないね、うん。

お腹がすいているらしい私の思考は、あっという間に甘いものに傾き始める。

時々、焼き鳥とかラーメンとか食べたいなーなんて思ったりもしたけど、サイドメニューです。

甘いものばかりだと舌が甘いのに慣れちゃうからね！

何も見えない闇の中で意味も無くニヤニヤしていた私は、ふと違和感を覚えた。

周囲を見回してみるけど、真っ暗なままで変化はない。

自分の体（といっても目に見える範囲だけ）を確認してみたけれど、足が細くなったとか背が高くなったとかそーゆー変化もない。

そもそも、違和感っていつても、ただ何となく“あれ？”って思っただけで根拠はないし、私に何かがあったって訳でもない。

敢えて言うなら、ポンツって頭の上に電球が現れた感じ？

なぞなぞの最中とかでもないんだけど、本当に何か、パツと何かがピコンツてきたのだ。

「なんだっ たんだろ、さっきの感じ。特に変な感じはしないんだけどなあ」

変なの、とボヤきながら髪をごしゃごしゃーっと掻き回してみる。

髪の毛がボサボサになったけど、もとよりボサボサだったから気にはならない。

それから少し考えてみたものの結局というか当然というか、答えは出なかったので考えることを放棄した。

はーっとため息をついたところで、遠くの、でも頭の中に響くような声が聞こえてくる。

ノイズの入っていない、調整不良のラジオを聞いているみたいな感じ。

声の感じからして男の人だってことはわかるんだけど、それ以外はわからない。

でも、暗くて重い。

墨化したホワイトソースみたいな、ドロドロしていて元の、本来のモノには戻らないような状態。

反射的に、聴きたくないと思っていたらしく耳を塞ぐように手を当てていた。

<……て、……ば、……んだ……>

聞くな、聴くなと念じても、それは頭の中に響いてくる。

耳を塞いでも駄目なのだと分かってしまつて、仕方なく手を外した。どうやつても聞こえてくるなら、諦めるしかないよねー。

開き直つてしまえばこっちのものだ。怖いものなんてなーんにもない！

「さア、どつからでもかかってこいー！」

< ど して、 おれ ば り、 こ な め あ
ん だ ？ ！ >

「……すいませんごめんなさい撤回しますかかってこないでください後生ですからー！」

前言撤回します！

言わなきゃよかった、言わなきゃよかった！猛烈に後悔をしながら
思わず後ずさる。

でも、真っ暗だから下がっている感覚はあっても、下がっているの
か進んでいるのかはわからない。

本気で勘弁して欲しいんですけど、心の中で盛大にボヤいた。

< どうして、俺ばかり、こんな目に合っただ！？ >

「へ………？」

< 俺は悪くない！俺は、俺は何にも悪くないのになんで、どうし
て……ッ！！ >

思わず、知らんがな、といいそうになったけど、でも、辛い時や苦しい時にこんな風に思ってしまうことがあるのは知ってる。

私だって、似たようなことを思ったことがあった。

どうして、なんで、私だけ？そんな風に考えるのは、周りが見えてな方からだって今なら言える。

けど、その時の私はわからなかった。

自分の気持ちの整理が追いつかないまま、現実だとか問題だとか嫌なことばかり積み重なって、上手く息を抜くことができない状態だったから……周りを見る余裕なんて、ある筈がない。

そもそも、そんな余裕があったらそーゆー自体に陥ってないよ。

「どうにもならないなら、どうにもならないりの対応があると思うんだけど……」

＜俺は悪くない、俺は間違っただけなんかない！！どうして、なんで

俺だけ…ッ！！>

「ダメだ、聞いちゃいねーですね」

< 私の、なにが悪かったの >

「しかも、なんか増えてるんですけども」

< アイツのせいで、アイツさえ…アイツさえ居なければ…ッ！！>

「……なんか、大分、まずい雰囲気だの夢、ですねー……」

ごくり、と思わず生唾を飲む。

夢なのにもものすごく嫌々な危機感を覚えるんですけど…？

反射的に引きつった口元と完全なるへっぴり腰で私の感じた危機感的なものが表現できてると思う。いや、無意識なんだけどね！！リアクション芸とかじゃないんですよ。

いつの間にか真っ暗な闇の中に沢山の光が浮かび始めていた。

気付いた時は3つだった、小さな炎みたいな光は点々と、数が増えていく。

それらは私を取り囲むように数を増やし、どんどん大きなものへ変化している。

はじめは、蠟燭の炎位だったのに手の平大にまで成長し……色も毒々しい赤色に染まっていく。

色が変わること自体は、少し嫌だなとは思ったけど恐怖を抱くことはなかった。

ただ、赤くなっていくのに比例するみたいに、声がどんどん洒落にならない感じになってること以外は。

始めに聞こえた男の声は支離滅裂になっていて、もはや言葉ではない。

次いで悲しそうな女性の声は恨み辛みに代わって今にも良く心霊番

組とかで見る怖い女の幽霊になりそうな雰囲気だ。髪が長くって、にたあって笑うかゆらあゝと出てくる感じの怖い奴ね。

あれが声を出したらこんな感じだと思う。

そして、最後に聞こえた八つ当たり気味な男の人の声はもはや、言葉ではなくなっている。

（早く、目を覚まさないと…ッ！！これ、昨日の比じゃないよね…?!）

冷や汗を大量にかきながら、必死に考えた。

夢の中で冷や汗をかく羽目になるとはおもわなかった！！とかなんとか思いつつ、一心不乱に起きる起きるとまだ寝ているらしい自分を叩き起す勢いで念じるけど起きる気配は全くない。

どんだけ眠ってるんだ私！暢気のんきにぐーすか寝てる場合じゃないですよ！！本人（夢だけど意識がはつきりしてるから本体？）が起きろって言ってるんだからちゃんと起きて！

うがーっとしゃがみこんで真っ黒な地面（一応立ってるし地面でいいとおもう）をベシベシ叩きながら半泣きで泣き叫んだ。

もう恥も外聞もあるか――!!――とりあえず起きて――!!――!!

.

洒落にならない遭遇1（後書き）

そういえば、昔、夢の中で怖い夢を見ても自力で強制終了がかけられました。

…今はもう、そんな器用な真似はできません。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

結局ストックは出来なかった……明日頑張ります…orz

洒落にならない遭遇2（前書き）

犬が好きです。

しかも、小型犬じゃなくって中型〜大型が好きです。

柴犬は文句なしに可愛い。

大型犬はゴールデンレトリバーがいい。

洒落にならない遭遇2

きつと生き物は、一人では生きていけないように出来ている。

私は今、炎の中にいた。

正確には炎のようなものに囲まれている、だけど。

夢の中で焼き殺されるなんて正直、御免被^{ごめんこつむ}りたいけど、その可能性は大いにありえるので正直笑えない。

ぐるりと私を取り囲んでいる炎（この場合は人魂？）の中には赤黒くなっているものもあった。

赤黒いものの一つに注意していると、唯一赤黒さを残していた中心部分の色が濃くなって――闇に溶けてしまいそうになった、そのタイミングで突然、掻き消えた。

真っ暗な景色に同化したのかな？とか見間違いかもしれない思ったりもしたけど、どちらでもないことはスグに分かった。

恨み辛み、妬みや呪いの言葉に紛れて聞こえる、悲痛な、もしくは声にならない絶叫。

驚いて周りを見渡すと、なんとなく目に止まった大きな橙色と赤の中間といった色合いの人魂が、散って消えた。ぐにやりと上下に潰されて、飛び散った小さな火が消えるより早くソレはこの空間から永遠に消えてしまう。

（なんか、今のって……なにかに、食べられちゃったみたい、な）

何となく、近所の犬が大きなお肉を嬉しそうにガブリと食べていた時のことを思い出した。

確か、山で迷子になっていた飼い主を見事見つけて、救助隊を呼んだご褒美、だった気がする。

あんまり高くないお肉だとはいつていたけど、豚だか牛だかのお肉の塊だった。

それにかぶりついて、嬉しそうに尻尾を振ってたっけ……可愛か

ったなあ。

ってそれどころじゃないよね、この状況！

ぽっかりと空いたスペースには、いつの間にか別の人魂が浮かんでいた。

それは弱々しい橙色だったのに、周りの影響を受けてかじわじわと外側から赤く変色していく。

水彩絵の具が溶け込んでくような不思議な光景。

きつと、こんな状況と火が人魂っぽくなければ綺麗だと思えるんじゃないかなー……普通にキャンプファイヤーとか花火とかそういう系統だと本当に綺麗だと思う。大変そうだけど。

ポカーンとしている間にも私と人魂の距離はじわじわと縮まって、1m近くはあったはずの私とひと玉との距離は半分は確実に縮まっていた。

嬉しくない。ものすごく嬉しくない！！

「って、ちょっと待った！さっきから食べられてる頻度高くなって

ない！？つか、色が全体的に黒ずんできてるよーな……黙っばい
声も、うつすらどころか明らかに混じってるし」

勘弁してください。本当に。

夢の中なのに、夢の中だって分かっているのに物凄くリアルな危機
感を覚えた私は再び一心不乱に目を覚ませ目を覚ませと祈った。祈
る通り越して、もうなんか念じまくってた。下手したら一種の呪い
だ。

「う、うわああああん！！もーなんで目エ覚まさないの！私の馬
鹿！寝に汚いにも限度つちゅーもんがあるでしょーが！！本体的な
私から起きろって指令が出てるんだからちゃんと起きてよおおお
お！！二度と井の中に甘いものいれてやらないんだか………ひい
いいいいいい！！ちよつと、ちよつとまって火の玉！！さっきよ
り近づくペース早くなってますん？！当社比で確実に1.5倍は早
くなってますから！マジ勘弁！ほんとにすいませんごめんなさい！
私日頃の行いが特別悪いわけじゃないんで見逃してください、なん
なら毎日なんかしますから！一日3回は食べてたオヤツも1日1回
に減らすからああああああ！！」

ゆるーしーてええええええ！！と半泣きになりながら土下座をした。

誠意を表すのに土下座は最上級のスタイルだって死んだおじいちゃんと言ったもん！酔っ払うと必ず「ばーさんに“ぷるぽおず”した時もこれが一番聞いたんだぞ！」っていつてた！ばーちゃんは「道端で泣きながら土下座されて可哀想になっちゃったのよねー、犬を拾った感じがしら？」って笑ってたけど！

傍から見たら、凄く間抜けすぎる光景だったとは思っ。

だって火の玉サークルにペコペコ半泣きで頭を下げてるんだもんね……土下座で。

急加速した火の玉にビビっている私をあざ笑うかのように火の玉は、笑い声や怒鳴り声、恨み辛みの呪いっぽい声を発しながら近づいてくる。

獣の唸り声も、消えては増える火の玉も徐々に大きくなっていてそれが手を伸ばせば届くような距離にきた時……

（あ、私の人生終わった）

「冗談抜きでそう思った。

近づいてくる悲鳴すら、なんだかもう嘲笑にしか聞こえない。もしくは生贄を前にして喜びまくってる悪魔的な何かの声だ。

土下座スタイルから開き直って、ぼんやりとその場で正座をした。

あぐらでも書いてやろうかと思ったけど、正座の方がコンパクトなので却下だ。

これでもまだ現世に未練があるので最後まで些細な抵抗をしてやろうと思ったのだ。ふふん！

人生短かったなーとか考えていると、どこからともなく、聞き覚えのある音が耳に飛び込んできた。

控えめではあったけど、それは確かに聞き覚えのある音。

思わず、その場で立ち上がりかけて、人魂が近くにあることを思い出した。

危ない、危ない。

結局、膝立ちの姿勢で落ち着いた私はパツと視線を周囲に巡らせた。

必死に周りを見てみるけど、火の玉しかみえなくて“うわぁ”と人事みたいな声が漏れる。

でも、まだ小さな声は聞こえているから、炎の壁のように立ちふさがるソレらの僅かな隙間から必死に探した。

（だぁぁあつ、もーっ！火の玉、ほんとに邪魔くさい！！）

焦りながら一つの音を探す私を嘲笑うように、火の玉のものとかわれる声たちが大きくなる。

それに比例して獣の唸り声や消えていく火の玉も増えたり、減ったりを繰り返す。

「ッ、ええい！！チカチカチカチカして目に優しくないッ！！ちゅーん！チュン、ちゅん〜！！どこー？！」

聞こえたのはチツチツチというチュンの鳴き声だった。

小さくて聞き取りにくかったけど、でも間違いなくチュンの鳴き声だ。

雀の鳴き声の区別するなんて器用な真似ができるとは思わないけど、頭にパツと浮かんだのはチュンの姿で、きつと、チュンの声なんだと思う。

そもそも、雀に知り合いなんてチュンくらいしかないし。

声を張り上げてチュンを呼び続けていると、手の甲に物凄い痛みが

走った。

……表現するなら、チクツビリッ！って感じ。
一点集中型の痛みだったよ！
思わず飛び上がった位だし、絶対血イでてる。
だってなんかそーゆー痛みだった。

にしたって、ちょっとした虐めですか？コレ。
私、夢の中とはいえ頑張ってたとおもうんですけども……足りませ
んでした？
頑張って山歩きして、怖い夢見たんだから褒美位くれてもいいと
思うんだよね。
困むんなら火の玉じゃなくなってケーキとか大福とかにしてよ、私の
脳みそ！！

痛みを猛烈に伝えてくる手の甲は、じんわりと血が滲んでいるのが見えた。

暗闇だけど、肌が露出しているところは白くぼんやりと浮き上がっているのかろうじて、その白いところにプクツとしたものがある。間違いなく、血だ。バツチリ出血してる。

うう……なんか血を見たら益々（ますます）痛くなってきちゃったんですけど。

「ちゅん！」

「……あのね、エッヘンって胸張られても凄く、痛いです」

「ちちちちちつ、ちゅんちゅんちゅん！！」

「うん、ごめん。何言ってるのかわかんないんだ……でも、今度とつかで鳥語講座とか見かけたらやってみるよ」

ちよつと、というか結構痛いけど可愛いから許すことにした。

撫で撫でと頭を撫でながら、ふと顔を上げる。

いや、別にここでそういえばさっきの人魂はどうなったんだろーと思っただけじゃないよ！

別に忘れてたわけでもないよ！

「あ、あれ…もしかして私、起きた…？」

自分が起きた自覚がなかったからビックリした。

多分、起きた自覚がなかったのは夢と同じくらい真っ暗だったからだと思う。

や、流石に周り明るいのにまだ寝てるんだわ…うふふ、みたいな自体にはならないよ？ホントだよ？！

洒落にならない遭遇2（後書き）

ちよつと尻切れトンボ気味。

むむむ・・・、でも一応“悪夢”はここで終わりです。悪夢は、ですけど。

ここまで読んでくださってありがとうございます！次こそ頑張ります。

洒落にならない遭遇3（前書き）

今の時期、森で野宿したら確実に凍死します。

B
y 北海道

洒落にならない遭遇3

起きたのは、わかった。

でも、それだけです。

夢とほとんど変わらない暗闇なのに、おどろおどろしいあの声も音も聞こえなかった。

なんだか、静まり返っているのが不気味で仕方なくて無意味にそわそわする。

落ち着かないのはきつと、さっきまでいろんな意味で賑やかだった場所から、突然静まり返った場所に帰ってきたからだと思う。

さっきまではあんなに怖かったのに、いざ目覚めてみると今度は現実の方が怖いと感じるんだから変な話だね。いや、どっちにしてもこの森自体が怖いんだけどさ。

なんだよ、自殺の名所って！私救助される確率ものっそいないじゃないか！とかなんとか心の中でブツブツ言いながらチュンを撫でていて、少し驚いた。

「……？チュン、どこ見てるの？」

「……………」

「いや、あの、流石にちょっと切な……あ、れ？」

チュンがじつとある一点を見ていることに気づいて、何気なく視線を向けてみる。

自慢じゃないけど横断歩道は何となく2度見してから渡ります。

その先にあるのは確かに暗闇だった。

真っ暗で、おそらく出ているはずの月の光も届かない陰鬱いんうつとした森に光っている何かが見える。

最高級のガラス細工を見てるのかもしれない、と一瞬考えた。

でも、流石に地上から単独で浮いているガラス細工や宝石は見たことがないから、違うんだろう。

「チュン、アレはなんかよくわからないけど……綺麗だねー」

思わずこぼれ落ちた独り言は、やっぱり独り言で終わった。

チュンはただ、じっとその赤い綺麗なものを見ている。

私もそれにつられて闇の中に浮かび上がる赤いモノを眺めていると、それがほんの少し近づいてきたような雰囲気を感じ、思わず目をこすった。

くしゅ、ともくしゃ、とも言えない、生きた草を踏む音が一定の間隔で4回響いて、跡形もなく空気に溶ける。

この、綺麗な赤の持ち主は動物なのだ！と、頭のどこかで告げられた。

お告げ体験は初めてです！ってそんなお馬鹿なことを行っている場合じゃなくなったのは、ほんの数秒前のこと。

いやね、背後にね、なんか、いるっぽいんですよー！！あは、あはははははっ！！

冷や汗と冷や涙（ひやつとして出てくる涙って感じです。うっかりでちゃったんです、普段は強い子だと思います、私）と悪寒を引き

起こしてくれたのは多分、昨日うつかり何度が目撃してしまった黒い人影。

後ろを確認したわけではないんだけど……奴と出会った時にバビビッ！と来た感じが似てる。嫌な方向に。

爽快さとは真逆の位置にありそうなこの感覚はそうなんども経験できるようなものじゃないこと位、理解し始めていますとも。現在進行系で経験しちゃってるからね！

黒い影が突如出現する直前、ずっと赤く綺麗なモノを見つめていたチュンが、甲高い、それでいて緊急事態を知らせるような鳴き声を挙げた。

よく、例えば“まるで火がついたように子供がなく”とかあるけど、ソレの鳥バージョン。

（チュンは、教えてくれてたのかな…、もしかして）

体中の羽毛を逆立てて、怖いのかプルプル小さく震えている癖に私より何十倍もちっちゃな体で私を守るように“何か”に向かって鳴き続けている。

なんだかもー、それを見たら悪寒とか恐怖とかそんなんどーでもよくなって、とりあえずこの可愛すぎる生き物を優先的に考えることにした。私には須川さん印のお守りがある。それに、塩だっである。明日の夜には意地でも着く予定だから、塩だっってちよっとくら

いなら使えるんだよ、大事に使ってたからね！

「ありがとう、チュン。ここに隠れててね…一応、水浴びは下から汗臭くはないと思うけど…居心地悪かったらぴょーいって飛んでつてくれてもいいし」

「チツ?! チチチチチッ!!!」

「はいはい、大丈夫だよ。怖いっちゃー怖いけど、チュンがいるし、おちおち死んでらんないよ。まだケーキも大福もお腹いっぱい食べでないし、新しく出来たクレープ屋さんの評価もまだしてないからね」

チュンを握りつぶさないようにそつと両手で掬すくい上げて、とりあえず、安全そうな懐（というか服の間）にいれた。
少しばかり、乳に鳥独特の爪が食い込んで痛こちよばしいけど、我慢できないほどでもないしチュンもチュンなりに体を落ち着ける位置を見つけたらしい。

「ちゅん!」

「か、かわええ……！！もしここを無事に出られたら写真撮らせて！
かわいすぎる」

「ちゅんちゅんちちちっ！！」

「へ？ああ、そういえばそうだったね………？あれ、なんかさ
っきのいなくなっただけ？」

チュンに叱られて視線を戻せば、そこにはもう、なにもいないよ
うだった。

とりあえず、寝袋から出て、その上に座り込む。
一通り周りを見たけど、さっきのザワザワくる感じは全くない。

「見間違い、って訳じゃなさそ………うつ！？」

変だなー、と呟きながら寝袋に潜ろうとした私の耳に、ぶちゅり、
ごりゅ、という生々しい音が聞こえてきた。

はじめに聞こえてきたのは、何か適度に柔らかいものの繊維を無理
やり引き裂いていくような音と骨のように硬い何かに当たってそれ

が一旦止まる音のようにも聞こえる。

ごくり、と私が生唾を飲むのを確認したように、バリバリと硬いモノを豪快に噛み砕く音が聞こえた。

ぎゅわあ　あ　あ　あ　あ　あ　！！

擬音にするなら、多分、これが一番近い。

怒号にも似たものすごい衝撃波のようなものが私がいる一体の空気を震わせた。

無意識に握り締めた寝袋と、胸の間でぶわつと羽毛を逆立てているチュンの存在を感じながら私は、身動きひとつ取れないまま固まっていると、四方八方から――…あの、黒いと同じ気配が現れる。

ひゅつと喉を空気が通って、私はそれっきり息をひそめる。

かつてないほどに緊張していると今の私なら言い切れる。

黒いの、バリバリと何かを捕食しているなにかに気づかれないように必死に気配を消そうと意識する。

心臓の音が頭の奥で聞こえているのに、気配にだけは過敏になっている様な気がした。

何かを食べるような音は、絶え間なく、黒いのが増えるに従って感覚が短くなっている。

多分、捕食しているなにかは、あの気味が悪い黒い人影を喰ってるんだろう。

どんなゲテモノ食いでアレは食べたいとは思わないと思うんだけど……たぶん、ものつすぐく悪食なのか飢えているのかのどちらかだろうと見当をつけた。もちろん、証拠なんてなにもない、ただの思い込みだけだね！

バリンボリン豪快に骨ごと噛み砕くような音が聞こえてから、どのくらい経ったのかはわからない。

でも、確かに何かが終わったのだと私は気づいた。

それは音が変わったせいでもあるし、黒いのを見た時の悪寒がナリを潜めたからでもある。

ごくり、と乾ききった喉を潤そうと体が無駄な努力を実行したけど唾液なんて出るはずもない。

喉どころか口の中自体が、カラツカラのサハラ砂漠か鳥取砂丘並に乾燥してるんだから。

はー、はー と自分の浅い、それでいて緊張し切ったような息遣いが耳障りだった。

米神や背筋を伝う冷や汗も不快で、明日の朝、歩く前に水浴びを使うと心に誓う。

多分、こんな状態でも私が気を失ったり、気が触れたりしないのはチュンのお陰だ。

自分より小さな生き物の存在があるから、私は自分を保っていられる。…ギリギリで火曜サスペンス劇場の説得景色並みに崖っぷちに
いるけども。

ぱた、と何かが落ちる音がする。

パタパタ、と連続してナニカ——…液体が、草の上におちる
ような……— 音が聞こえる。

そして、同時期くらいに耳と意識に飛び込んできたのは、さくつさくつと草を踏む人ではない重さの何かが近づいてくる音だ。

かろうじて手の届く範囲が、うすらばんやり見える状況でこれは怖い。とても怖い。非常に怖い。

どう、しよう。

なんの解決策も浮かばない私は、ただ、冷や汗を流しながらそんなことを考えて――……暗闇に、意識をさらわれた。

これが私にとって人生初となる失神でした。とーぜん嬉しくない。

洒落にならない遭遇3（後書き）

や、やっと書き終わった…二日目の夜のお話です。

次は三日目の朝！の予定。

あー、早く終わらせたい……！

ここまで読んでくださってありがとうございます！

P S .

お気に入りが増えていました…び、びびでびびでぶー！！（驚嘆の意）

あの、ほんとにありがとうございます。が、がんばるー！！

洒落にならない肉体労働（前書き）

鳥肉が好きです。

焼肉はホルモンとかタン元が好きです。ぶまい。

洒落にならない肉体労働

遠くの方で聞こえる可愛らしい囁りと不釣合すぎる鉄臭さに目を開けた。

ムツとするわけじゃないけど、確かに鼻につくそれに爽やかさとは真逆に行く目覚めを体験した、私はかなり不機嫌だ。
むっすりとふてくされた顔をして、かなり可愛くない顔をしている
自覚はあった。

でも、だーれも見えてないから不細工な顔しててもいいと思うんだ、うん。

寝癖でボサボサの髪をなんとなく手櫛で整えつつ、大きな欠伸をしてから、ペットボトルの水を一口飲んでようやく目が覚めた。口に何か入れないと目が覚めないのは中々不便だけど仕方ない。

ぼんやりしたまま、周りを見渡していると苔まみれの犬の像が乗っていた土台が目に入った。

そういえば昨日の夜はここで寝たんだったなーなんて考えているとものすごく近いところからチュンの声が聞こえてきた。

まだ半分は確実に眠っている頭で辺りを見回してみただけ、チュンの姿は見えない。

「チュン〜？」

「ちゅんちゅん！」

「相変わらずいい返事なんだけど、どこにいるのかさっぱりわかりません」

「ちちちちっ！ちゅん…っ！」

「うつひゃあ？！って、あー………そういえば、昨日ここに避難したんだっけ？」

そくだよ！と言わんばかりにドヤ顔をしているチュンに苦笑して、胸の間にすっぽり体を埋めているチュンを取り出す。

私が片手で“むぎゅ”ってやらないことを分かっているのか抵抗はせずに静かに身を任せて、おとなしくしている。

なんか、暖かい塊のチュンを取り出した御陰でちょっと風を冷たく感じた。

冬には湯たんぽ代わりにいいかもしれないけど夏の暑い日にはオスメできなさそう。

…絶対蒸れる。チュンも暑いだろうしね。

「いよおし、さっぱりする為に川にいくぞー！ついでに水浴びと魚の有無を確認して、今日の夜には旅館でおいしいおいしいご飯を食べてやるー！」

「ちっちっちっ、ちちちちっ！」

「え、チュンは行きたくないの？」

「ちゅんちゅんー！」

ブンブンばさばさ、と首を横に降ったあと猛烈に羽ばたく彼（彼女？）に慌てた私はとりあえず落ち着けと必死に……雀相手に説得を試みていました。うう、人間が恋しくなってきた。異文化（？）コミュニケーション難しい。ぼでいーらんげーじは辛^{かる}うじて通じる程度です。

暫く人間と鳥のコミュニケーション（互いにほとんど一方通行）をすること数分、先にしびれを切らしたのはチュンだった。
ふふん、雀よりは忍耐力があるってことだよね！私。

「ちちちちっ！」

こっちだと言わんばかりに目の前で飛んでみせるチュンの片翼には昨日巻いた包帯がまかれている。

飛べるなら外してもよさそうだなあ、なんて考えながらおとなしくチュンへ視線を固定させた。

少しの間、飛ぶ自分の姿を私が目で追っているかどうか確認したらしいチュンはパタパタと軽やかに宙を舞う。

地面からおよそ30cmくらいの高さで羽ばたきを繰り返し、やがて私の死角に静かに着地する。

勿論私も、ぐると体をその方向に向けて座り直した。

「……………もしかして、結構前から居た？」

「ちゅん」

呆れたような雀の視線を受けながら、私はようやく自分とチュン以外の生き物に気づきました。

私の目の前にいるのは灰色の毛色をした、大型犬……のように見える生き物。

目は閉じられていて、呼吸は静かだったけどお腹の部分が上下しているのて生きてはいるらしい。

ここまでならただ眠っているようにも見えるんだけど、そーは問屋が下ろさない。

『いや、あのもうお腹いっぱいです』と言いたくなるような自体が次々に起こってくれるんだ、この森は。間違いなくこの森は手加減というものを知らないね！

簡単に言うと、このワンコが私が先程まで不快極まりない目覚めを体験した原因でした。

腹部のあたり

———
人でいうなら、横腹っぱいところ

結構豪快に。

から、赤黒い液体が流れ出ていました。それも、幸い、乾いてはいるみたいだったけどかなり出血したのは間違いないだろう。

どうするのが一番いいのか、緊急事態に動き出した脳みそを活用して考えてみた。

1・川まで背負っていく

2・川まで横抱きにしていく

3・川まで引きずっていく

とりあえず、3は却下だ。引きずられる犬が可哀想すぎる。

1か2で迷ったけど、リュックは前にして犬は背中に乗せていくことにした。

川に連れていった後は患部やついでに全身を洗える範囲内で洗って汚れを落とさないことには、なーんにも始まらない。

綺麗にしたら救急セットを使って、ケガの手当を簡単にする。

勿論、薬はチュンの片翼の治療に使った薬草だ。

あの薬草は水辺の近くにしか生えないみたいなので川に運ぶ方がいいろいろと便利なんだよね。

「でも、血がつくのはちょっとアレだなー……って、そうか！どうせ私も水浴びするんだし服に血がつかないようにはじめっから脱いでいけばいいんだ。蚊もいないみたいだし、かぶれそうな植物はなかったから大丈夫でしょ」

私の中で、この犬を放って先に進むという選択肢は何故か浮かばなかった。

別に特別親切な訳でもないし、優しいわけでもないことくらいは分かっているつもり。

どこかで見たり聴いたりしたゲームやら漫画やらに出てくる心優しいお姫様やら薄幸そうな美女もしくは美少女なんかを目指しているわけでもないし、なりたいたいと思わない。

そりゃー、困っていて“私”に助けを求めてくれた人なら、求めてきた相手が好きか嫌いかを判断した上で手を貸すし、一般的に手を差し伸べたほうがいいと判断できるような状況だったら迷わず手を貸すくらいの人間味はありとおもう。

とりあえずは善良な一般市民である私がだーれも見えていないこの裏・雲仙岳（とても有名な自殺の名所っていうオプシオンが付いてるよ！）で犬っぽいモノを助けようと思ったのは、先祖代々私の家はモフモフ好きだったからだ。

育ての親である祖父母曰く、江戸川家の血筋や江戸川家に嫁や婿に

くる人間は代々、甘党でもふもふした動物が好きらしい。

あ、もふもふしてない動物も嫌いじゃないよ！

私にとっての天敵はゴキブリにあらず。

ミミズ類や芋虫毛虫の類、後は蝶々と蛾だけだ。

カエルは素手で未だにつかめるし、蜘蛛だつてあまり大きすぎなければ手で捕まえてポイっと外に放り投げられる。バッタとかコオロギは勿論素手で捕獲が可能だ。

…どじょうは最近掴んでないから微妙なラインだけど、コツさえ思い出せば問題なく捕獲可能ですよ？

ぽぽぽーいつと服を脱いでリュックの中にしまい、寝袋や出していた荷物を収納し終えたらそれを前で背負う感じで準備は完了だ。いよっしゃ！いっちょ気合入れていきますかッ！

「ふんっ！……ふんぬぬぬぬ〜っ！！よっこいしょお！！」

犬の前足を肩に乗つけて、ぐいっとな犬の体の下に自分をねじ込む形で立ち上がる。

一応怪我しているから慎重に…でも素早く、犬のお尻の当たりを手で支え、なんとか犬を背負うことができた。

うーん、昔話で薪を取りにいったおじいさんの気持ちかわかる気がする。

重さで軽い前傾姿勢になるんですね、だから腰が曲がるんですね。わかります、わかりますとも。

えいさほいさと歩く私の頭にチュンが乗る。

実際に重みはほとんど感じないけど、何となく重くなった気がするのなんだろう。…自意識過剰？

この森は、少し一般的な…私が知っている森とは違う。

はじめの一日と二日目の最初の方は腐葉土とかいろんな人がパツとイメージする森（凄く暗くて不気味だったけど）に似ていたけど、今は苔のように地面全体がモシャモシャしたもので覆われているところが多くなった。

眠っていた場所は、珍しく背丈の短い芝生のような草が生い茂って寝やすかったんだけどね。

川へ近づくほど、大きな岩や小石が多くなっていく。

かなり歩きにくいけど、こーなりやもう意地と根性でたどり着くしかないだろう。

一歩一歩確実に足を踏み出しながら、昨日罌を仕掛けた場所に近いところにワンコを下ろそうかとも思ったけど……、よく考えたら今素っ裸だし犬も背負ったままだからこのまま川の中に突っ込んだほうが早いよねえ。

「そーなると、リュック下ろしてこのまま川に入ればいいか。チュンは自分で水浴びしてね」

「ちゅんっ！」

嬉しそうに鳴いて頭の上から飛んだチュンが川の中にある大きな岩に降り立った。

きよろきよろと周囲を見渡したかと思えば、一度大きく鳴いて、嬉しそうに川へ体を突っ込んだ。

なんだったのかはわからないけど、チュンなりに警戒していたのかもしれない。

それを見ながら、足だけでどうにか靴を脱ぐ。

「（昨日、怖い思いしたばかりだった……いくら人懐っこい鳥でも警戒するよねえ。ふつーに考えてあれはない。あの黒いのがびっちりいたと思うだけでゾッとするを通り越してウゾッとする）」

いくら単純な私の脳みそでも、忘れられないものはある。

これまで生きてきた中でもTOP5に入るくらい嫌な思い出として記憶されちゃってそうだ。

死体の衝撃を上回るね、あれは。

「でも、寝てたのが犬でよかった。熊だったら流石にどーしよーもなかったもん……あれは絶対担いで川まで引きずってくるのは無理、ってその前に食べられてるか……ちゅん、あんまりそっちに行くと溺れちゃうよー」

「ちちちちっ！」

気持ちよさそうにしていたチュンに声をかけて私は冷たいと思われる川に入る心構えを終了させた。
ふっ、さっさと洗って魚の有無を確認しないとお腹すいて倒れちゃうもんね！

足先が川の水に触れて、ヒヤッとした感覚が駆け抜けた。

思わずブルブルってなったけど背負ったワンコは落とさなかったし、上出来と言えば上出来だ。

昨日から冷や汗とか脂汗とかかいてるはずだし、今日は今日で目覚めてすぐに肉体労働したから絶対、汚れてる。ふ、人がいなくてよ

かった…女以前に人としてダメになるところだった。
川があるんだから水浴びくらいいしないと何かがダメになる気がするんだよね。

「（全裸で大型犬背負って山道歩いてる時点で女なんて捨ててるけどさ。いーんだ、誰も見てないしこれは緊急事態だから。普段はもうちょっと慎ましい…筈だといいな）」

始めは上半身だけにするつもりだったんだけど、結構血がつく範囲が広そうだから脱いだんだよね。
あ、靴は履いてるよ！

この森で、生きてる人と出会わなくてよかったとこれほど思ったことはない。

いや…流石にパンツもはいてない状態で人に見られて樹海に住む得体のしれない生き物だとは思われたくないし。

ちよっと前に見たビブリ映画のワンコに育てられた少女でも姫でもなんでもないからね！

後ろから見たら毛皮背負った何かに見えるかもしれないけど！

川の温度に少しずつ慣れていった私はチュンがいる岩へ近づく。
あそこは一番深いところから少し離れているけど、私の胸の下くらいまでは水位があるはずだ。

じゃっばじゃっばと川の中を進む。

藻が生えているらしい川底の石たちは注意しないと滑るけど、気を付けてさえいれば問題ない。

背中に背負っている犬は相変わらず大人しくしていてくれるのでバランスもなんとか保てている。

急に暴れたりしないか一応は気を付けつつ、流れの穏やかな川をわたっていく。

「ちゅん！」

「とーちやく！さてと、…こっからどーするかなー……」

「……ちゅん」

とりあえず、背中にいる気を失った大型犬をどうやって岩に乗せるかが問題だ。

体力？そんなもの残ってたらくくにひょいっと乗せてますよ。

洒落にならない肉体労働（後書き）

冬のイベントは、基本的にケーキを食べるためにあります。

クリスマス？そんなの財布が寒々するだけさ！！

……大人になったなあ………実に色んな意味で。

洒落にならない拾い物（前書き）

今まで道で目撃した落とし物シリーズ。

大型ハサミ、消火器、マフラー（電柱にまいてあった）、アレな本、おじいちゃん。

びっくりしたのは大型ハサミ。

洒落にならない拾い物

拾い物には縁があるといった人に聞きたい、拾った後の処理はどうしたらいいのかと。

私は、どうにか自分の身長のは半分は確実にある犬を、岩の上に移動させることに成功した。

どうやったのかは必死すぎて覚えてない。

潰れる！プルプルしながら思った私は悪くないと思おうんだよね。

あと、浮力がなければ偉業は成し遂げられなかった、とだけ言うておく。

で、ついさつき犬は川の水で毛にこびりついていた血や泥、汚れなんかを流し終わったところ。

びっくりしたんだけど、灰色だと思っていた毛色は純白でした。そーとー汚れていたみたいで、何度も何度も洗ったよ……犬用シャンプーウウウウウ！とか思わず叫びそうになったのは内緒だ。ふふ、ほんと大変だった。

「傷は大分塞がってるみたいだけど、ここまでしたら最後まで手当しない」と

なんの為に汚れを落としたと思ってるんだ！第一目標は手当て！！だ、第二目標は乾いたモフモフの毛を少しでも撫でさせてもらつくとだけど…それはいつでもできるような気がするんだ。

ザッパザッパと川の水をかき分けながら川岸に戻って、当たりを見渡すと、少し離れたところにお目当ての薬草を発見した。

それが必要な分だけむしり取って、荷物の中から包帯を取り出す。勿論、ゴリゴリすり潰す用の石も確保した。

「水から出るとやっぱり、水が冷たく感じるけど……冬じゃなくてよかった」

流石に冬の川に入る勇氣はない。

白い犬の傍にいくと、チュンが私の手にあるものを見て嬉しそうに囀り始める。

チュンのさえずりをBGMにして私は治療っぽいものを開始することにした。

ゴリゴリ薬草をすり潰して、傷口に乗せる。

その上からぐるぐると包帯を巻いて完成なんだけど……何せこう、大きいものだから大変でした。

なんとか巻いたけどね！御陰で凄くお腹すいたよ、だって朝から肉体労働だもん。

手当を終えた犬を抱えて、寝心地の良さそうな草の上にチュンが使っていたタオルを敷き、その上に横たえてから罌を仕掛けた場所へ向かう。

チュンは私の頭の上で周囲を警戒中です。

「どれどれー？あ！いるいる……やっぱりこーゆ場所の川にいる魚だから捕って食べる人居ないんだろーな……だから警戒心が皆無」と

ふんふんと鼻歌を歌いながら前日に編んだ魚を入れるための籠^{かご}で魚を掬いあげていく。

昨日は3匹だったけど、今日は7匹もとれた。

5匹は焼いて、2匹はお味噌汁にしようと思う。

ご機嫌な私の頭の上にいるチュンも、私に合わせているのか嬉しそうに囀ってくれる。

近場で焚き火をして、魚を焼いたり魚と野草のお味噌汁を作ったりして食事を終えた。

7匹の魚のうち、焼いた2匹を犬の前に置いて、頭を撫でてから出発。

お腹はいっぱいになったし、撫でた頭はふかふかで気持ちよかつたし、ばっちり元気になった。

た、たたた単純なんじゃないよ！ただちょっと切り替えが早いだけだし。

現在地は恐らく、地図で確認する限り、中間地点とゴールの間。

理由は、地図に書いてある滝が隣にあるので間違いない、と思うんだよね。自信はないけど。

今歩いているのは川岸だから、大きな岩や小石がごろごろしているから、歩くには相応しくはないんだけど…昨日森の中で死体さんとたくさん遭遇したから流石に、歩きなくなかった。

滝を登るわけにはいかないから一度、森に入って川岸を歩けるよな道になるまで歩かなきゃいけない。

崖を登るくらいなら、多少気は乗らなくても森に行く方が確実だ。

……こんなところで死んだらそれこそ死んでも死にきれないし。

絶対やだよ、黒いオバケになってももの暗い森の中徘徊するのは。断固拒否する。

「うー……足が話せたら間違いなく奇声を発してるよ、この痛みと疲労感は就活中の極限状態に似てる。生きてる人間の代わりに死んだ人間と、コンクリートジャングルの代わりに鬱蒼とした自殺の名所の森でしょ？ほんっと中々いい勝負だとも思う。なんの勝負なのかもわからないんだけども」

「ちゅん……」

「チユン、お願いだからそんな慰めないで。わかってる、もう痛い人間だつてことくらいわかってるから。もーこれはどうにもならないんだよ、思いついたこと口にしてないと色々埋まんないの。就職するのも大変だけど働くのも大変なんだね……山の中に放り込まれる研修するとは思わなかったもん。魚介系の加工するところなら海に放り投げられたのかな？」

「ちゅん！ちちっちちちちち！！」

「な、なに？」

頭の上にいたチュンが、森に入って30分ほど歩いた辺りで突然飛び立ち、数メートル先にあった腰掛けられる大きさの岩の上にちよこんと止まる。

自然の中にいるのを見ると（例えそこが自殺の名所でも）やっぱりチュンは野生の雀なんだなあ、と思う。

毛づくろいを始めたのを見ると、ここで休もうと言うことらしい。

昨日もこんな感じで時々、休憩するように示してくれた。

いやー……山道って歩いてるとだんだん感覚がなくなってくるんだよね。

だからついつい、時計を見ることを忘れるんだ。ついうつかり、ね。散歩は好きだけど、物騒極まりないところを徘徊する趣味はないんです、本当に。気づいたら変なところにいたことは何度かあるけど！

「うわ、もう4時間歩いてたの？！チュン、ありがと。ええと、お水のむ？」

「ちゅんっ！」

「ちょっと待ってね……はい、どうぞ。ふー……結構高くなってきたね。下から見ても大きい滝だったけど、1時間近く経ってもま

だ滝の上まで到着しないなんてびっくりだー」

独り言をつぶやきながら、ペットボトルに入れたお茶もどきで喉の乾きを潤しながら改めて周囲を見回す。

相変わらず、苔の生えた木々は相変わらずだし、苔絨毯こけ的な地面、朽ちかけた木や無造作に転がる岩や小石。所々、落ち葉が落ちていて……どよんとした雰囲気醸し出してなくて、木もれ陽なんかが差し込んでたら、神秘的でいいんだろっなあ。

「自殺の名所じゃなくって、もーっとこうなんかいい感じの場所だったら……極上の和菓子を出すお抹茶飲めるお茶屋とか甘味処とかあってもいいよね！あ、そうだ！これだったら抹茶系の洋菓子とかも合うかも。ああ、いやいや、ここはやっぱり大福とかそういう感じのがいい」

ぶつぶつ呟く私の横で、心無しか呆れたように私を見ているチュンと目があった。

大丈夫だよ、チュン！凄くお腹すいててもチュンだけは食べないか

ら！

ぎゅ、と拳を握り締めて力説するとチュンは何故か私から距離をとって小さな体をふるふる震わせて明らかな警戒態勢をとっている。えええー……。なんでー。

休憩時間は10分に決めたのでまだ余裕がある。

何をしようか考えてると、草がガサツと音を立てた。

普段なら気にしないような音でも、この森にいた所為で“音”に敏感になってるらしい。

咄嗟に振り向いたのはいいけど真後ろだったから腰がゲキツていった！

ぐすん、と心の中で涙を流しつつも揺れた草に視線と意識を集中させる。

ふ！私にだって緊張感くらい存在してるんだよ。

じつとみていると、草の無効で何か――…白いモノが見えた。

黒じゃないことにホッとしたけど、新手かもしれないと考えた瞬間、口元がひきつる。

オセ口の幽霊とかいろいろ突っ込みどころがありすぎる。

ちらっとチュンをみるとチュンも草の茂みを眺めたまま動かない。それに倣って私もそっと視線を戻す。

「チュンやっぱり、なにかいる……よねえ？」

「ちゅん」

「へ、返事してもらいたくなかったな……なんて」

目線も意識もそらせないまま、声を潜めてぼやくけどチュンは知らんぷりで茂みを眺めている。

緊張感も、未知のものに対する恐怖も限界に近くなったその時——
——それが姿を現した。

「れ？お前……あの時のつかい犬！おまえ、怪我大丈夫？結構血イ出たし、あんまり動かない方がいいと思うよー。この森じゃお肉なんて手に入らないだろうし」

「……ちゅん」

「え？チュン、その反応はなに！？わ、私間違った？！」

雀に呆れられる私って一体…？

思わず遠い目をした私の元に茂みから半身を出した大型犬が、のそのそと近づいてくる。

警戒している様子は、不思議なくらいになかった。

なんていうか、よく人に慣れたゴールデンレトリバー的な感じ？

一応、野生のはずなんだけど……なあ。

「どうしたの？」

とりあえず、しゃがみこんで犬と目線を合わせる。

大型犬だけあってしゃがみこめば十分目を合わせられる位大きい。

……なんか、犬相手にあれだけと凄い敗北感。切ない。

「わうん」

「（うわ、なんちゅー可愛いらしい鳴き声を出すかな、その図体で！）う、か、可愛い……じゃなくって！そうじゃなくって、おわ！？」

ポサポサと近づいてきた犬は、しゃがみこんでいる私の体にその大きな体を寄せてグリグリと胸の当たりに顔を押し付ける。まるで、お気に入りの毛布に顔を埋めているような、そんな雰囲気だ。

しゃがみ混んでいた私はあっけなく尻餅を付く。

で、気が付けば、目の前には白い犬の顔があってベロベロと顔中を舐められていた。

とりあえずは食べられる心配だけはしなくてよさそうだけど、犬の唾液でベタベタになってます。

須川さあああん、これ、ちょっと想定外なんですけどおおお！！
洗顔石鹸！洗顔石鹸かもしくはこれに類似するものを所望しますっ！
うわあ、歯！歯が当たってる！

洒落にならない拾い物（後書き）

白いもふもふワンコに懷かれる、の巻（笑

ちなみに、大型犬ではゴールデンレトリバーを愛しています。
基本的には中型犬が好き。うちのワンコも雑種です。

ここまで読んでくださってありがとうございます！かんしゃー！

洒落にならない残り物（前書き）

今日の晩御飯は鮭のクリームスープパスタ。

生魚は食べられないけれど、火が通ると大好物に変身する不思議。

洒落にならない残り物

若干、ぐろてすく？な表現があります。

苦手な方は見なかったフリをするか、読み流すか、読まないかしてください。

よろしくお願いいたします。

後は猿っぱいものがいたら完璧なんだけどな、と思いながら足を動かす。

どという順番で出てくるのかは覚えてないけど、犬と猿とキジで連想するのは美味しそうな名前の太郎さんのこと。今いるのはキジじゃなくて雀だけど、気分はまさしく鬼退治に向かう太郎さんだ。ちよっと待って……この場合、鬼にあたるのはやっぱり、上司のあの人の人だろうか。

うわ、どうしようこれ勝てる気がしないんですけど！

太郎さん、ちょっと私には荷が重いんですよ。この、えーと、お、鬼退治？

言い換えれば下克上……つまり、上司退治っちゅーことになりますよねー！

これが童話だったら確実にお話崩壊だ。

「ちゅん？」

「くうん？」

「大丈夫だよ、無茶な鬼退治なんかする勝負師的なプライドとかはないからダメだと思えばしつぽ巻いて逃げ出すよ！チュンは頭の上に乗っけて、ワンコは全力で付いてきてね！っていうか、足の速さからして…君が先陣を切ることになるかもだけど」

「わふっ！」

なんの話をしているのかわかっているような、反応に少し驚いた。

チウンだけじゃなくって、この白ワンコもか！
さ、最近の野生って凄い。斜め45度位をぴょーいっててるよ…
…うぬう、侮り難し。

今の私は一人と一羽じゃなかった。

一人と一羽と一匹、と行った具合に増えている。
言わずもがな、1匹というのは茂みから出てきた大型の真っ白い犬のことだ。

顔をべろべろ舐められただけじゃなくて歯が当たっていた時は
このままカジカジやられるのかと思ったけど……—
結果は、五体満足。
顔も体も欠けることなく、こうして歩いて余計なことも考えられる
くらい元気だ。

「にしても…この森にいる動物って基本、弱肉強食の極みだったり
する？餌だって少なさそうだし」

何より、あの、黒いのが居る。

他にも怖くて不気味な黒いモノを“喰って”しまっ、まだ見たことのない“ナニカ”もいるのだ。

小さな時は、闇や夜が怖かったけど大人になるに連れて恐怖はなくなった。

でもこの森に来て私の中で“闇”や“夜”というものの概念が変わっていったらしい。

ううん。らしいっていうのは正しくない。

だって、そんなの初めて闇の中で…あの、夢を見た時から分かっていた。

「（夜や暗闇が怖くなつたのは、きっと私が大人になったから。いい意味でも、悪い意味でも自分をごまかすことが上手くなって、納得させるのが、諦めるのが、上手くなつたてんだな…子供の頃なんてあんまり覚えてないけど）そもそも、子供の頃に夜とか暗闇が怖かったのって、自分の知らない“ナニカ”がいるような気がしてた…ってこと？」

他に思い当たる節がない。

寝る前に、部屋の隅っこや押入れ、トイレが怖いと思ったのはたった一人で、その見たことのない“ナニカ”に食べられたり、痛いこ

とをされるかもしれない、怖い顔で自分を睨みつけているかもしれないと思ったからだと思う。

大人と一緒にいて安心できるのは、子供の頃は“大人”っていう存在は特別で、オバケなんてやつつけられるくらいに強い存在だったからだ。

水の音をBGMにして、歩きながらぼんやりと考える。

ゴールが近い。

多分、あと3時間も歩けばたどり着けるだろう。

気が緩んでいたことは確かで——もうすこし、周りを見ておけばよかったと心から思った。

目の前にある、できれば見たくなかったそれを視界にいれた瞬間、歩くという動作の途中で止まる。

「と、とりあえずチュンは目を瞑って、じょーそーきょーいく？ 的によくなさそうだからね。あと、ワンコさん、匂いを嗅いだりしないよーにね。あと齧^{かじ}ってみたり、振り回したり、お気に入り玩具のごとく銜えて歩かないように！」

「…ちゅん、ちちち」

「…わふん」

ものつそい、あきれ果てた視線を頂戴した。

誰がそんなことするか！と言われていたような気がするけど、き、気のせいだよな？！

視線の端、歩きやすい道の端っこに落ちていたのは……肉片的な何かでした。

赤グロい何かと一部、肌色の、何かに喰いちぎられたような、物体はかなり、あれだった。

できるだけ視界と意識に入れないようにして歩く。

多分、もう少し行けば滝も終わるはずだから、川岸に戻ってそこを歩けばいい。

この森に入るのを決めた時点で、なんとなーく嫌々な感じはあったんだけど、やっぱりダメだ。

「私、ぜーったいこの森と相性悪いよ……なに、この見たくもないモノのオンパレードぶらすカーニバル的な森を上げての不気味な大歓迎の仕方ッ！森の神様には悪いことしてない、筈。そ、そりゃー、森の中で焚き火とかお魚焼いたりとかしたけど、食べなきゃ死んじやうし、火がなきゃ飲水もご飯も食べられないもんね。うん、神様だっけわかってるはず！日本の神様は長生きしてるもん」

きつと人間についても知ってるはずだ、生きていくのには美味しいご飯が必要で、ご飯を食べるには火と水がそれなりに必要だってことも！

そう考えると、ただ単に私の運が以上に悪いだけ？うわー、やだなあ。でも、昔からクジ運とか異常に悪かったし。ああ、ガラガラとかもそうだったなー。

席替えとか生活に反映しないものは何か結構いいところ行くんだけど…むーん。

この時の私は、すっかり忘れていた。

昔から友達やら先生やら知り合った色々な人に言われ続けて、相変わらず学習しない私。

ぐにー、と生理的に受け付けない感覚が分厚いはずの登山靴から伝わってくる、感覚はできれば今後、一生味わいたくないものです。

何かを踏んだ体制のまま、踏んだものを確認する勇気がでなくて硬直して、たつぷり数十秒。

意を決して恐る恐る足を持ち上げ、そつと普通の地面に足を下ろした。

足の下にあったものと“目があった”瞬間に私は自分でも信じられないほどの動きでソレから離れた。

ビタツと情けなくもひつついたのは、一歩間違えば足を踏み外して滝に真つ逆さま。

慌てて木から離れ、ソレや滝のそばから離れた。

……四つん這いでね！こ、腰が抜けたんだよ！好きで赤ちゃん時代に帰ろうとかそーゆー特殊な心境だとかってわけじゃないよ！ほ、ほんとだよ！！

「ど、どどどどどど、ど、どうしよう！わ、わわ私ふ、ふんじや、踏んじやった！の、呪われたり祟られたりしたらどうしようおおおお！！ごめんなさい！！いいいいいい！！」

見えたのは、喰い千切られた顔だった。

覚えているのは見開かれた眼球と上唇……鼻は、食いちぎられてしまったらしく、見当たらなかった、と思うんだよね。いや、ほんとに一瞬っていうか数秒しか見てないから完璧には覚えてない、というか覚えていたくないんだけど。

ソレがあつたのは、深緑色の苔^{こけ}の上。

薄暗い森の中で肌色と目の白目部分がぼんやりと浮かび上がっていた。

所々、赤黒い何かがついていて、その白い部分をふちどるように髪の毛のようなものや赤みの強いピンクがかった筋肉のようなものも見た。黄色味がかった白いモノは、たぶん、人の脂肪、だろう。

「う、うつつな、なんでこんなとこにあんなのが落ちてるのさー！食べるなら食べるできれいに食べなさいよー！ばかあああああつ！や、やっぱり熊なのかなあ、熊なのかな…っ?!」

いい年して半泣きになっている私にチュンが心配そうに頭から降りて膝の上から見上げているけど、撫でる余裕はなかった。

じわじわと足元からせり上がってくる恐怖に耐えられなくなつて、本格的に涙がたまり始めた。

う、歳をとると涙腺が崩壊し始めるって本当だったんだ…。

ぎゅ、とどうにか掌を握り締めて、せめてもの抵抗に唇を噛んだ。

感情の三分の一は恐怖…だと思う。

でも、残りの殆どは嫌悪感や罪悪感、あとは、すぐくモヤモヤしたあんまり、抱きたくない感情。

「（どうして、こう思い出させるような自体になるかなー…自殺の名所なら死体があるってところまでは納得できるけど、食い散らかされてるなんて聞いてないし想定もしてなかった）」

本当に勘弁して欲しい、そう思ったところで誰に伝えるべきなのかも、誰にどう伝えたらいいのかもわからないから余計にもやもやする。

見なかったことにしたくて川のある方に視線を向けた。

滝はもう終わっているけれど、川岸をあるけるような状況じゃないのは一目瞭然だ。

ゴロゴロした大きな石と流れの早い激流。
歩けるようなスペースがない上に、もし足でも滑らせてしまえばそれっきり。

あの、道を歩くのが目的地へたどり着く為には一番確実だってことくらい分かっている。

だけど……それを考えた瞬間、足が竦んだ。

座っているから傍から見ればわかりにくいだろうけど、立っていればその場に倒れているか膝が笑ってまともに立ってられないような状態だろう。

「っ…うひゃあ!? な、ななな…っ」

「わうん!」

「ちょ、まッ! へぶっ?!」

落ち込んでガツクリと地面に両手を付いたのを見計らったように、生暖かい舌が私の顔を舐め上げた。

ビックリしているのをいいことに舌で私の顔を味わうように舐めまわす犯人は言うまでもない、白い犬だ。

彼は舐めまわされて地面に倒れ込んだ私を見下ろしてどこか満足気な顔をしている。

それ以上何もせずに、そっと私の横に伏せた犬を見て――
――…思わず苦笑。

「心配、してくれた?」

「わふ」

「ちゅん!」

「そ、っか……ごめんね。ありがとう」

ぎゅ、と大きな白い塊に顔をうずめると、犬の上に移動していた
チュンが私の頬に柔らかい体を擦り付ける。伝わってくる温度や生
き物のおい、自分以外の心臓の音。

体の力が抜けて、さっきまで確かにあったもやもやした感情が跡形
もなくなっていた。

もう少しだけ、空元気でもほんのちよつとの、元気を取り戻すま
でどうかこのままで。

洒落にならない残り物（後書き）

進んでいるのか進んでいないのか…書いていくうちに分からなくなっていく不思議。

なんじゃこれ！。

ここまで読んでくださってありがとうございました！

洒落にならない樹海で（前書き）

あまりズルズル引きずるのも良くないと思ひまして、頑張ってみました。

やっぱり、人間一人では会話が弾みませんね…一方通行なキャッチボールとか自分なら耐えられない。

そして、グロ？警告です。

ぬるいとは思いますが、ぐろてすく、な表現があります。
嫌な方、気分悪いわーという方はリターンをお願い致します。

洒落にならない樹海で

人や、動物はいずれ死という形で大地から離れるものなのだ。

その時に、肉体は置いていく。

残された肉体と言う名の入れ物は、地上で肉体と目に見えない何かを合わせた時のことを知っている同族達が別れや区切りをつける為に残される。

その時に同族の者たちが泣いたり思い出を語り合ったりするのは、会えなくなった悲しみや楽しかった頃の記憶を共有して、共にいた時の感情を心のどこかにある“大切なモノの引き出し”に仕舞いこ

む為だと私は思う。

幽霊やおばけは、肉体を置いていったときになにか気にかかることがあったか、気づいていないかだ。

よくテレビや本で読んだりする悪霊だとかっていうものは、私にとつて人間じゃなくて元人間。

死んでいても、人間らしさが残っていれば人間だっと思う。

元、が付いてしまえばもうソレは元々いた存在とは異なるものになって、悪霊だとか怨霊っていうジャンルの生き物になってしまう。

この森で見かける“黒いもの”は、元人間だと私は考えていたりする。

私は幽霊やおばけにあったことも話したこともない。

ただ、アレは元は人間だったものだけど、今は違う存在だ。定義は置いておくとしても、危ないことにはかわりはない。

人間のもつモヤモヤした感情を濃縮して無理やり人の形にしたよ
うな、存在は害ではない。

ああいう風になったら全てが終わるだ。

「うつぷ……お、お魚が胃と食道のあたりをうろつろしていらっしやる」

今の私は二日酔いのキャバクラ嬢やひどい乗り物酔いに苦しむ釣り人以上にひどい顔色をしてる自信がある。

喉の奥、胃の当たりからこみ上げてくる消化酵素と塩酸たつぷりの酸っぱい液体と半分溶けかけた食物との戦いを繰り返しているからだ。

視界が滲むのは悲しいからでも嬉しいからでもなく、生理的なものの。

まだ根性で吐き出してはいないものの、これで新しい刺激が加わったりなんかしたら目も当てられないことになること間違いなしだ。

「（さ、流石にいい年してリバーズするわけにはいかない……素っ裸は人がいなければ問題ないけど、食物リターンズは胃袋に収まってくれたお魚にも失礼だし、私の中でなんか許せない。本来出るべき場所から出ないなんて本末転倒すぎる！）」

うえっぶ、と口と鼻をタオルで抑えながら、ひよいひよいと安全で歩きやすそうな場所を選んで進んでくれているシロの後を追う。

あ、シロっていうのは白い大型犬の愛称です。正式名称は白吉しろきちなんだけど、呼びにくいのでシロ呼びで行くことにした。

私は、数分前にスプラッタな肉片通りを通過した。

手術中のテレビを見ながら食事をする位の図太さは持ち合わせているけど、映像と臭い&感触付きとでは雲泥の差がある。
多分、臭いと感触付きだけだったらまだ盛大に顔をしかめる程度で終わったと思う。

「（なんだって、あんなの見ちゃうかな……幸いにも気付かれてはいないみたいだったけど、気付かれてたら終わってたよね、私の人生的なもの）」

私だってまだ人生を終わらせる気はない。

よーやく就職先がきまって、しかも職場の上司はレアな霊能力っていう特殊能力付き、縁町えにしちやうには面白そうなお祭りもあるし、美味しそうな食べ物も満載、事務所兼下宿先の雰囲気も私好み。

……まあ、初仕事の日に自殺の名所で有名な樹海に放り出されるなんて思ってもみなかったけど。

「にしても、あの黒いのがムシヤムシヤしてたなんて……あれじゃないと思ったんだけどな」

人生が終わったと思ったのは、肉片飛び散る“すぷらったー”な現場をようやく通り抜ける、と胸をなでおろしかけた時。

聞き覚えのある何かを食べる音を認知した瞬間、頭から氷水をかけられたような体の奥に染み込んでいく悪寒と独特の不安や恐怖を感じて歩を止めた。

もう周りの鉄臭さやグロテスクな人体だったものも思考からすっぱり切り取られて、吐き気もなくなってただけどそれに気づいて安堵する余裕なんてない。

それなりに15mくらい先、苔だらけの木々の隙間からそれが見える。

薄暗い森の中で蠢く黒い、ソレはこの森に入って遭遇した“明らかにヒトではないもの”だった。

それは初めて見た時よりも大きくなっていて、黒一色なのに深みがありましたような感覚を覚える。

うつん、深みっていうよりも^{よじ}澱みって言ったほうが正しいのかもしれない。

見えたのは一瞬だったけれど、私がいい歳こいてリバーズしそうになった原因を作ったのは奴だってことを理解した。

ソレは、たぶん……私が何番目かに見た女性の遺体をむしゃむしやと喰っている。

あの強烈なショッキングピンクのドレスっぽい色を見たのはあれっきりだから間違いない。

見えたのは、足っぱいのを喰い千切っていたところだったけど……聞こえてくる音からして、今食べているのは内臓的な部分だろう。

ぎゅちゃ、ぐちゃ、とかびちゃ、ぴちゃ、とか水っぱいペチャペチャした音は確実に間違はなく、そういう部分だ。間違いない。

体をこわばらせた私にチュンの声が耳元で聞こえる。

逃げろと言っている様な声でようやく我に返って、足元にいたはずのシロが居なくなっていることに気づいた。

「し、る…?」

音を立てないように気を付けながら周りを見渡してみるけれど、

シロの姿は見えなかった。

探さなきゃ、と足を踏み出そうとした私の前をチュンが横切る。

まるで“いくな”といってるみたいに、ことごとく前に進む道以外に体を向けるとチュンが必死に羽ばたいて止めようと目の前を飛ぶ。

「（シロのことは気になるけど、チュンだって同じはずだ。でも、

それでも探しに行かせないってことは……… いかない方が、いいんだ
ろうな」わかった、今はいこう。チュン」

それでいい、とばかりに小さく鳴いたチュンと共に私は音を立て
ないように、必死に自分の存在を消すように願いながら進む。

少し屈んで足元に落ちている枯れ葉や枝を踏まないように、そろそ
ろと足を進めながら必死に耳を澄まして音を拾う。近づいてきたら
即行で逃げる覚悟はできてる。

でも、聞こえてくるのはドッドッドと液体が弾丸みたいになって
叩きつけられているような音は、私が生きている証。

耳元というより頭の中から聞こえてくる心臓の音に少し焦る。

この音の所為で、アレが動く音が聞こえにくい。

「（完全に泊まれとは言わないから少しくらい落ち着いて、心臓！
疲れるよ、そんなに早まったら！あんたにや長い間働いてもらわな
いと困るんだからね）」

正しい行動が取れてるかどうかなんてわからないけど失敗すれば、
確実にオヤツとしてペロっとしたただかれてしまうのはわかりきって
いた。

静まれゝ鎮まれゝと声には出さずに念じながら必死に歩いて、歩い
て、どのくらい離れたのかもわからないくらいに必死だったらしい。
足というか太腿ふとももと腰がものすごい痛みを訴えた所でようやく気が
ついた。

景色が、明らかに変化している。

とんでもないところに出てきたわけではない。

ただ、苔の代わりに枯れ葉と黒い土が地面を覆^{おお}っていて、周囲を囲むような木々も幾分か不気味さがなくなったように見える。

それはただ単に苔や蔦^{つた}で覆^{おお}われていなかったからなんだけど、拍子抜けするほどに印象が違う。

「（薄暗いのは相変わらずだけど、でも、なんか……じめつとしてないっていうか、どよんとしていないっていうか……違う、場所みたい）

」

空気も、音も、何もかもが異なっていた。

重苦しくてじっとりした空気は山独特の澄んだ空気になっているし、一切の音がなかったと言ってもいいほど静まり返っていた筈なのに鳥のさえずりや木の葉がこすれ合う音や水の音が聞こえてくる。

「ほんとに、ここ……裏・雲仙岳、だよね？」

いくら必死だったからって山を出た記憶はないし、表の雲仙岳に
いった記憶も実感も経緯もない。

狐に化かされたみたいだ、なんて考えながらぼうつとしているとチ
ユンが私の頭の上に着地した。

どうやら道案内は終わりみたいだ。

ずーっと、チユンについて歩いてきたからここまでの道はチユンし
か知らない。

雀のナビなんて初めて体験したのは初めてだけど、凄く、変な感じ。
なーんか、実感がないんだよね。

うーん、と首の後ろを撫でて立ち止まっていた私は、ふと背後に違
和感を覚えて振り向いた。

「ッ……！！！」

振り返った瞬間、私の全身を恐怖と悪寒が襲った。

ガクガクと膝が震えたかと思うと一気に下半身の力が抜ける。

衝撃とともに目線がぐっと低くなり、掌に少し湿った土と枯れ葉独
特の感触が伝わってきた。

だけどそんな小さなことを気にしている余裕はない。

ガチガチと歯が噛み合わずに音を立てる。

目が限界まで見開かれて、口は声以前に音のひとつも紡がないまま開閉を繰り返す。

目の前に広がるのは、森。

何かを区切るために引いたように綺麗に、苔が生えている地面と腐葉土の地面が分かれている。

苔が生えている一帯は私が今までいた森だったのだろう。

苔や蔦が絡まった不気味な木々と、苔に覆われた大地、時折みえる岩も苔に覆われて暗緑色。

天を覆う様な木の葉は黒い絨毯のようにほとんど光を通さず、まだ陽があるのに薄暗く、木漏れ陽の一つも地面には届いていない。

そんな、中に蠢くモノ。

黒い人型のモノ、人型になりそこねた黒いモノが木々のように隙間なくひしめいて、手やそれに準ずるものを伸ばそうとしている。

奴らがつかもうとしているのは、きつと…私。

時折、揺れている赤や薄桃色だったり白だったりするものは、色々な部分が欠けたり、出たりしている死体。

私に手を伸ばしながら、奴らはその肉を、骨を、争うように咀嚼し、散らかし、喰らう。

伸ばされた手が、自分に届くことはないのかもしれないけれど、私の体は必死にその場から少しでも離れようと必死にあがいていた。意識は目先の闇と恐怖に囚われて、思考なんてほぼしていない状態でも、貪欲に私の本能は生きようとしているらしい。

チュンが、頭の上で威嚇するように、警戒するように、鳴いている。

怖い、イヤだ、気持ち悪い、コワイ、嫌だ、キモチワルイ、恐い、イヤダ、嫌だ、いやだ…ッ！！

無様に私は地面に尻餅を付いたまま、震える全身と滲む視界を懸命に押さえ込もうとしていた。

諦めるとかそういう思考は働く暇がなかったらしい。

ただ、ただ必死で逃れようと大地に爪を立てて使い物にならない足の代わりにしようとしているのは、滑稽なのかもしれないけど、私にとってそんなことはどうでもよかった。

逃げなきゃ、とか嫌だ、とか来るなとかそんな単語ばかりが浮かんで、具体的な解決策は何も浮かばない。

大きな、一際大きな黒いモノが突然、空気を引き裂くような音を發した。

それは夢の中で聞いた絶叫や叫びに似ていた。

似ている、というか“そのもの”で、こいつらの声だったんだ、と頭の片隅で理解する。

大きくなっていく音に比例するように、時折、黒いのが身を擦るような動きをするようになった。

やがて、黒いのは四散していく。
絶叫とも弾叫ともつかない音の合間に、獣が唸るような音と咆哮が混じるようになる。

身をよじるような動きをした黒いのは目の前であっさりと消えてなくなった。

まるで“そこには何もなかった”みたいに、呆気なく、蝋燭のフツと炎が消えたみたいに。

だけど、何故か減っていくはずなのに黒は減らず密度を増していく。

理由は、簡単。

黒いモノ達が互いを喰い始めたからだ。

食ったものは大きく、濃くなつてまた、喰らう。
でも———なのに、数は減らない。

もう、色んなものでいっぱいになったらしく、なんの感情も湧かない。

視界にはいつてくる光景をぼーっと眺めるだけ。
頭の中で声が巡る。

沢山の、声。
恨み辛み嫉妬や妬み、これでもかと言わんばかりの声で溢れて、鈍く重い痛みを覚えた。

黒に染まり始めた視界の中で、何かがキラリと光る。

あ、と思った瞬間に聞こえる咆哮。
それは森というよりも山全体を揺るがすようなモノだった。
麻痺しかけた脳を揺さぶられて、ジワジワと感覚が戻ってくる。

「あの、時の……？」

光ったのは、宝石みたいな美しい赤。

でも、対になっているソレは夢から醒めた後で見たものとは似て非なるものだった。

綺麗なだけじゃなくて―――毒々しさを孕み、氷のよ

うに冷たくて何処かくすんでいるのだ。

ひたり、ひたりと近づいてくる赤に私は奇妙な感覚を覚える。

恐い、はずなのに……怖くない。

体が震えているのも歯がかみ合わないのも恐怖からくるものだってわかってはいるけど、でも、恐いのには怖くない。

赤の持ち主は、獣だった。

3mはある大きすぎる獣型のそれは、赤を細めて近づいてくる。

闇色の薄衣をまとっているみたいに揺らめくのを呆然と私は眺めていた。

私の顔程はある大きな前足が苔と土の境目を踏んだその時……私は、聞けるはずのない声を聞いた。

「それ以上の接近は、許せませんね」

騒音の中であることを忘れさせるような、存在感のある凜とした美声の主はいつの間にか私の左隣に佇んでいた。
着物の袖と首の後ろでまとめられた髪の毛が揺れる。

ああ、私は“生きて”帰れるんだ、
と全身の力が抜けた

.

洒落にならない樹海で（後書き）

な、長くなりましたがとりあえず次回で洒落にならないシリーズは終了する予定です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。
まだまだ頑張りますぞー！！

洒落にならない解説と上司様（前書き）

真相と解説もどきが盛りだくさん。

伏線もどき全部拾えるかなあ……orz

ちなみに除霊や浄霊方法は、実際にある道具などを都合よく解釈して登場させているので本来の使用法とは全く異なっていることもあります。

また、除霊方法や呪文（読経なども含む）もそれっぽいものを並べたり組み合わせたりしています。

洒落にならない解説と上司様

彼が現れた瞬間、私の体の震えは不思議なくらい、あっさりと止まった。

じわじわと指先に血液が行き渡って指先が暖かくなってきた。
ガチガチと噛み合わなか歯も、力の入らなかった足腰も普段と変わらない状態に戻ってくる。

自分以外の人がいるだけでこんなにも違うものなのかと驚いたけど、いつの間にか咆哮や絶叫が止んでいるのはきつと須川さんがこの場所にいるからだ。

須川さんが、本物と呼ばれる部類の霊能力者であることは、店長の黒山くろやま 雅さんみやびから聞いている。

全てを話してもらったわけでも、過去の功績を伝えられた訳でもな

くて、ただ一言『 須川は本物だぞ 』とだけ。
そこの、もしくは一般人や素人が思い描くペテン師とは違うこと
だけは覚えておけと小声で告げられて、戸惑いはしたものの素直に
首を縦にふった。

本物の霊能力者というか、普通に霊能力を持っている人にもあった
ことがないから比較はできないけど、数珠とかよくわからない神棚
つばいところの前で「おまえさんは誰なーん？」とかつて聴いたり、
「はっ！」とかやりながら御払いするのは違う、ってことだろう。

「す、須川さん…？なんで、ここに」

「地図上での当着地点はここですからね。10分ほど歩いたところに
旅館がありますから、今夜はそこでゆっくり眠れますよ。温泉も
ありますし、料理も美味しいのできつと氣にいますよ。」

「いや、温泉とご飯は大変に有難いんですけど……えーと、あの、
助けに…きてくれた、んですか？」

「貴重な従業員ですし、ここからは優君ではまだ太刀打ちできません
から」

相変わらず柔らかい口調と声のトーンだったけど、まとっている雰囲気は別人だ。

いや、私も須川さんのことはあまり知らないし一緒にいた時間も短いんだけど、質問するのに身構えてしまうような雰囲気じゃなかったことだけは確か。

でも、今は……ピリピリしてるんじゃないかって、んーと、なんか威圧とかそういう感じで凄く、居心地が悪い。

「太刀打ちって……もしかして、この犬っぱいのを倒す、んですか？」

「義務のようなものです。放っておけばいずれ墮神おちがみという大変力の強い怨霊になります。そうなってしまえば、倒せる人間はかなり限られてしまうので完全な落神になる前に退治しなければならんですよ」

「怨霊って……確かにちょっと恐い目とモヤッとした体ですけど、あんまり怖い感じはしないですよ？いきなりガブッて来るわけじゃないみたいですし」

ほら、おとなしい！と指を指すと心底呆れたようなため息で返された。

犬は須川さんを警戒するみたいに低く唸っているようだ。

いや、もしかしたら須川さんの後ろにいる私ごと威嚇してるのかもしれないんだけど。

とりあえず、いつまでも座り込んでるわけにはいかないと足腰に力をいれて立ち上がる。

お尻と服を叩いて汚れを落としながら一応周囲に目を配る。

須川さんが現れてから、静かになったことには気づいていたんだけど森にいる黒いモノの動きが完全に止まっていることには気付かなかった。

まるで強力な接着剤で見えない紙に張り付けられてるみたい。

ゴキブリホイホイとかネズミ取りみたいな感じで。

「鈍いのか鈍くないのか全くわかりませんね、優君は——
そもそも、後ろにあれだけの思念の塊があるにも関わらず、半神はんしんがここまで墮神おちがみになる手前まで成長したこと自体が異例ではあります
が」

「……すいません、あの、よくわかんないんですけども。墮神おちがみっていうのが怖いオバケになるのは理解しましたが、半神はんしん？ってなんですか。あれ、でっかい犬のオバケじゃないんですか？」

「半神は放っておくと墮神とよばれる怨霊になります。この半神が神格化しんかくかするにはいくつかの条件が必要で、9割は確実に神になれず怨霊と化かします。墮神になってしまえば、半分とはいえ神と等しい力をもっていますから非常に強力です」

先ほど説明しているのでここまでは大丈夫ですね？と念を押されて私はなんとか頷いた。

ふと、悠長に説明なんてしてもらっても大丈夫なのか聞いてみたんだけど、あっさり「術で足止めしてるので30分は確実に持ちますよ」と返された。

なんか……いつの間に！って感じ。

霊能力者っぽい所を見られると思ったのに、勿体無い。

「この半神と呼ばれる存在は強い霊力を持っていますが――
――…実害はありません」

「へ？そ、それじゃあ退治しなくてもいいんじゃない？」

「そうです。高い霊力を誇っていても、力を具現化できないので半神自体は殆ど無害なんですよ。なにせ力を使えなければ我々の住むこちら側にはなんの影響もありませんから。ただし、この半神の高い

靈力を狙って、力を欲するモノ——
所謂、妖怪や靈といわゆる
いったモノたちは問題です。何せ、半神を喰ったモノは強い力を得られますからねえ…いろいろな欲の為に力を欲しがっている輩を引き寄せてしまふ。それも大量に、ね」

「もしかして、あの犬を食べようとして集まってきたのが…あの黒いの、ってことですか」

ええ、と首を縦に振った須川さんは半歩後ろで呆然と森を眺める私に目を細める。

二泊三日も山を徘徊してたので、盛大に髪はボサボサだし寝不足で顔色も酷いのはわかるんだけど…なんにもそんな顔しなくても！一応水浴びはしてたんですよ？！

ちよつと悔しくてムムムつと睨みつけると、彼はふつと口元を歪めた。

すいません、その「ああ、もうどーしようもないな」みたいな反応はいくら鈍い私としても傷つきます。

「負の感情の塊であるアレらが、力を手にしてしまえば確実に被害者がでるでしょう。自業自得と言えるような人間はまだしも、なんの関係もない者が巻き込まれることも多々あります——…私たちは、そうなるのを防ぐ為に見つけ次第退治するんですよ」

「で、でも半神の元ってやっぱり犬なんですよね？須川さんが言い聞かせたら言うこと聞くんじゃないですか？ほら、自分より強いものには服従するっていいですよ！」

「残念ながら私にはできません。私が得意なのは占術と除霊、霊の服従および使役ですから」

「いやいや、服従ってまさしくじゃないですか！」

「ああ、説明が足りませんでしたね。私ができるのは“人霊”限定なので、動物霊や妖怪と行った類はあまり得意ではないんです。被うことなら得意なのですが、契約もしていない力の強い動物霊を従えるのは些か……すみません」

美形の上司に苦い微笑を浮かべて、申し訳なさそうな声色で謝られると……逆に申し訳ないような気がしてくるから不思議だ。反射的に私の方こそすいません、と頭を下げていた。

あ、あれ？私この人に森に放置されて死にかけたんだよね？あつれー？

思わず首をかしげた私はふと、チュンの鳴き声が聞こえなくなっていることに今更気付いた。

頭の上に、チュンはいない。

周りにも飛んでないし、地面にもいない。

飛んでいったのかもしれないと空を仰ぎ見ていると須川さんのため息が耳に飛び込んできた。

呆れられるのは慣れてるからいいとして、ため息に色気が満載つてどういうことだ。

けしからん、私にもその色気をください。お願いします。

「夜泣き雀なら、貴方の胸ポケットの中です」

「うわ、ほんとだ！い、いつのまに…?!チュン、大丈夫？」

「ちちちっ」

ポケットの中から顔をのぞかせはしたものの、須川さんを見ようとは決してしなかった。

それどころか怯えるようにポケットの中へ潜り込んでいく。

ちよっとくすぐったい感じもするけど、ほの温かいのでよしとする。

「さつき、チュンのこと…なんとか雀っていつてましたけど、新しい雀の種類ですか？」

ポケットの上から優しくチュンを撫でて、顔を上げると目を丸くした美人が私を凝視していた。
信じられないものを見たような反応に思わず腰が引ける。

「まさか、とは思っていましたが……本当に気づいていなかったとは」

「そんなに有名な雀なんですか？！うわ、どうしよう……野鳥の会とかに訴えられないかな？」

「今までこういったものの関わりがなかったことを考えると不思議ではありませんが、まさか、この山に普通の雀がいると思っていたとは」

「普通のじゃないってことはやっぱり貴重なんですねっ！？」

「違います」

ざっぱりと切り捨てられた。

び、美人なだけあって中々やるな！結構なダメージです。

うう、美人に嫌われるのと呆れられるのと突っ込まれるのは切ない。私がこっそりダメージを受けて頂垂れていると、スラスラと出来の悪い生徒にモノを教えるように説明された。

この森で、意志を持つ生き物が“正しい”形でいられるのは水の中と土の中意外は稀であること。

生き物の気配がしないのは、あの世に近い場所であり『生と死の狭間』と行っても過言ではないほど特殊な場所だからだそうだ。

だから、あの森で出会ったものはことごとく死んでいたか、本来のものとは別のものであるか、あちら側に近い存在であるかの3択らしい。

「えーと……っ、つまりー？」

「優君が連れている雀は、夜泣き雀という妖怪ですよ」

「よーかい、って……いや、でも私は須川さんみたいに霊能力とか

靈感とかないですし！！妖怪だったらきつとこんなに懐かないですよね？！あと、あと、さ、触れないし！つかめないし、み、み、みみミミズとかも食べないだろうし！」

「妖怪も食事くらいしますし、個体によっては触れることも可能です。ただ本来なら、夜泣き雀のような妖怪は滅多なことがない限り人には慣れません。知り合いに妖怪の類にモテる人間がいますが、あくまで助力を申し出たり話しかけたりまとわりつく程度でした。契約しているモノは例外としても、契約も見返りもなく行動を共にするなんて少し考え難いですね」

ふむ、と腕を組んでマジマジと私の胸ポケットにある膨らみを見つめられて、私もつい、ポケットの中のチュンに視線を落とす。

相変わらずふかふかしくってクリクリした目が可愛い。天然の癒やし系だ。

へらあとだらしなく崩れた顔のまま頭を指で撫でてやると嬉しかったのか小さく鳴いた。

こうして考えると異常な人懐っこさかもしれない。

鳥を飼ってた友達がいたけど、ここまでではなかった気もするし。

「今はもう契約を結んだ形になっているようですが、それにしても異常ですね」

「契約つて私、チュンと話しかけてませんけど」

「貴方がその夜泣き雀に名を与え、それをこの雀が受け入れた時点で契約は成立して……ああ、なるほど。優君、貴方はその雀の他にもこの森で名を付けたモノがいましたね」

「へ？この森でっていうと……シロのこと、ですか？」

「襲つてこなかった理由がそれでしょう。生き残っていた件に関しては、偶然が重なった結果だと思いますが……これも縁^{えん}なんですよ」

ちらと唸り声をあげて須川さんを睨みつけている大きな獣を見る。夜を固めたみたいな底の見えない闇を纏って、赤い宝石みたいなキラキラした瞳の生き物。

私がシロといた時間はとても、短かった。

でも、確かに私の傍に寄り添うように着いてきたり、私を彼なりに守ろうとしてくれて。

「須川さん、お願いがあります」

「おおよその検討は付きますが、一応聞いておきます。なんでしょうか？」

「私をどうしてこの森に不法投棄したのかはわかりません。はじめは須川さんにあつたら一から十までちゃんと説明してもらって、どうしてこんなことをしたのか問い詰めようと思ってました。でも、説明なしの不法投棄の事も、死体とお化けがゴロゴロしてる怖い森でサバイバルさせたことも、リュックの中にお菓子がいってなかったことも追求しないし、許してあげます！だから、代わりにシロを助ける方法を教えてください」

「私としては、別に許してもらわなくても構わないんですが――
――そう、ですね。説明もせずに放り出したのは流石にやりすぎだったと反省しています。私にも色々思うところがあるのでその点について追求されないのは魅力的ですし、条件を飲ませていただきましょう」

そうと決まれば、と私の肩をポンツと叩いて、手の平をシロらしき大きな獣に向ける。

完璧といっても過言ではないほどに整っている須川さんの顔には、ひどく楽しそうな満面の笑み。

キラキラしたオーラが惜しげもなく振りまかれていました。

「（あ、あれー…？）」

ヒヤッとした汗が全身から吹き出したのを自覚する。

肩から背に移動した大きな手の平と何かを押し出す時に発生する鈍い音が体を襲う。

想像以上に強かった力に突き飛ばされた私は、足踏みを二、三步した後大きく姿勢を崩した。

ポケットからチュンが転げ落ちるように飛び出したのを目にして、初めて表情筋が引き攣る。

でも……………時、既に遅し。

私はシロらしき獣が纏う強大で底知れぬ闇へ、頭から突っ込んでいた。

.

洒落にならない解説と上司様（後書き）

お、終わらなかった！（なんてこったい！

うぬぬ…次こそは…ッ！！

ここまで読んでくださってありがとうございます。
次もできるだけ早くupできるように、頑張ります。

洒落にならない体験（前）（前書き）

フクロウとか見るとほっくりします。

某魔法少年に出てくるフクロウ達が可愛くて仕方ない。

話は最初の方は楽しかったですけど、やっぱりフクロウに目が行く罫。

洒落にならない体験（前）

どうやら私は、まだ普通に生きているらしい。

怨霊とやらになりかけている巨大な犬型の生き物に向かって押し出された可哀想な私。

押し出した張本人に苦情のひとつでも言ってやろうと振り向いたけど、この数日で見慣れた真っ暗闇。

地面らしきところに立っている実感はあるし、夢や森の夜みたいに怖くないから大丈夫だろうと肩の力を抜いた。

周りを見渡してみるけど、シロの姿はない。

ついでといわんばかりに音もないので、思わずため息が漏れた。

「（静かなのは嫌いじゃないんだけど、静かにも限度つてものがあるとおもったよね。静寂とかじゃなくって無音だよ、これは）」

昔から、しーんと物音一つしない空間が嫌いだった。

特に音が無くて、寒くて、狭くて、暗いところは苦手。

でも、上の条件が全部揃わなければなんの問題もないんだよね、これが。

寒くて暗くて狭くても、音があれば大丈夫だし、寒くて音が無くて暗くても狭くなければ大丈夫。

ってことでこの空間は暗くて音がないけど、寒くないし狭くもないからなんともない。

お腹空いてて疲れてて、お風呂入りたいしベッドにダイブしたいけど、ここまで来たらシロを枕にして寝てやる。ちよつとでも心配させる方が悪いんだっ！嫌がったらやめるけどさ…、かわいいそうだし。

「シロー！シロー、どこー？美味しいご飯、迷惑料代わりに食べさせてもらっよう！あと、天然の露天風呂もあるみたいだから一緒に

はいるよー！ご飯にお肉出してもらってから隠れてないで出ておいでー！おっかないのも、もうでないって須川さんが言ってたし」

恥を忍んで、大声を出してみたものの返事どころか気配すらない。叫んだのはいいけど物凄く恥ずかしくなってきた思わず顔を覆って、しゃがみこんだ。

う、うう。なんなのこの辱しめ！学芸会で台詞を囁んだ主役並みに恥ずかしいよ！

「確かに突撃したはずなんだけど……白昼夢？いや、ないな。うん。目開けたまま半分寝ることはできるけど、流石にない」

ブツブツと暗闇でひとり、推察を繰り広げてみるけれど聞いてくれる人も、反応してくれるものも何もない。

ため息と共にごろん、と地面の感触がするのを確かめて少し、休むことにした。

少しだけひんやりした真っ黒でのっぺりとした地面（地面っていうか床っぽい？）に大の字になって大きく伸びを試みたり、無意味に転がってみたりしたんだけど……やっぱり変化はない。

「白吉、人間って放っておくと拗ねるって知ってる？」

思わず半目になってつぶやいた言葉は私の本音ではあったけど、これで何らかの変化が起こるなんて夢にも思わなかった。

つぶやいた瞬間、何かが遠くから走ってくる音が響く。

とたたたつと二足歩行の生き物では到底出せないような足音は、昔近所の犬が全力疾走で私に突っ込んできた時の音に似ていた。慌てて体を起こした私は音の聞こえてくる方向を見ると白い、小さなものがこちらに向かってくるのが分かった。

どんどん、どんどん大きくなってくる、白い塊は紛れもなく『白吉』と勝手に命名し「シロ」と呼んでいた真っ白な犬だった。

ただ、気になるのは…

「サイズ、縮んでるようにみえるんですけど。もふころしてるのは大歓迎だけど大型犬から小型犬と中型犬の中間位になってないですか？」

この縮み具合は絶対に洗濯機で洗濯しちゃうダメなセーターを洗濯した結果、みたい。

大人サイズから子供と大人の中間（若干子供より）に戻っちゃった感じなんですけども。

ええー、と小さな混乱を巻き起こしている私を全く意に解した様子もなく突撃してくる白い犬は、一心不乱に私に向かってきている。このままいけば確実に痛い目を見る。

ぶつかるときに減速とかそういう便利かつ必要な機能は犬に備わっていないんだ。

知ってるよ、何度も経験したからね！だって、痛かった。

「でも、受け止める姿勢とっちゃうんだよねー……痛いのが好きじゃないんだけどな、……あ？」

おいでーと、腰を落として衝撃に耐えられるような体制をとったあ

と、軽く両手を広げた私はふと、白い塊の後ろに“ なにか別のもの ”が存在していることに気づいた。

多分、色は黒一色だ。

見られているという自覚は、現在進行系であつた。

目があるわけじゃないのに感じる“ 視線 ”に似たもの。

重苦しい威圧感に耐えかねて闇から意識を白い塊へ向けて、ようやく気付く。

「（会えたのを喜んでるんじゃない…… 必死に逃げてるんだ）」

背後を振り返ることなく一心不乱に四肢を動かすシロらしき白い獣は、脇目も振らず駆けている。

余裕がないのは一目瞭然で、このままだと私も危ないのだろう。わかるのは、たった一つのこと。

このまま、この場所に留まれば確実に“ 飲まれる ”ってことだけだ。何でそういうふうに感じたのかはわからないけど、確実に何かがなくなる。

「って、ちょ、シロ！？前足！前足大変なことになってる……！」

近くなつたせいで分かった、白い左前足の赤い染み。
ぶらんぶらんと揺れているように見えるのが気のせいだいいな、
なんて現実逃避を図ったところで事実は変わらない。

行けるか？と脳裏をよぎる言葉。

手を差しのべるなら、最後まで逃げ切る覚悟と万が一捕まった時の
ことを考えて覚悟をしないといけない。中途半端で投げ出すのは簡
単だし、よくそうなってしまうけどこういう場面で――　　少な
くとも、自分以外の命に関わるような時に投げ出すのだけはしたく
ない。絶対に。

あいつらと同じにはならないし、成り下がる気もないから。

「おいで、シロ！」

真つ直ぐに走ってくる獣の名を大声で喚ぶと、ようやく彼は私と
目を合わせてくれた。

いまいちシロだって言い切る自信がなかったんだけど目があった瞬
間に、自分の勘は間違つてなかったんだと知る。

犬の見分けはつかないけど、でも、シロだってことはわかった。
声をかけた瞬間に揺れたように見えた黒い目に私は精一杯の強がり
と根拠のない自信を駆使して笑顔をつくる。私が不安がっていたら
シロだって不安になっちゃうはず！

「大丈夫だから、おいで、シロ！」

さあ、と全身で受け止める姿勢が取れていることを示すとシロは決意したように私の腕の中に飛び込んできた。

大型犬サイズなら抱きしめるのが難しかったかもしれない。

でも、今は小型と中型の間をとったくらいの大さだから受け止められた。

しつかり落とさないように抱きかかえた私は目に見えない“ナニカ”から逃走を謀る。

追いついてみる！なんて強気なことは言えないし言う予定もない。

お願いだから追いつかないでくださいと土下座して許してくれるなら即土下座してくらいのビビリ具合だからね！

「（は！そ、そういうえば私ってあんまり走るの得意じゃなかったんだ！しかも長距離とか……う、馬鹿なことしたかも）で、でも一生懸命走るからね！い、命懸けのダイエットだと思えばきつと……ッ」

「く、くん」

ものすごく不安そうな視線を腕の中から頂戴した。なんでだろーね。

くだらないことを話していられたのも、ほんの僅かな間だけだった。追われるという恐怖と疲労で10分も立たないうちに速度がズルズル落ちてくる。

わかってるさ、運動不足ってことくらい！

ぜひゅー、ぜひゅーと荒い息を吐きながら、今にも止まりそうな足腰に鞭打って必死に動かす。

流れ落ちる汗を拭う余裕がない位に必死だった。

走って、走って、肺と喉が焼け付くような痛みを訴えて呼吸がままならなくなり始める。

足はまだ維持と根性で動いてはいるけど、限界は近い。

日頃の運動不足に加えて二泊三日の山登り（不法投棄発、途中恐怖&死体の歓迎、最終はサバイバル着）をしていたことを思うとよく走れてるなあ、とつくづく思う。

走って、走って、ちらつと背後を見る。

相変わらず広がる暗闇と、知らぬ間に発生していたらしい強烈な悪臭。

夏場に動物系の生ものを放置して、金魚鉢とか水槽の腐った水を加えたような見事な臭気にすっかり意識が飛びかけた。

よろけながらもどうにか、ガクブルな足腰に力をいれて進む。

あんなのに捕まってたまるかー！と半泣きで足を動かす。

どうしてここに来たのかとか、なんでこんなところにいるのかとか、そういった根本的な疑問は綺麗にすっ飛んだ。

そんなの考えてたら確実に終わりだから！嫌すぎる！

「だああああ！もー！本気でなんなん？あれ、なんてやばいもの？！っていうか視線感じるのに姿見えないまま半ば強制的な鬼ごっことか洒落しゃれにならんから！むしろ洒落にしてたまるか！！」

理不尽すぎるこの状況にブッチンと盛大にキレた何かをそのまま怒りにして叫ぶ。

いいんだ、誰もいないんだし！

口が悪い？今更だ！

文句の一つや二つや三つ叫んでもばちは当たらないと思うんだよ。だって、やっとなつたと思ったらドンツて背中押されて明らかに危ないところヘレッツゴーだよ！？

心の準備くらいさせてくれてもいいとおもつのですけどもおおおお！

がむしゃらに足を動かしながら先も未来も過去すらも見えないような暗闇を走る。

腕の中にあるシロはぺろぺろと私の頬や額を流れ落ちる汗を舐めつつ、走りやすいように配慮してくれているのかできるだけ動かないようにしてくれているようだ。いい子すぎて時間と余裕と安全性が確保されてれば、泣いてたね。某有名な忠犬にだって勝てる。

「つつ、わあ？！」

拍子抜けするほど、あっけない終わりがきた。

膝の力と腰の力が同時に抜けて、まさしく膝カックンにあったような脱力感と共に前方へ倒れ込む。

咄嗟に怪我をしているシロに衝撃がいかない体制をとれたことは花丸ものだと思った。

スローモーションのようにゆっくりと流れていく光景の中でシロをどうやって逃がすか、それだけを考える。

きつと私はもう駄目だ。

調子に乗って考えることもなく特攻した結果だから自業自得。だからこそ、シロだけは巻き込みたくない。

いや、元々はシロが巻き込まれていたことなんだけどね？

「ッ…シロ！足痛いかもしれないけど走って私から離れて！できるだけ遠くに！どうなってるのかはわからないけど、もしかしたら私ひとり食べたらくわかんないのも満足するかもしれないし」

地面に叩きつけられる衝撃で息をのんだけど、そうそう悠長なことも泣き言もいってられない。

腕の中にいたシロを開放して、大声で叫ぶ。
怯えて逃げ出してくれればいい。

私の言ったことを理解しなくても、迫る不穏すぎるナニカから逃げてくれるならそれでいい。

それで、よかったのに……白は、自然に倒れ込んだ私の頬をぺろりと舐めて、望む方向とは別の——私の背後を睨みつけて低く、低く唸り威嚇している。

その唸り声には、覚えがあつた。

だって、森や夢で聞いた獣の唸り声そのものだったから——

.

洒落にならない体験（前）（後書き）

お、終わらない！終わらない…ッなんでだ！

っ、次ぎこそは本当に終わらせます。た、たぶん…（汗

ここまで読んでくださってありがとうございます。

拙い表現や文章が多く見られるかとは思いますが、お付き合いいただければと思います。

洒落にならない体験（後）（前書き）

時々自分の小説がゲームになったら…という妄想をします。

結果として必ずしもふもふENDにたどり着くのはどうしてなんでしょう？

あれかな、主人公に色気がないからかな…（遠い目

洒落にならない体験（後）

小さな体で、逃げて怯えていた相手から私を護ろうとしてくれる掛け替えのない命。

荒れ狂う心臓と洗濯機に押しつぶされているような足の痛みが私の意識をつないでいた。

倒れてた時ぐるっと世界が反転し、気づけば温度のない黒い床（？）に気づけば熱くなっていた体が接している。
ひやりとした心地いい温度にもういつそ寝てしまおうかともおもったのはココだけの話だけど、でも、それくらい体と心が限界に近かった……らしい。

この時の私にはそんなことを考える余裕の“よ”の字もなく、
全て終わってから気づいたのだ。

「し、ろ…ッ！」

逃げなさい、と怒鳴りたくなるけれどそこまでの力が残っていない
かった。

歯ぎしりできそうなくらい悔しくてもどかしい想いを抱えつつ、ど
うにか体を捻って背後から迫るナニカと対峙しようとしている白い
もふもふを視界に入れる。

体毛を逆立たせて、いつでも飛び出せるような姿勢をとっている
シロを見て彼が私を本気で護ろうと体を張っているのが分かった。
もしかしたら自分を護るためなのかもしれないと考えたりもしたけ
ど、それなら私を残してこの場から離れればいい。

この場から離れれば少なくとも彼だけは生き残ったかもしれないし、
賢い彼なら私の言葉の意味とそこに込めた想いを理解してくれてい
たはずだ。

「も、いいから。もう、十分だから行って！なんか、おっかないの

がくるんだよ?! シロ、今はちっちゃいのわかってる? ぱくってやられちゃうかもしれないんだよ?!」

「わふっ! わうう、ぐるるるる」

「ご、ごめんね……なにいつてるのかさっぱりわけわかんないんだ。でも、何かかつこいいこと言ってくれたのはわかるし、こうやって護ろうとしてくれるのは凄く嬉しいよ? だけど、ここにいたら駄目だよ、シロ」

今度、もし犬語講座があったら受講しようと思いに決め、荒い息を無理やり整えてから説得すべく声をかける。

こうしている間にも悪臭は強くなり、ナニカが近づいてきている気配がひしひしと闇の向こうからするのだ。不気味なのは近づいてきているのはわかるのに、肉眼では何も見えないこと。

どんなに目を凝らしても、どんなに目をこすってみても、なにも見えなかった。

じつとりと全身から吹き出す汗は暗闇から感じる、異様な圧力が原因だろうな、と思う。

ただ不気味で、臭くて、得体がしれないだけじゃないことに気づいてしまったのだ。

言いようのない圧倒的な存在感と今にも掻き消えてしまいそうな希薄さが面白いぐらいに溶け合って、なんとも言えない闇を形成しているように感じた。

一番不可解なのは、闇の向こうにいるであろうモノを睨みつけるもしくは意識を向けると、シロに触れた時の感覚をふっと思い出すこと。

アレとシロは明らかに違うものであるはずなのに、なんだか、似ている気がする。

例えるなら大粒の苺が入ったいちご大福と、うっすら苺の味がするマフィンを食べたような感じ？

考え込みながら、動くようになった手でずると這うようにシロの傍へ体を寄せて、できるだけゆっくりシロの体を抱きしめる。

手を伸ばした瞬間ものすごく驚いたように私を見たシロがなんだかとても人間じみていて、こんな状況にも関わらず苦笑が漏れた。

「説得が通じなさそうだからひらきなおることにした。戦うなら、一緒にのほうがいいでしょ？私はなんにもできないかもしれない。でも、盾になるくらいならできるはずだから！最近の不摂生で太ったかもしれないし、そー簡単には貫通しないよ。流石に犬のシロみたいに立派な牙はないけど、思いつきり噛み付いて驚かせることくらいできるしさ」

「くうん…きゅーん」

「ちょ、今かお舐めたらしょっぱいって！すごい汗かいてるんだから！」

きゅん？と首をかしげたシロに私はグリグリと顔を押し付けてやった。

少しくすぐったそうに身を振ったシロを見て――――私は、開き直ることを決意する。

シロと一緒にいた時間は2日にも満たないくらい短い時間しかない。

黒いお化けと死体と、獣の唸り声のする自殺の名所で出会った自分以外の生き物。

チュンと同様……ううん、チュンよりも酷い怪我をしていたシロを全裸で（いや、服を汚さない為に自分で脱いだんだけどさ）背負って、川で体を洗い、治療とは言えないオマジナイ的な処置をした。安全そうなところに寝かせて傍らに捕った魚を置いておいて、そのまま進んだ私のあとをいつからか追ってきていたシロ。

白く見事な毛に覆われた体をそつと撫でた時、凄くすごく嬉しそうにしていた。

寂しかったのか、怖かったのか、それともただ単に人にそうされることが好きだったのかはわからない。

でも、千切れんばかりに振られた尻尾とひどく気持ちよさそうに目を閉じて体を擦り寄せる姿がポンッと浮かんで口元がだらしなくゆ

るんだ。

「（あんな姿みちゃったら、護りたいって思うの当たり前だよね）」

本当に、嬉しそうに私のそばにいてくれたんだ。

シロに出会った時……私はただ目の前に怪我をしている動物がいたから助けただけ。

助けた見返りだとかそういうのは全く期待もしてなかったし、そんなことを考える余裕もなかった。

後ろから付いてきていたシロに気づいてべる顔を舐められてからは私の近くで道案内をする観光ガイドの如く、着いてきてくれた。

チュンはいたけど、小さいし安心感は多少あったと入ってもやつぱり不安で、怖くて。

そんな状況下にいた私にとって大きなシロの存在はとっても有難かった。

遠慮なく触れられて、抱きしめられて、ちょうどいい距離を保ちながら傍にいようとしてくれることがこんなにもありがたくて嬉しいことだなんて思わなかった。

目が合えば遠慮なく全力で喜びを表して、歩きにくい道を先導して歩きやすい道まで案内し終えたら褒めて欲しいと言うように尻尾を振りながら“お座り”をして、名前を呼べばキラキラした黒いつぶらな瞳で見上げる。

ここまでされて、何も感じないなんて余程の猫好きか動物嫌いか

犬アレルギーの人だろう。

「ぬ、我族を　　った代は　　いわかの所で　　な？」

突然真つ黒な空間に響きわたった、地震のような声にだらけきった顔をあげる。

周囲を見回しても変化はない――　　ようにみえた。
目の前にぎょろりと現れた大きな赤く綺麗なものが現れるまでは。

「・・・・・・・・え？」

闇の中に突如浮かび上がったのは犬の石像がある場所で見た綺麗な赤いナニカだ。

両手を広げても足りないくらいに大きいけど、こんなに綺麗なものを見間違う筈がない。

ぽかん、と口を開けて事態についていくことができてない私の腕の中から、シロが怖々とした様子で這い出し、直ぐにひれ伏した。

：人間だったら土下座している感じで、こっ「すいやせん、おやびん！どうぞ御慈悲を！」とか叫びそうだ。いや、うん、ここまでおちゃらけてはいないんだけど、粛々と処分を待っています！って感じなのは間違いない。

『許さぬぞ、我が一族を裏切った代償は軽くないとわかつての所業であるうな？』

「うひゃあ！？や、やっぱり凄い…地震が喋ってるみたい！目がこれだけ大きいってことは、体はもとおおきいってことだね？！やっぱり山くらいあるのかな？それとも真っ暗な不思議空間の中だけなのかな？にしてもホント綺麗な目。どっかの特産でこういうガラス細工あつたっけ……今度買ってみよう！きっと白いシャーベツトとかにを美味しく見せてくれるはず！」

大きさや美しさに思わず興奮した私は立ち上がって、目の前にある巨大な赤い目へ近づく。

臭気はまだする筈だけど鼻が麻痺しているのかほとんど何も感じな

かった。

自分の体くらいありそうな目がある（しかも宝石みたいに綺麗！）
んだから興奮せずにいられるかって話だよ。私はキラキラしたものと
か、ガラスとかそういうのがかなり好きだ。

ガラス細工が売ってる店に入ったら1時間は余裕で居座れる。

大きな瞳に惹かれるようにふらふらと二、三步足を踏み出す。

すると、今まで震えながら伏していたシロが慌てて私の靴の紐を噛
ん引き止めようとものすごい力で引っぱ張った。

倒れそうになったけどどうにか体制を整えた私は視線を落としてシ
ロを見る。

「っと、シロ？えーと……流石に、触る気はないよ？」

「がっうっ！」

当然です！と言わんばかりに抗議しているような声だ。

反射的にごめんなさいと誤ってその場に正座した私に大きな瞳が細
められる。

むむむ、どうやら本当に目らしい。

『ヒトの子よ、我が何者かわかっておるのか？』

「す、すいません…正直全くわかりません。怖いとはおもいませんけど、でも、シロに少し似てるな…って思ったらあんまり怖くなくなっちゃって……ここって、何処かわかりますか？あと、須川さんのいるところにシロと一緒に戻りたいんですけど、どうしたらいいのか」

うーん、と正座したまま困った顔をしているであろう私を赤い目はじっと見つめていた。

ゆらゆらと揺らめく闇と不思議な威圧感からは恐怖を感じない。

赤い目が怖いというわけでもないの、益々わからなくなってきた。私はさっきまで、何を怖がっていたんだろうと。

『我は、ソレが仕えていた山神じゃ。この森はヒトどもによつてずいぶん穢されておる。小娘もみたであろう、あの忌々しく浅ましい念の塊を』

「念の塊……って、もしかしてあの黒い人型をした？」

「そうゆうておろくに。あれらは同類を勝手に呼び込み、増殖して我が山を侵食していきおる。その対策に当たるようソレに任せたが、未熟さ故ここまで侵食されたのじゃ」

「神様がシロにあの怖いのを退治する仕事を任せたってこと、ですよね？侵食っていうのは……？」

「主が引きずり込まれたこの場所が、なによりの証拠じゃ。夜な夜な穢れた思念を貪り喰い、神聖なる力を欲で塗りつぶし、禍々しき力を浄化しきれなくなっただのはソレが油断したのが原因。我は十二分に対抗する力を与えておった」

ビリビリと肌を通して染み入るような怒りにびくつと体が反応する。

でも直ぐに足元でかわいそうなくらいガクガクと震えている白い塊を見てぐっとお腹に力をいれて震えそうになる足に力を込めた。

回転が普段よりかなり鈍くなっている頭を必死に働かせて、自分なりに解釈してみる。

つまり、シロは神様に仕事を任せられて失敗しちゃっただけじゃなくて怪我もしたから怒られている、ということか！

で、失敗の原因はシロが油断してたからで……あれ？これって、

「須川さんがいったた墮神^{おちがみ}っていうのになりかけてた原因？」

『ヒトの世ではそのように呼ばれておるようじゃな。“出来損ない”になれば、神よりヒトに近しきものになり穢れにまみれ、やがて朽ちていく……時折、こやつのような“出来損ない”になるモノがいるがそれらは、眷属の長や管轄している神が裁きを下し排除することになっておる。』

「でも須川さんみたいな人達が倒しちゃうこともあるんですよね？」

『稀に、ヒトの子らに排除されることがあるが…そうなれば正真正銘の出来損ないであろう。神の眷属に名を連ねていたことも帳消し、また力の一部を託した神にも微々たるものとはいえ影響が出るまこと、目障りな存在よ。』

じり、と圧力が加わったようでシロが見えない力で黒い地面に押し付けられた。

それでも一言も声を発さない。
発せない、だけなのかもしれないけどシロはただ平伏した体制を保っている。

それは意地のようにも見えた。

「シロ…！ど、どうしよう……っ」

「ふむ……そなた、コレを助けたいか」

「助け、られるんですか？！」

「考えてやらんこともないのお……混沌と化しておったあの森の中を充分とは言えぬ備えで、正気のまま抜けきれたのじゃ。ヒトの子が無事に我が膝元^{ひざもと}までたどり着いたのは、数十年で5人しかおらぬ。それも、そなたの様なモノは長きに渡って人の世を見てきた我^{あいまみ}でも相見えたことはないぞよ」

神様の口から聞くと、裏仙雲岳を突っ切るのは本当に危なかったらしいことがわかる。

ありがたいけど知らないでいたかったよ…なんか私まで須川さんみたいな特殊な人になったみたいなのがしちゃうし。見てる分にはいいけど実際に霊能者になんかなったら大変だと思う。

今回体験したみたいな怖い経験を半強制的にしなきゃいけないんだろうからね。

そんなの御免被りたいもん。

盛大に引きつった顔をしていたらしい私をみていたらしい神様は愉しそうに笑った。

それを機に真っ黒かった周りの景色が、薄れていく。

『 そなた、名をなんと申す 』

「江戸川 優です。あ、あのっ！山神様、シロ—— 白吉はどうなるんでしょうか？」

『 我が直々に裁きを下そうと思っておったが、気が変わった。我の一族から追放し、優に仕え年に一度供物を届けに参れ。その時には必ず優をつれてくるのだぞ。われが直々に迎えてやろうぞ 』

「シロを助けてくれるんですか？！」

『 そう云うておるうに。お前の持つ匂いや力は我らにとってひどく心地よいのだ。またくるとよい、歓迎するぞよ。その際には酒とツマミを持って参れ。それを対価とし、今回の失敗には目を瞑り後始末もしておいてやろう—— ソレはもう、どのように扱っても構わぬ。元々朽ちる運命だったのじゃからの 』

黒かった景色が柔らかい乳白色に変化して、私の体をふわふわし

た毛皮が包み込む。

それが山神様の尻尾であることに気づいて固まっているとべろん、と生暖かくて湿った強大な舌がつま先から頭の先までを舐め上げた。咄嗟に漏れそうになった悲鳴をこらえた私は偉かったと思うんだ。うん。

「山神様っ、シロを助けてくださって本当にありがとうございます！私、美味しいお酒とおつまみ持ってきて来ますから楽しみにしてくださいー！！」

『 愉しみに待っておるぞ、優よ 』

包み込むような力強く優しい声に私は体の力を抜いた。

真っ黒だった空間が白くなっていくにつれて体が重くなり、目蓋が下がっていく。

滲みゆく意識の中で私は山神様がシロに何かを告げている光景が見えたけど、もう何を言っているのかは聞き取れなかった。

遠ざかっていく意識の中で最後に見たのは、大きな赤い瞳とそれに見合った大きな大きな口、荘厳で威厳溢れる威風堂々とした風貌の山神様の顔だった。

久方振りに、面白いヒトの子を見たと満足そうに消えゆく主の姿を見る山神にシロはホッと胸をなでおろした。

自分がこうして存在していただけることよりも、ヒトの子である優が無事に…… されどどこか仕えていた山神から加護まで授かって人の世へ戻った事への強い安堵感だった。

有難うございますと深く深く頭を垂れながら、シロはただただ感謝の意を示す。

「一族からの追放はしたが、優に関連することからは報告するの

じゃぞ。あのヒトの子は善い、稀にみる面白き生き物よ。見たところ、一番先に目を付けたのは我じゃな……他の神が知つたらさぞ悔しがらうて。我がソナタにさずけし力は、命がなければ使つてはならん、ゆめゆめ忘れるでないぞ
』

心得ております、と告げると山神は満足げに一度頷いてスツと驚くほどあっけなくその空間から消えた。

残されたシロは、ぐるりと自分の周囲を見回して神がいた場所へ深々と一度礼をした後、山神に続くように掻き消える。
残されたのは、清い静寂と真白い平穏。

……護り、護られて生き物は生きている。ヒトなるものは、みな弱いのだから。

.

洒落にならない体験（後）（後書き）

お、おわたー！！！（歓喜）

後は、閉話をかいて『洒落にならない』シリーズは終了です。
読んでくださってありがとうございました！

洒落れじゃなかった二泊三日（前書き）

大事なことを伝えられずに放置される新しいプレイです。
実際やられるとかなり堪えますが、慣れれば快感に変わる…はず？

洒落れじゃなかった二泊三日

眩しさを覚えて目を開けると、整いすぎた容姿の男と目があつた。

起きがけ一発で拝むには些いさか刺激が強すぎたらしく思わず悲鳴がこぼれ落ちた。

きゃー！とかそういう女の子らしい可愛い声じゃなくて、うぎゃあああ！とかそういう、女としてはとてつもなく残念なものだったけどね。いいんだ、もう。可愛さなんて生まれたときに忘れてきたんだよ、きっと。

ぶつかつた硬い何かに縋り付いてプルプルしつつ戦々恐々と天敵である美男子の動きを観察する。

急に動いて、しかも無駄に良すぎる声で何か言われた日には何かが終わってしまうかもしれないと寝惚けまくつた脳みそが判断したらしい。

「……怯えられるようなことをした自覚はありますが、顔を見て悲鳴を上げるくらい私が嫌いですか」

「だ、誰だつて寝起き一発でその無駄に綺麗な顔が目の前にあつたら悲鳴くらい上げます！不公平！」

「私のことは嫌いではないんですか？」

「別に嫌いじゃないですけど……って、あれ？ここ、家の中？私、山の中にいたと思うんですけど」

「無事に戻ってきたので宿に運びました。この宿は我々のような人間の為に建てられているので、悪いモノが侵入してくることはまずありません。邪神なら可能性もありますが、清められているこの土地に好んで近づくことはまずないので安心して寛いでください。今日は一泊する予定でしたが二泊に伸ばしたので安心して体と心を

休めるように」

はい、と元気な返事をしつつ、しがみついていた柱から離れた。ホッと息をついたところで大事なことを思い出し、部屋に備え付けられている椅子に座って優雅にお茶を飲んでいる上司様の様子を伺い見る。

濃い山鳩色やまばといろの着流しは鮮やかな髪色を引き立てているばかりか、彼がもつ気品みたいなものを強化してるように見えた。正直、羨む気持ちがないわけじゃないけど張り合えるような容姿でもないのがにしないことにした。近くに寄られて鳥肌が立ちそうなことを言わなければきつと無害だ。

「須川さん、あの、チュンとシロはどこですか？すごくお腹好きでした！お風呂にも入りたいです！」

「夜泣き雀と山神の眷属なら部屋の前に。食事は伝令を飛ばしたので、あと数分もすれば部屋に届きます。入浴については話すと食事を終えてからにしてください」

「し、質問いいですか？あの、伝令って伝言みたいなものですよ？電話もしてないし、それっぽいことしてた記憶がまったくないんですけど」

「使いを飛ばしたんですよ。一般的には式と呼ばれていますね。その内貴方も使えるように……なるには難しそうですが、鍛錬次第でしろうか。まあ、食事についてはいつでも提供できるように準備をしておくよう指示をだしていたので」

「すみません、色々ツツコミどころに満ち溢れてるんですけど！
ぐにぐにと米神の当たりを揉みながら、上司様の言葉を反芻して噛み砕き、解釈すると……つまり、あれだ。遠まわしに私もお化けを見たり幽霊と話したりできる霊能力者だと言っているわけだな。」

「わ、私はただの一般人です！幽霊もオバケも見えないし触れませんっ！」

「散々この世のものではないものと接しておいて、今更それをいいますか？貴方が怖がっていた黒いモノは紛れもない“幽霊”や“おばけ”の部類ですよ」

口元を袖元から取り出した高そうなので
なんだか凄く可哀想な目で見られてる。え、なんですかその目。
引きつった顔で固まる私を華麗にスルーした彼は再びお茶で喉を潤し、口を開いた。

「今の貴方には探知能力に長けた“夜泣き雀”という妖怪と“犬神”が式として仕えています。非常に稀なケースではありますが、堕神になりかけたモノが無事に昇格したようですね。新米とはいえ、かなり力の強い犬神ですから躰はきちんとするように」

「は、はあ……」

何を言ってるんだろう、この上司様は。

ぽかーんと口を開けたままの私に何を言っても無駄だと思ったのか溜息を付いて、ずっと長い指を私の背後に向ける。

反射的にその指を追って振り向けば、いつの間にか美味しそうな豪華料理が高そうな卓に並んでいた。

美味しそうな匂いがあるので本物っぽいのはわかるんだけど……非常に信じがたい光景だ。

だって、誰かが入ってきた気配どころか、料理が乗ったお皿を卓に置く音すらなかったんだよ？！

慌てて目をこすった私に、須川さんはすかさず「本物です。安心なさい」と一言告げて二つある高そうな座椅子に腰を下ろした。

すごく高そうな料理ばかり並んでいるのに、須川さんが席に座ると普通の食事に見える。

これが私だったら一ヶ月分の食費を奮発orボーナス全部使い切っ

た豪華なご飯だよ！の図に見えるに違いない。
気品？そんな食べられないものいりません、とか思ってた私はきつ
と一般庶民代表ですね。

「……………」

ほかほかと湯気を立て、非常に食欲をそそる芳^{かぐわ}しい香りに思わずヨ
ダレが口の端からこぼれ落ちそうになった。咄嗟に拭って恐る恐る
須川さんの対面側にある座椅子ににじり寄る。

普通に近づけばいいのはわかってるんだけどね、やっぱり豪華す
ぎる食卓と内装と雰囲気は私に合わなさすぎるんだ。

だからつい、へっぴり腰。

ふ、ふんだ！小市民だと嘲笑うがいいさ！

どうにか何事も、何も壊さず汚さずに目的の座椅子に到着した私
はビクビクしながら座椅子に腰を下ろして……ものすごく、驚いた。

「な、なにこれ。座椅子の癖に座り心地がソファちつく！？こ、こ
れもオバケの仕業ですね！」

「違います。それより早く食べないと冷めてしまいますよ？苦手な
ものがあれば言うてください、直ぐに別のものを持ってこさせます

から」

「……………おかねもち、こあい」

「？何かいいましたか。すみません、聞き取れなかったんですが…」

「イイエ、ドウゾ気ニシナイデヤツテクダサイ。えー、じゃあお言葉に甘えて……………いただきまーす」

感じたことのない緊張を覚えているらしく手がプルプルしてるのがみえる。

とりあえず、自分の目の前にあった椀を手にとって開けてみた。

ほわぁん、と青柚子のいい香りと蛤はまぐりの香りが鼻から頭に突き抜けてここぞとばかりに空腹中枢をピンポンダッシュして回っているみたいだ。

生唾を飲み込んでからそつと椀の縁ふちに口を付けて、中の汁を一口口に含む。

まずはじめに、青柚子の香りが広がって次に濃厚で上品な潮の香りが口に広がる。

貝の旨味が存分に引き出されて、物凄く美味しい。

飲み混んだ後は二つの香りが綺麗に合わさって消えていった。

「…………おいしー…………」

思わず溢れた本音に驚いていると、何か生暖かいものが頬を伝っていることに気付く。

不思議に思って腕を置いてから違和感を感じる所に指を這わせる。指先から伝わってくるのは、微温湯ぬるまゆに触れた時と非常に似通った感触。

「あ、あれ…………？」

それが涙だつてことに気づくまで少しだけ、時間が掛かった。ぐしぐし、と袖で濡れているであろうところを擦ると優しく窺たしなめる声かけられる。

視線だけ向けると今まで見た中でも、一番暖かくて優しい微笑を浮かべた上司様が少し身を乗り出して私に手を伸ばしていた。

伸ばされている綺麗な手は顔を擦っていた私の手を優しく掴んでよける。

この時点で崩壊寸前だった涙腺はピタッと働くことを放棄していた。

「温かいものを口にしたことまで張り詰めていたものが緩んだ
んでしょう。死の残骸や人間が持つ負の部分を見ることはこの仕事
をする上で必要なことではありません……ですが、少しばかり早急に
コトを進めすぎました。すみません、怖かったでしょう」

須川さんは、片手で私の頬つぺたを包み込んだ。
ひんやりした少し低い温度の肌に骨張った手は間違はなく人間の男
の人のモノで、緊張がゆるゆる解けていくのがわかる。
目を閉じた私に優しい声が降り注ぐ。

「実は、今まで部下というものを持ったことがないんです。アルバ
イトも雇ったことはありませんし、正し屋を開くまでは占師のよう
なことをしていました。他にも色々しましたが基本的に自分以外の
“誰か”と一つのことを成すのは好きではなかったんですよ……自
分ですらやってしまった方が早く方が付きますし、予定にズレも障^{しょう}じに
くい」

慰めるように親指の腹で涙のあとを拭われる。

正直、こんな風にされたことがないから凄く居た堪れないけど、頬
から伝わってくる少し低い体温は気持ちいいと天邪鬼気味な私でも
素直に思えた。

……ち、ちよっとくすぐりたいけどね。

にまにま笑っていると、小さく吹き出すような音が聞こえた。

(……………む?)

閉じていた目を開けると私の頬に触れたまま、顔を背け、空いている手で扇子を持ち私から器用に顔を隠している須川さんの姿が見える。

彼は背も高いし手足も私より確実に長いからか、食事が並んだ卓を挟んでも障害にはならないらしい。

小さく肩を震わせてクツクツと喉を震わせて笑いを噛み締めているような音に思わず眉間にシワが寄る。こ、こっちは色々としリアスチックな気持ちだったっていうのに！

「し、失礼……ツふふ、優君は本当に、面白い……っ」

「れでいーの泣き顔を笑うなんて酷いとおもいます。そ、そりゃ盛大にみつたくなーい顔してる自覚はありますけど！折角ひんやりしてて気持ちいい手だな〜って見直してたのに！む、無効にしてやるんですからねっ……とにかくっ、ご飯食べるんでどけてくださ……あだだだだ！ちょ、はにふるんへふか！」

「すみません、柔らかそうだったのでつい。ふむ、随分伸びますねえ」

むにむにぐにぐにと頼つぺたを引つ張られたり押されたりしているうちに、すまし汁は大好きな熱々からぐいと飲めるような温度になってしまった。無念。

食事を再開した私に時々ちよつかいをかけてくる美形上司様には手を焼かされたけど、デザートの冷たくて美味しい葛きりをくれたから許してあげようとおもう。私は心の広い大人だからね！

食事を終えた後は、お風呂に入って、チュンやシロと戯れて過ごした。

二日目も同じようにぐーたら過ごし、気付いたら須川さんに肩を揺すられて「着きましたよ」という言葉で我に帰った始末だ。

収穫と言えば、美味しくて簡単にできる葛きりの作り方を覚えたことだろう。

帰り際に宿の人がレシピを書いてくれたんですよ。実に素晴らしい。

満足感いっぱいです。正し屋の鍵を開け、先に入っていた須川さんの後を追う。

「ああ、そうそう—— おかえりなさい、優君」

「！はいっ、江戸川 優、無事に帰還いたしました！須川さんもお

かえりなさい」

「ふふ、ただいまかえりました。さ、疲れもとれたようですし、明日からは雑用と修行をしっかりとこなしていただきますから覚悟してくださいね」

すこしほっこりした途端に聞こえてきた不穏な言葉と、実に“いい”笑顔の上司様。

ああ、私は一体これからどうなるんだろう……ぜ、前途多難すぎる。ずるずる引きずられながら、明日の自分の不幸を思う。

こうして、私は試用試験（入社試験みたいなものの代わりだったらしい）に無事合格し『正し屋本舗』の雑用兼霊能力者見習いとなったのであります。たはー…

.

洒落れじゃなかった二泊三日（後書き）

そのうち書き直すかもしれませんが、一応これで洒落にならないシリーズは完結です。

ここまで読んでくださってありがとうございました。
もしよろしければ、今後もお付き合いくださいませ。

正し屋本舗の事務のお仕事。 (前書き)

正し屋での日常篇です。

正し屋本舗の事務のお仕事。

あの“自殺の名所に不法投棄事件（命名：私）”から3日が経った。

ぼやーん、と座り心地も寝心地もいい来客用のソファに腰掛けて紅茶を啜る。

コーヒーは飲めないから緑茶か紅茶をよく飲んでるんだけど、正し屋にはお茶（高級な玉露とか抹茶）かコーヒー（豆を挽いたやつ。須川さんはインスタントを飲んだことがないらしい：私もないけど。

苦いから」の二種類しかなかった。

信じられないことにココアもなかったんだよね。冬にココア飲まないなんて人生の60%は損してると思う。

冬はココアだ。

牛乳とちよつとの水、ミルクココアは大きじ5で砂糖は気が済むままで。

空気の入れ替えをしてる時に飲むのが冬のお気に入りだ。
清々しい空気と甘いココアは幸せすぎる。

「ふはー……ミルクティー美味しい」

基本的に甘いものが好きな私だけど、アイスティーは砂糖なしで飲む。

入れるときはガムシロップ3つとミルク2つだ。

これで丁度いいんだけど友達はみんな顔をしかめて「あまつ！」とか「ありえないんだけど」とまあこんな感じで私の味覚を貶す。ひどい。

砂糖なしといえば、お茶もそう。

煎茶とか焙じ茶、玄米茶なんかは間違ってもいけない。

抹茶ラテとかになれば甘い好きだけど、それとこれとは話が別なんです。

「今月は……鬼灯祭りだっけ。んー、鬼灯の形のランプとか可愛いだろうなー……あ、あとは置物とか。それと関連する甘いもの、だよね。どんなのがあるんだろ、和菓子なら多少想像はつくけど色々あるっていうし……洋菓子店もあるみたいだからそっちも期待できるよね。須川さんに色々聞いてみようかなあ」

今、正し屋にいるのは私一人だけだ。

須川さんは野暮用とやらで外出中だし、チュンもシロも出払っている。

上子様曰く、チュンは“夜泣き雀”っていう妖怪で悪いモノの気配を知らせてくれる『怖いホイホイ』らしい。なんでも主の私に近づく“悪意あるもの”や“悪い性質”のものにいち早く気づいて知らせてくれるんだって。

……確かに、不法投棄されたあの場所で危ないところでいつも助けてくれた。

あの声は夢に囚われていたり恐怖で動けなくなったり怖気付いた時、叱咤激励して必死に悪夢の淵から私を呼んでくれた大切な存在だ。

正し屋は安全だと知っているらしく寝るときは必ず戻ってくる。

そして私の部屋にあるタオルの上で丸くなって眠るのだ。始めは私の横で寝ようとしてただけど、すっかり潰しちやいそうだったから頼み込んで妥協してもらった。

でも、代わりに私のベッドで眠る存在がある。

白くてモフモフのシロだ。

あ、正式には白吉しろきちっていうんだけど、通称はシロで固定。

元々は狒犬だったらいいんだけど、色々とびつくりな展開を経て今は“犬神”っていう神様になった。

神様っていつでも本当に最近なつたばかりだから、神様の中でも新社会人な立ち位置らしいんだけど力は強いらしい。

でも、本当に普通より大きくて賢い大型犬なんだよねー。パツと見。

彼を人に喩えるなら『礼儀正しい世話焼きな侍』ってとこだ。

自分より弱い子供や女性には、基本的に交友的だし、自分に対して好意を持つ相手には同じように礼儀正しくしている。私には甘えてくるし時々悪ふざけもするけど、物凄く優しい。

須川さんに対しては……なんていうか、物凄く尊敬しているみたいなんだよねー。

人間くさいところが可愛いと言ったら、須川さんは神妙そうな顔で私の額に手を当てて「熱はありませんね」っていいやがりました。ひどくない?! ひどいよね?!

そんなシロとチュンは私を置いて須川さんと一緒に野暮用を片付けにいつてしまった。

『正し屋本舗』は小粋というか小洒落た雰囲気建物だ。

ぱつと見た感じは、知る人ぞ知る! 小料理屋みたいな感じで靈能力の“れ”の時も感じられない。

軒先には祭りのある月に合わせた照明が吊るされて、小さな鹿威しみたいなものもある。そこで手が洗えるように柄杓もあるし、水は山から水を引いてるん

だつて。

冷たくて、飲んでも大丈夫な澄んだ水だ。

引き戸を横に引けば、まず須川さんが生けた花が出迎える。

木製の衝立を左にいけば事務所。

右へ行けばお手洗があるんだけど、そこまでの廊下も小さな発見があつて面白いんだよね。

格子窓の向こうに見える景色が切り取つたみたいに綺麗なんだつて、縁町の人たちが教えてくれた。

衝立が置いてある奥へすすめば、居住スペースがある。

広い居間にキッチン、お風呂場、お手洗、庭に通じる縁側のある部屋、あと物置と須川さんに禁止されている“入ってはいけない部屋”。

二階に通じる階段を上がれば私の部屋と須川さんの部屋、めったに使うことがないという空部屋が三室。

本当に広いんだけど、不思議と居心地はいい。

「つて、もう2時?! うわ、頑張らないと」

時計が告げるのは後1時間ほどで上司様が帰ってくるという事実。

彼曰く“修行”私からすれば“鬼の所業”だった例の事件が終わったあと、仕事の説明を受けた。

まず任されたのは書類の整理。

ものすごい量の書類を仕分けするのに丸2日かった。

昨日と今日は膨大な書類をデータとしてパソコンのデータにして残すこと。

ちなみに仕事で使うパソコンはインターネットに接続されていない。本当にデータの保存及び保管の為に使っているのだ。

おかげで直接、パソコンに触れない限り情報の漏えいはない。

インターネットができるパソコンは私の部屋と居間にあるから不便じゃないしね。

「（だけど、須川さんがパソコン全くできないっていうのは意外だったなあ。携帯ももってないし）」

なんでもできそうな須川さんだけど、彼にはある意味致命的とも言える欠点があった。

電子機器をまるで扱えないのだ。

正確には扱うことすらできない、だけど。

自動車や家の電気とか冷蔵庫っていう比較的規模の大きいものなら大丈夫らしいんだけど、繊細だったり小さかったりするものは全滅。触れた瞬間に故障してしまうらしい。

須川さんはずっとそんな生活を送っていたから不便には感じないらしいんだけど、私が携帯を持っているのを見て自分専用の携帯を開発するべきかどうか悩んでいた。

結局は携帯が無くても会話はできるので（思念を飛ばす？とかすごいことを言ってた。実際携帯みたいに聞こえるからびっくりなんだけど）問題ないか、と思いとどまったみたいだけ。

「眼鏡かけた男の人って機械とかどんとこい！なイメージだったんだけど……」

ブツブツ呟きながらパソコンに向き直り、データ入力をすることにした。

その間流すのはお気に入りのアーティストが歌う曲だ。

アップテンポだけど、何処か和風で爽やかなところが気に入ってる。もちろん須川さんの許可は得ているので問題なし。

電話だって滅多にならないしね。

基本的に依頼人はまず『正し屋』宛てに手紙を出すか、最寄りの霊能力者に相談する。

手紙の場合は須川さんが直接相手に会いに行ったり来てもらったり、そのまま手紙でのやりとりをして適切な場所を紹介。紹介料はもらうけど、そんなに高くないし紹介される霊能力者が受け取る料金も法外な額じゃないから一番安心で安全な方法だ。

最寄りの霊能力者に相談した場合は色々ケースはあれど、対外彼らの手に負えない依頼になっている。

料金はそれなりに発生するからはじめに相談した霊能力者が“善い”霊能力者であることにかけるしかない。

あとは、飛び込みのお客様だけど……だいたい縁町の人か須川さん

の知人だから、留守にしているでも対応できる。
応接室でのんびりお茶をして須川さんが帰ってくるのを待てばいいのだ。

ぐいっとお茶を飲み干して机の引き出しから飴玉を一粒口に放り込む。

さーて、サクサクお仕事しちゃいましょうかねっと。

正し屋本舗の事務のお仕事。
(後書き)

無難にまずは、雑用編です。

甘味につられた午後三時（前書き）

大福とわらび餅、甲乙つけがたい美味しさですよね。

甘味につられた午後三時

もし、私が犬だったら “おあずけ” が物凄い鬼の所業にみえるんだろっなあ……

ついさっき、ようやく資料のデータ入力を済ませた。

凝り固まった筋肉をほぐすべく、自分の手で肩を揉みながらオジサンくさい声を出す。

痛気持ちいいんだよねー…セルフマッサージって。

ぐにぐにと肩を揉みながら何気なく時計を見るとちよつと大好きな時間に突入するところだった。

一日で重要かつ楽しみすぎる癒やしの3時！良い子も悪い子も大好きなオヤツの時間です！

「ちょっと早いけど今日のオヤツは一福堂の豆大福だつて須川さん
言つてたし、お茶は玉露にしようかな」

お茶の淹れ方は、須川さんに叩き込まれたから一人でも美味しい
お茶が入られるようになりました。ちなみにうちの事務所にポツ
トはない。理由は須川さんが触ったら壊れちゃうから断念。
ま、逐一お湯を沸かすつていうのも気分転換にはいいんだけどね。

ふんふふーん、と鼻歌を歌いながら給湯室に向かう。

給湯室は小さな和風のキッチンって感じ。

言つまでもなく色んなものが高級仕様で始めは湯呑やらカップに触
るのも怖かつたのは察して欲しい。ありとあらゆるものから高級感
が漂ってくるつていろんな意味で怖いんだよ。

流石に一週間も事務所にいれば慣れてくるけど、ぞんざいな扱いは
してない。できない。

お湯を沸かしながらぼーっとしているとガラガラと玄関があく音
がした。

須川さんとシロ、チュンが戻ってきたらしい。

私？私はここずーっと留守番です。仲間はずれ反対！と高らかに宣
言できたらどんなにいいか…！

でもここはグツとこらえてコンロの火を消してから玄関に向かう。
出かけて帰ってくると毎回美味しい甘味を買ってきてくれるから条件反射で体が動くようになった。いや、あれだよ、私餌付けとかされてるわけじゃないからね！

「おかえりなさいーい！須川さん、今日のお土産はなんですか？！」

「ただいま戻りました。今日は“甘味処つるや”のわらび餅ですが……開閉一番に土産のことを聞いたら、次はおあずけですからね」

「すみませんでしたもう二度といいません」

だからわらび餅ください！と頭を下げながら手を出せば物凄く疲れたようなため息が聞こえてきた。次いで、ぽんつと手に乗せられた重みは程よい触り心地の布地にはつと顔を上げると紫色の包が手の上に乗っている。

小躍りしそつになるのを抑えた。

お茶の用意をしてくことと豆大福とわらび餅と一緒に食べても

いか聞くと彼は少し何かを考える素振りを見せてキラキラした笑顔で「かまいませんよ」と頷いた。

……ちよつとゾクツとしたのはなんでだろ？

変なの、と首をかしげながらお茶の準備をして事務所兼応接室に戻ると須川さんがキラキラした笑顔で自分の正面のソファに腰掛けるよう手の平を向ける。

お茶を須川さんの前においてから、支持された場所に腰を下ろした。

ちらつと目の前にいる上司様の様子を伺うと彼は苦笑しながら「食べながらいいので聞いてくださいね」と言いながら一口お茶を啜る。じゃあ遠慮なく、と私はさっそく大福を頬張る。

「ううう、美味しいー！！甘くて柔らかくって中の餡子も丁度いい甘さで、豆の食感がなんとも……ッ！これなら何個でも食べられる。ご飯のかわりにしたい……うう、草餅とかもあるんですよね？！今度連れてってくださいねっ」

「はいはい。優君、任せていた仕事は終わらせてくれたみたいですね。お疲れ様です」

「あ、えっと、う、あ、ありがとうございます？」

「ここ最近、留守にしていましたがようやく片がついたので、私たちがしていたことを説明します。すみません、説明が遅くなってしまっ……」

申し訳なさそうな顔をした美形の眼鏡上司を責められる人がいたら是非あつてみたいと思う。

美形つてお得だなあ、とうっかり遠い目になった私の前に須川さんが複数の封筒を置いた。

白だったり薄緑だったりする、大小様々な封筒には何も書かれていない。

「この封筒はなんですか？も、もしかして引越し費用とかの請求書？！」

「違います。まずは開けてみなさい」

「は、はあ……………あれ？お金が入ってる。えーと、これは手紙？」

一番上にあつたの封筒を手にとって開けてみると中にはお札が何枚かと白い手紙みたいなものが入っていた。手紙には感謝の言葉がこれでもか！と書かれていたんだけど、何かなんだかさっぱりわからない。

感謝されるようなことをした覚えがまるでないんだよね。

手紙によると“探してたもの”がみつかったとか“もどってきた”とかそういう雰囲気なんだけど。

「須川さん、あのー……これっていったい？」

「わかりませんか？これは貴方が雲仙岳で回収した遺品を受け取ったご家族からですよ。あそこは警察でも安全な所しか見回りませんから、奥の方で亡くなってしまうと遺体はおるか遺品すら残りません。家や会社に残しているものはあっても、普通、思い入れのあるものは身に付けている場合が多いですからね…遺体は、残念ながら回収はできなさそうですよ」

「そう、だったんだ……あの、やっぱりあの人たちは自殺しに樹海に入ったんですね」

「ええ。遺書があった人間もそうでない者も借金を抱えていたり行き詰まっていたりしていたので恐らくは。仮に誰かに殺されたとしても、遺体を遺棄するなら自分たちの安全を考えるはずなので、そうそう奥深くまでは行きませんよ」

封筒の中身は、決して少なくない金額だった。

これが20000円くらいならお小遣いとしてありがたく頂戴するんだけど、万札が5枚も入っている。

他の封筒を見てみたけど、平均5万円の現金が封筒に手紙と共に入っていた。

手紙はすごく嬉しいんだよ？でもねー…、偶然の産物でしかないし。

「須川さん、あの、このお金受け取れないのでお家の人に返したいんですけど、どうしたらいいですか？」

「返してしまっていていいんですか？偶然とはいえ、遺品を持ってきたというのは貴方が思っている以上に立派な働きだったと私も思います」

「いいんです。だって、お金に困っている家もあるんですよ？私は別にお金に困ってるわけじゃないし、手紙だけで十分嬉しかったし驚いたからいらないです。亡くなった人だって、遺品持ち帰った私にお金を使われるより、家族が少しでも美味しいもの食べたり服を買ったり生活したりするのにお金を使ってる方がいいですよね！」

「ふふふ、そうですね。わかりました、そのように伝えます」

須川さんに封筒の束を渡して、わらび餅に手を伸ばした私に今度は紺色の包を差し出される。

泣く泣くわらび餅ではなく、その包を受け取ったんだけどずっしりと重い。

首をかしげつつテーブルの上に置く。

大きさはA4くらいのサイズで何か厚みのあるものがくるまれているらしい。

上司の支持で無駄に触り心地が良くて高そうな風呂敷を開いていくと予想もしなかったものが現れる。

「硯^{すずり}と筆と…本」

「貴方には今日から毎日、符を作ってもらいます。効力を込めるのは難しいと思いますが練習あるのみです。午前中は今まで通り“正し屋の従業員”として雑務、午後からは修行をしていただきます」

「しゅ、しゅぎょう?」

「一般的に退魔師や祓い屋、拝み屋、最近では陰陽師もこれと同列

で考えられるようになってきましたが、こういった能力を鍛えていきます。今のままで放っておけば、あまりいい方向には向かわないでしょう……れいしょう霊障——特に“良くないもの”の影響を受けやすいようですし、最低限でも自己防衛ができるようにしておかないとあちら側に引きずられますからね」

しれっとお茶で喉を潤している上司様に私は戦慄する。

今、なんだか聞き逃しちゃいけないようなことを言われた気がするんだけど…？

引きずられるとか怖い！しかも影響受けやすいってどういうこと！？

もしかしてアレか。

日常生活で裏・雲仙岳再来的なことになるっつーことですかい。

黒いのうようよ、怖い夢エブリデイ、気づけばおっかないのと対面！みたいな。

「し、死ぬ気で頑張ります」

「そうしてください。まずは写経と読経、符を作る練習と使役のモノを呼び出す訓練から始めます。できるようになったら、術と言霊に力を込める方法を試して見ましょうか。あとはそこらにいる動物霊や妖怪がどの程度優君に興味を示して懐く、もしくは攻撃するの

か実験しましょうね」

「はい！………って、あれ。実験と違って言いませんでした？」

「優君、お茶が冷めますよ。ああ、よければ私の分も食べますか？」

にっこり笑顔で差し出された大福とわらび餅のコンビに私は敗北した。

必要なことみたいだし、どーにかこーにか頑張らないと。ぶっちゃけお給料も高いし流石に見合う仕事しないとボッタクリ通り越して詐欺になる。

私は、大福を食べた瞬間にこの時のことをさっぱり忘れてしまう。後々「なんであの時領いたの！大福とわらび餅に負けるなんて……！すごく美味しかったよこのやろう！」と自分の意志の弱さと能天気さに軽く絶望することになるなんて思いもしなかった。

昔から安請け合いと借金と浮気はするなって言われてたのにね！。出来の悪い孫でごめん、天国のおじいちゃんおばあちゃん。

美味しいモノに釣られるなって、昔からよくいわれる理由を自覚した日。

甘味につられた午後三時（後書き）

豆大福が食べたくてたまらないです。

わらび餅は夏に食べたくなるのはなんでだろうっ…っふにふにだから？

私と上司様の関係図（前書き）

あっさり、時間が経ちました。

私と上司様の関係図

それは私が正し屋での仕事に慣れ始めた時のこと。

かすかに聞こえてくる蝉の鳴き声と透明感ある涼しげな風鈴の音色に私は口元を緩めた。

時折頬を撫でる夏の匂いを纏った風がすごく気持ちいい。

その心地よさに、思わずふいーっと疲れ切ったお父さんの様な溜め息を付いてごろりとソファの上で仰向けになる。

くわあと口元を隠すことなく欠伸をしたところで、仕事や暑さの所為ぐっすり眠れてなかったことをぼんやり思い出した。

「久しぶりの忙殺仕事量だったなー…オヤツ食べる時間もなかったし。食べたけど」

多量の仕事のお蔭である種の限界を超え、新しい世界の扉を開け
そうになったのも記憶に新しかった。

ちらつと自分の仕事机をみやると、書類の山は後一つ。

実は「結構頑張ったじゃないか！」と区切りという名の見切りをつ
け、只今お昼寝の真っ最中。

つまり開き直りだ。

試験前とかテスト前に良く見られるい潔い現実逃避。

本当はちょこっとだけ休憩をとるつもりだったんだけど気がつ
いたら、うとうとお昼寝を満喫していたのだ。

開け放たれた窓から入ってくる涼やかな風も心地がよくて肌触り
のいいソファに擦り寄る。

高いだけあって寝心地も文句なしの一級品だ。

肩の力を抜いてまどろみから再び深い眠りに入ろうとした時、声が
した。

「優君、口が開いていますよ」

優しく穏やかで物腰の柔らかいその声には、例えようのない色気が含まれて凄く居た堪れない。

気にしたら終わりだ、これは幻聴なんだと自分に言い聞かせて目を閉じる。

うつ、こういう時こそ自己暗示！！

声が予想以上に近くから聞こえてきたとかそういう細かいことこの際無視する。

「（ん？でも確か…まだ外出してるよね？戻ってくるのもまだ一時間はある筈だし）」

ほんの数秒で様々な葛藤を繰り返した私は『泥棒だったら困る』という結論を出して、うつすら目を見開いた。正し屋に現金は殆どないから盗まれるとしたら目のつくところにある高い物品たちと高級菓子。

すこし霞んだ視界に広がる見目美しい青年の、キラキラしい満面の笑顔。

ザツと血の気が引いて、脂汗が吹き出してきて反射的に口元が引きつっていくのがわかる。

頭の中では非常ベルがガンガン鳴り響いて、眠気は一瞬にして吹き

飛んだ。

ちなみに、さっきまで煩いほどに鳴いていた蝉の声も聞こえなくなつて代わりに物凄く早い自分の心臓の音だけが聞こえてくる。

「随分と気持ちよさそうに眠っていましたね」

縁なしの眼鏡を中指で持ち上げ、位置を正してから彼は改めてにこりと微笑んだ。

鉄紺色の着流しと藍色に白の縞柄が入った上品な角帯は、彼自身に馴染んで違和感なく服として成立している。

間違いなく一般庶民が気軽に見に付けられるような値段ではないであろう着物を現実逃避気味に眺めていた私は、ふと違和感を覚えた。

その違和感の原因は、彼の手に不釣り合いな緑色の物体が入ったチユーブが握られていること。

その内容量は新品とは思えないほど少ない。

（え、何でわさび？）

疑問を持った瞬間、私は物凄い衝撃に見舞われた。

鼻から脳天に抜けるような独特かつ強烈な香りと刺激…

「……………っ！…ッ、……………ッッ！」

悲鳴を上げることすらできなかった。

鼻から頭のとっぺんに突き抜けていくどーしよーもない強すぎる刺激に鼻と口を抑えてソファの上でのたうち回る。

未知すぎる強烈な刺激をに、体中からいろんな液体が吹き出てき

た。

……いや、あの汚いと言わないでね。

わかってる、わかってるけど、不可抗力なんだってば！

ぼやける視界と薄れることのない痛み悶絶している私に襲いかかった衝撃。

苦しみでのた打ち回った結果、勢い余って床に落ちたんです。

でも…その痛みすら口腔内や鼻で感じる強烈な刺激には敵わず、気休めにもならなかった。

どれだけ強いんだわさびいいいいいいいい！！！！

怒りを込めておもいきり須川さんを睨みつけて声にならない声で講義する。

「すみません、何を言っているのかさっぱり分らないんですが」

悶絶している私に向けられるのは、無駄に煌めいた笑み。

心の底から楽しそうに微笑みながらチューブわさびを袖元に仕舞い、私がいるソファとは反対側のそれに腰を下ろす。

床に這いつくばり、のた打ち回る私をそれはそれは楽しげに観察している彼に水を差し出すとかそういう当然の配慮は一切ない。

「（み、水を！ウォーター…をッ！）」

ボロボロ泣きながら（わさび恐るべし。元々ダメなのに更にダメ

になったのはこれが原因だと思う）私は、今までに類を見ないほどの俊敏さを発揮して給湯室に猛進した。

ものすごい形相（想像だけでなく凄顔だったと思うんだ）で給湯室に飛び込んで、近くにあった井を引っつかむ。

(みず水みず水みずミズみずミズみず水うううううううう!!!)

蛇口を思いっきり開いて井に注ぎ、迷うことなく一気に煽った。

勢いがつきすぎてちよつと顔や服が濡れたり、軽く咽たのはご愛嬌。それにしても井から水を飲む……実に間抜けで品のない絵面なんだろ。

この時はそんなこと気にもしてられなかったんだけどさー。

少しわさびが流れた私は、冷蔵庫から冷えた緑茶を取り出し再び井に注いだ。

ワサビ独特の刺激が洗い流されていく感覚は多分暫く忘れないだろう。

あの清々しさはちよつとした快感だ。

「おんのおれえ、ワサビめ……ッ！」

ちくしょう、と八つ当たり気味に緑茶を飲み干したところでこの惨状をもたらした張本人からお茶の要請がかかった。

できるなら無視したい。

寧ろ積極的に聞こえなかった振りをしてやろうかとも思った。思ったけど、仮にも上司で雇い主だ。

私は涙を呑み、渋々ガラスの急須に冷えた緑茶を注ぐ。

お茶を飲む為のグラスも添えてお盆に載せた。

井でなんか出しませんよ……ホントは凄く出したいけど。

お盆を手に入りきれない怒りを必死に押さえ込んで、彼の目の前にお盆を置いた。

「…………ど・う・ぞっ！」

目の前にセッティングしてやらないんだから！自分でやればいいんだ！

やや乱暴な動作で彼の前にお盆を置いた私は顔を見ないようにし

ながら、自分が座っていたソファにどかりと腰を下ろす。

「ありがとうございます……ご機嫌斜めそうですね。どうしました？」

「（アンタの所為でしょーが！）どこかの誰かさんが気持ちよく眠っていた私の口にワサビをしこたま突っ込んでくれた所為です……っ！」

密かな私の嫌がらせもなんのそので、「ああ、大変でしたね。瞳が潤んでますよ」なんてケロツと私に言うものだから、キツと彼を睨みつけた。

それでも、目の前にいる眼鏡をかけた和服美人は飄々と

「それにしても、そんな酷いことをするのは何処の何方でしょうかねえ」

お茶を優雅に飲みながら他人事のようにおっしゃった。

「（い、この鬼上司いつ！）」

何か言ってやろうと口を開いた瞬間、今度は固形物が押し込まれる。目を白黒させていると、人の悪い笑みを浮かべた上司が

「帰りに買ってきた”福丸亭”のイチゴ大福です。ここ一週間頑張ってきましたからご褒美に——…美味しいですか？」

「（く、悔しい！ぬううう、すっごく、悔しい！で、でも）……おいひい、れふ」

私の馬鹿ああああ！と内心でのた打ち回りながら、口の中に広がる果物と餡子の素敵コラボレーションに完敗。

柔らかくモッチリとした舌触りの求肥はほんのりと上品な甘さで、中の餡子は舌触りのいいこし餡。

大粒で甘味の強い苺を引き立てるように調節された甘味は流石としか言いようがない。

普通のいちご大福は餡子の甘さ加減を間違つと、中の苺の良さが半減してしまうんだけど……本当に絶妙な甘さ加減だ。

もぎゅ、もぎゅっと幸せな気分でかみ締めながら味わっていると今度は笹の葉に包まれた包みが目の前に差し出された。

「それはよかった…私の分もどうぞ」

「！いいいんですか？ほ、ホントに？」

差し出された笹の包みを開けるか開けないか、の所で何とか踏みとどまりチラリと彼の様子を窺うと穏やかな笑みを浮かべて首を縦に振った。

現金な話だけど、私はこれによって『ワサビ事件』を水に流すことに決定。

ち、小さなことを気にしてるなんて大人としてダメだもんね！
切り替えが大事なんだよ、切り替えが。

それに『福丸亭のイチゴ大福』といえば、一日三十個しか作らない限定品。

手に入れるのが酷く難しいことで有名だ。

あまりに数が少ないものだから朝方、店の前にちよつとした行列が出来たりする。

値段も一つで六百円もするし。

べ、別に甘いモノに釣られたとかそういうんじゃない！
ち、違うんだ。ちよつと心が広いだけだよ！

これまた絶品な笹団子を平らげ、お茶を飲みながらチラッと半目で須川さんをねめつけた。

「…でも、流石にわさびをしこたま口の中につまむのはひどいと

おもいます！」

「では私からも尋ねますが、三日三晩どこか一週間も丑の刻に帰ってきて鳥が鳴く前に起き、仕事をしてようやく帰ってきたのに出迎えるどころかソファで寝こけている部下を発見したらどうおもいます？偶然目についたわさびをお仕置きに使っても仕方ないかな、とは思えませんか」

「うぐ…！そ、それは…その、すみませんデシタ。でもワサビはもうやめてください…鼻いたい」

確かに、私が上司の立場だったらソファーひっくり返すか氷水を頭からぶっかけるくらいはするかもしれない。そりゃそうだよ…普段から色々過激な須川さんだもん、ワサビくらいつつこむよね。酷いけどしかたない。も、もう昼寝はしない！しても許可を取ってからしてやる！

神妙な顔で頭を抱えたのを見て、須川さんが必死に笑いを嚙み殺していたことを私は知らない。

私と上司様の関係図（後書き）

わさび事件です。

実際にやられたら確実にキレてもいいレベル。

きっかけは依頼人（前書き）

ずっと書きたかったある意味本編です。

前々から構想を練っていたのに進まなかったお話（爆

きっかけは依頼人

……私はこの日お客様は時々、厄介な神様になるつてことを学んだ

ワサビ事件を経て、お祭りの後片付けを終えた私と須川さんは店を締めようとしていた。

軒先に吊るされている札を裏返すために玄関へ出た私は、深刻そう

な顔をしている中年男性と目があってしまった。とりあえず会釈したものの、オジサンは私と店を見比べて、慌てて携帯電話を取り出し誰かに電話し始める。

なんだか良くはわからないけど、お客さんだったら困るしなあ……なんて躊躇している間にオジサンは小走りで歩み寄ってくる。どっしりした背の低いオジサンはハンカチで額に浮かんだ汗をぬぐってから人懐っこい笑みを浮かべてついっとお店を指さす。

「ちょっといいかな？ここは『正し屋本舗』という店かい？」

「はい。あの、でも今日はもうお店を閉めるように店主に言われているんですけど……緊急の依頼ですか？」

「実はそうなんだ。ここを見つけるのに時間が掛かってこんな時間になったんだが……頼む！なんとか、店主殿に話だけでも聞いてくれるかどうか聞いてもらえないだろうか？」

今まで歩き回っていたのかかなり疲れているみたいだけど、スーツはしっかりしたものだし、笑顔に胡散臭さも怪しさもなく近所にいる親切なおじさんみたいな感じの人だ。

嫌な感じもしないし、話を聞くくらいなら大丈夫だろうと取り次ぐ為に玄関から事務所に向かって声を張り上げる。行儀は悪いかもし

れないけど、急いでるならこっちのほうが早いもんね！

須川さんの許可を貰った頃、後ろから誰かが走ってきてオジサンが2人に増えたんだけど知り合いというより上司と部下っぽい関係みたいだったからそのまま通した。
ソファを勧めて、私は給湯室へ向かう。

「（夕方だけどまだ暑いし、冷たい飲み物でいいか。お茶菓子は抹茶とチョコのクッキーかな。美味しいんだよねー、これ。いろんな人に食べてもらうために作ったって言うてたし）」

お茶とお茶菓子を持って応接室へ戻ると、依頼人が依頼内容を話し始めるところだった。

お客様にお茶を出してから上司の前に置いたらお仕事は終了。
時々、私が相談の窓口にもなるけど基本的には須川さんが『正し屋本舗』の仕組みについて説明をして、それを依頼人が受け入れれば依頼内容を聞くっていう流れになってる。

ちなみに、依頼を受けるかどうかは依頼内容を聞いてから判断してるので断ることだってあるんだよね。断ることは滅多にないから大丈夫だと思う。よかったねー、おじさん！

お茶を出したことで満足して、衝立の向こうにある自分の事務机に戻ろうとしたら須川さんに呼び止められた。

言われるがまま隣に座った私に合流した気の弱そうなオジサンは訝しそうな表情。

それに気づいたらしい上司は普段通りの見目麗しい微笑を浮かべて私に手のひらを向ける。

「申し遅れました、コレは私の弟子です。今回の依頼には彼女も関わりますのでどうぞよろしくお願い致します。修業中ではあります
が中々見込みはありますのでご安心ください。優君、挨拶を」

「へ?!あ、ええと、はい。江戸川 優といいます。一生懸命頑張るのでよろしくお願いいたします」

急に振らないで!と心の中で若手芸人みたいな想いを抱きつつ、
姿勢を正した。

そういえば、私がこうしてきちんと須川さんと一緒に依頼人の話を聞くのは初めてだ。

いつもは衝立の向こう側で聞き流してたり、子守唄がわりにしてたりするんだけど……難しい話じゃなければいいなあ。

初夏独特の、爽やかな風と夕日の光が窓から室内を照らし出す。

縁町の夕日は綺麗な茜色でとても優しいと思う。

でも同時に“家”に帰らなきゃ、帰りたい、と思わせてくれるから少しだけ切なくもある。

窓の外から聞こえる騒がしくない賑やかな声に楽しそうだなあ、と全力で現実逃避中。

「（はははは、カラスさん。私も茜空を全力で羽ばたいてこの依頼聞かなかったことにしたいなー！）」

「優君、現実逃避するのは結構ですが捕獲して引き摺ってでも連れ

ていきますから」

「せめて俵担ぎにしてくださいッ！慎重さ考えると引きずられる方は拷問もいいところです！」

「あ、あの須川先生？私どもは問題さえ解決していただければ……」

「彼女にしかできないことがあるんですよ。さて、こちらからの条件は――ざっとこんな感じでしうか。同意していただけるようでしたら之にサインをお願い致します」

サラサラと手帳のようになめられた和紙に万年筆を滑らせ、依頼人である男性に差し出した。

それに依頼者が署名しているのを見ながら、何故か自分が契約書にサインした時のことが脳裏をよぎる。

嫌な予感しかないんだけど、明日から有給とか取れませんか？

遠い目をしているうちに、全てが丸く収まったらしい。

気が付けば依頼人である高校の校長先生と教頭先生の見送りをしていた。

周りは少しずつ茜色から上紺色へ移り変わって、チラチラと星も見

え始めている。

とりあえず、提灯をしまってから玄関の錠をかって台所から香る美味しそうな匂いに釣られ奥へ、奥へと進む。

今日の晩ご飯当番は須川さんだから美味しい和食が食べられるはずだ。

ウキウキしながら台所を除くと紺色のエプロンをした須川さんがてきぱきと調理をしていた。

あ、正し屋には竈かまどもあるんだよ！

…炊飯器と土鍋くらいしか使ったことなかった私に御釜は衝撃的だった。

いや、すごく美味しいんだけどさー…。

「今日もやっぱりお手伝いさんフル活用なんですね…」

「腕を鈍らせない為にいいですよ。こういったものは細かい霊力の調整や指示出しを必要としますからね。慣れれば便利ですし、日々霊力を使えばその分量も質もよくなっていきます。優君も一年前に比べて随分霊力が増えているんですが……気づいていないようですね」

「そういえば、チュンとかシロが元気になのってそのせいですか」

「ええ。彼らもずいぶん力を付けましたからそろそろ実践に移るべ

きでしょうね。とりあえず、今回の以来については食事をしながら説明します。まずは食器を運んで下さい、すぐにできますよ」

お行儀よく返事をして支持された食器や食具を運ぶ。

ご飯は基本的に二人なんだけど、シロやチュンも戻ってくるからそれなりに賑やか。

今日も美味しうなご飯に煮物、焼き物、香の物、汁物、旬の食材を使った副菜、氷菓がずらりと並ぶ。

品数にも驚くけど味も一級品。

高級料亭にも連れていってもらってるけどそこと同じくらい美味しい。

ま、味の好みで言えば須川さんのつくったご飯の方が好きなんだけどね。

「そーいえば、今回の依頼どうするんですか？死んでる人もいますよね？嫌な予感しかないんですけど」

「原因を探して改善します。今回は怪異が絡んでいることは間違いないですから、問題のものを除霊してしまえば終わりです。浄霊の方は死者が出ていることから考えても難しいでしょう」

「うう、人間だったらやだなあ。動物とかだったらなんかなるのに」

霊能力者と呼ばれる人間にも得手不得手があって、私は対人間（幽霊っぽいのか、元が人であるもの）なのは苦手なんだけど、相手が動物とか神様だとなんとか話し合うことができる。神様や動物に好かれやすいんだって。

「依頼期間は一応3ヶ月間としましたが、早ければ早いほどいいでしょう。少なくとも1〜2ヶ月で片^{かた}を付けて欲しいところですね。長引けば長引くほどマスコミのいい餌食になってしまいますから」

「報道されるのは嫌ですよね…うー、胡散臭い霊能者として話題になっちゃうんだろうなあ」

「そうですね、頑張ってください。今回は優君に一任します。私もサポートで入り指示をだしたりはしますが実際に動いたり情報を集めるのはあなたの仕事としますから」

「…………え？」

「それから大っぴらに学校へ入って調査をするとマスコミに嗅ぎつけられる可能性が高いですからね…流石に内部まではマスコミも入って来られないので問題ないでしょう。学校自体全寮制で情報が漏れるとするなら外出ができる土日だけ……口外できるようなものでもないですし、ある程度は楽観視してもいいと思います」

食事の最後に食べる氷菓（冷たいお菓子。今日は夏蜜柑のシャーベットでした）を食べる手が止まった。ちょっと待って。ってことは、私たちは学校に先生として潜入するってこと？

慌てて質問すると彼は……“あの”キラキラしい笑顔を浮かべた。

「（い、嫌な予感しかないんですけど）」

ごくり、と固唾を呑んで返事を待つ私に彼はさらりとまるでお使いを言い渡すように告げたのだ。

私にとっては斜め四十五度から巨大ハリセンで叩かれるような衝撃だった。

「教師として潜り込むというのは半分正解です。私は、臨時の教師として潜入しますから」

「じゃ、じゃあ私は？用務員さんとか？」

「一番情報を集められるのは教師にあらず、ですよ。優君には“生徒”として潜入していただきます。貴方の容姿で教師を務めるのはいささか無理がありますし、教師として聞ける情報は限られますから」

「……いやいやいや！！私、立派に成人してるんですよ？！大学だつて出たし、今更高校生に戻るのには難しいと思うんです！心の底からっ」

「ああ、それから以来の期間は私も貴方も寮で生活することになります。学校側でも配慮はしてくれるようですが一人部屋は存在しないそうなので二人部屋になるでしょう……十分気を付けてくださいね」

「私の訴えはスルーですか…結構どころかなり大事なんですけど」

資料は仕事机の上に置いてありますから目を通しておくように、と念を押して須川さんは食事を終え食器をもって台所へ消えた。

私も慌てて食器をまとめて台所へ向かうが、須川さんは先に入浴する旨を告げるなり暫く私の前には戻ってこなかった。

仕方ないから食器を洗って片付けを済ませたあと、仕事机に向かう。

資料を手にとつて目を走らせていくうち、物凄い頭痛と目眩に襲われてそのままズルズルと床に上半身を投げ出した。きっと、だらしない土下座にもみえるだろう。

「生徒として潜入することは百歩譲つて了承するとして、何で、何で男子校？！男子校で生徒として潜入つてことは私は“男の子”にならなきゃいけないってこと？！勘弁して…普通、初仕事つてもつと難易度低いのにするんじゃないの？こ、このまま溶けてしまいたい…！」

いやだあああ！とのたうち回っていると帰ってきたシロが私の顔を舐め、チュンが私の頬に体を寄せた。

慰めてくれてるの？と半泣きで尋ねると彼らは私に擦り寄って、元

気出して！と一生懸命励ましてくれているようだ。

どうやら私は男装する上に寮暮らしをするらしいです。

…それも最長3ヶ月。

絶望的だ。

大体高校に通うとか私、これでも成人してるのになんでそんな事しなきゃならないんだ。

こんな会話をした3日後、私は悪霊怨霊の住まう男子校に潜入したのだった。

マジでご勘弁してください…ぐすん。

.

きっかけは依頼人（後書き）

もっと早くupするはずだったのに、気づけば三分の二は手直ししてた罫。

明日はどうだろうなー…うぬう。

きっかけは学ラン（前書き）

普段和服の人が洋服を着たら結構萌えとおもってます。

きっかけは学ラン

人生の中で前半はただひたすら経験を積む為の時間なんだ、とお爺ちゃんと言っていた。

目の前に広がる光景はどこか懐かしい雰囲気建造物。

学校と呼ばれる教育施設には最短で9年間、最長で12年（大学は除く）お世話になる。

結構な時間を消費する御陰で、感動も感謝も楽しみ、後悔や反省だ

って沢山たくさん思い出として刻まれる重要な場所。

大きな校舎から何かを守るように立っている校門には『市立栄進しりつえいてん高等学校』と書かれている。

4階建ての建物と、左隣には体育館らしき屋根があって、反対側にはフェンスが見えるから多分グラウンドだろう。

「私の通ってた高校の倍はあるや……すっごーい」

「男子校ということで大きくしたんですよ。ここからは見えませんがプールと学生寮もあります」

「プールが学校にあるんですか？！ドラマとか漫画の中だけだと思ってた…私の通ってた学校は皆プールがなくて市民プールにいつてましたもん」

この暑い夏にプールに入れるなんて最高すぎる。

だって、夏にはかき氷とスイカとそうめんとプールでしょ！？

海は足に砂がつくし暑いから好きじゃないけど、プールなら至れり尽くせりだよ！日焼けが凄いいけど。

じーっとプールがあるらしい後者の奥の方に視線を向けていると須

川さんがさらっと私に釘をさす。

「分かっているとは思いますが、優君はプール授業には出られませんか」

「わ、わかってますよ！流石の私でもこんな格好させられればそれくらい言われなくても……うう、この以来が終わったら絶対プールに行っと思う存分泳いでやる」

「言葉使いに気を付けてくださいね？“私”はダメですよ。いいですね」

「ふみまへんれひた」

みゆぎゅつと両方の頬つぺたを片手で掴まれて、あひる口になったままなんとか返事を返す。

須川さんの一人称は「私」だけど変じゃないからいいとして、こんな格好をしている今どきの高校生の一人称が「私^{わたし}」っていうのは無理があると私も思う。

無難に俺、かな。

言いにくいつてわけじゃないし、俺っていうように気をつけなきゃ。

こんな格好、というのは日差しをがつつり吸収する黒い学ランのこと。

朝一番に学ランを渡された時には図太い私でも目眩がしたね。

私がまだ高校生だったら“たのしそー！”とかなんとかっていえたかもしれない。

でも、もう成人して一年しか経ってないとはいえ社会人になった今となつては羞恥プレイでしかないと思うんだ。

いくら背が低いからつてこの仕打ちはないとおもうよ…。

それに、この学ラン、かなりサイズが大きい。

体のラインを目立たなくする為だつていつても、暑いものは暑い。

冬なら歓迎だけど、夏は喜べない。

「にしても、なんで男装…っ！せめて保健室のおねーさんとかしたかった」

私が正し屋で働き始めて一年が経った。

始めの頃は視察に来るのは特に変わった事ではないし、今まで雑用

や簡単な仕事が多かったんだよね。
でも、割と重要な仕事を任せてもらえるようになったのはすごく嬉しい。

ただ、やっぱり理解はしていても現在置かれている立場は不服だ。

右には高級スーツを着こなした須川さんが芸能人も真っ青なオーラを出して悠然と立っている。

うーぬ、和服も似合うがスーツも恐ろしく似合うらしい。
それはいい。

別にいいんだ。時々依頼受けてスーツとか着てるし。

……やっぱり問題は私の格好にもどるわけですよ。

「ううう、やっぱり納得いかない……っ」

「納得は行かなくとも必要なことです。なんとも言いますが教員枠の空きは1つしかないんです。私が教師をやるのは当然でしょう？ 貴方に教師役が務まるとはおもいませんし、保健医はもう既にいるそうですからね。問題は私が教師になった場合、生徒側で流れる噂が耳に入りにくくなることです……」

「私が生徒の噂やら焦臭きりくさい話を聞いて報告すればいいっていうんですよね」

「ええ。流石に私が生徒として紛れ込むのは不可能というよりも不自然ですし、ここは高校生の中に入っても違和感がない優君がやるに越したことはありません。それに、何かあった時に生徒に対するのフォローや問題へのアプローチもしやすくなりますからね」

「わかってます、わかってますけど……でも……これでも成人してるのにこれは色々キツイですって。そもそも年齢以前に性別が真逆なんですよ?! 絶対ばれちゃいますって! お風呂も寝るのも生徒に混じってしなきゃいけないんですよね? 私のうっかり残念な具合だとすぐにバレちゃいますって」

ぶっちゃけ、情けないやら恥ずかしいやらで中々踏ん切りがつかない。

私だって馬鹿じゃない(とおもう)から須川さんの言い分も理解できるし必要性だってわかってるつもりだ。でも、私にだってプライドというものがある。

大体、この上司なら私が居なくても上手く生徒の操作も出来るだろうし、情報収集だって簡単だろうと思う。それじゃ私の修行にな

らないのはわかってるけど、ちょこちょこっと情報収集できるようにしてくれればいいだけの話なんじゃないだろうか。

でも、私の思いをどういう風に説得力のある言葉に変換して反論したらいいのが全くわからない。

ぎゅっと少しサイズの大きい学ランの裾を両手で握り締めた。悔しくて、歯がゆくって、体の中にモヤモヤしたものが溜まっていく。

唇を噛み締めて俯いた私の頭に何かが乗った。重さや大きさからして、須川さんの手であることが分かったけど反応しそうになるのをぐっとこらえて同じ姿勢を保つ。

「……優君、顔を上げなさい」

少しの間沈黙が降りて、ふう……と須川さんの溜め息が聞こえてくる。

怒られるのかな？それとも呆れられた？

どっちの対応も慣れているけれど、クビにされる事だけは避けたいなー…なんて、私にしては珍しく後ろ向きなことが頭の中でぐるぐる回り始めた。

ここは新社会人らしくすっぱり謝ったほうがいいんだろうか、なんて思い始めた時に、真剣で、静かな須川さんの声が入ってきたのだ。

「…や、です」

だって、今絶対情けない顔してる！

すっかり涙腺のあたりが刺激されていることに気づいて益々顔を上げられなくなった。

なんでこんなことで泣きたくなるのかはわからない。

多分、今まで無意識に溜め込んできた不安や恐怖みたいなものが出て来ちゃったんだろう。

初めて任された大事な仕事なのに、と思う気持ちと私なんかで生きるんだろっかっていう不安がぐるぐるしている。

「……ではそのままでもいいから聞きなさい」

とりあえず、頷く。

それに反応したように頭に乗せられた手が二、三度頭を撫でて静かに下ろされる。

頭の上から消えた優しい感覚はひどく名残惜しく思えて、ぎゅっと目を閉じた。

自分で怒られるようなことをしていて、とても怖かった。

怒られるのは嫌いだ。怖いし、嫌われるのは————当たり前だ
けど、イヤだから。

ああ、でもこんな我^{わがまま}俥^ごいって困らせたら怒るのも、嫌だと思っ
ても当たり前だ。

「いいですか、私は貴女を信賴しています」

真剣だけれど何処か暖かい声と予想もしていなかった言葉にバツと顔を上げる。

視界に入っただのは、一年間で一度も見たことがないくらい優しくて柔らかい、微笑み。

まるで草木を、花を、景色を、愛しむようなそれに私の思考は完全に停止した。

思考が停止しても音を拾う耳の所為で、脳みそが盛大に混乱していくのが分かる。

「私は貴女を信頼すると共に期待もしています」

「……きた、い………？」

「ええ————貴女は私には出来ないことが出来る、と」

なんだそれ、とまず思う。

だって本当に、分からなかったんだ。

須川さんの言葉は時々分からないけれど、これほど理解できない事はない。

機械関係のこと以外ならほぼ完璧にこなせる須川さんに出来なくて、私に出来る事…？

そんなものがあるんだろうか。

自分でもわかるくらい半人前（半半人前っていつでも過言じゃないかも）な私に、何が出来るっていうんだ。茶化すならもう少し元気なときにして欲しい。

むっと、眉を顰めてねめつけた私に須川さんは困ったような笑顔を浮かべて「そんな顔をしないでください」と優しく私の頭を撫でた。

優しく、でも確かな安心感を与えてくれる掌にすっかり意識がむいた私に浴びせられる、言葉。

「優君の言葉には不思議な力があります。恐らく貴女が居るだけで救われ、そして新しい世界を見つけることができる存在も多い。現に、チュンやシロが貴方の傍に有り続けるのはそういった理由から

ですよ。私だってなんの期待もできないような人間を自分の傍に置こうとは思いません」

「で、でも…、そんなの気のせいかもしれないじゃないですか！ チュンやシロだって成り行きで一緒にいてくれるだけかもしれないし」

「成り行きで、自分の使える神からただの人間へ従おうとするモノなどいませんよ。チュンにしても、本来なら人には懐かない妖怪です。私だって、使えもしない、期待もできない人間を一から育てる趣味はありません」

きっぱりといいきった彼は手をどけて真っ直ぐに私を見つめる。

「私は……貴方だからこそ、この仕事を任せたいんです」

そういつて彼は綺麗に、綺麗に…笑った。

話は終わりだと言うように大きな手で頭をポンポンとたたいて、さつそうと校門を潜り、校舎に向けて歩みを進めていく。

私の横を通り抜けていく時、彼が愛用している香水がふわりと鼻を掠めた。

少ししてじわじわと足元から頭のとっぺん、髪の毛の先に至るまで広がっていくこの高揚感をなんて言ったらいいんだろう。

嬉しくて、じわじわと喜びが込み上げてきて、モヤモヤがなくなっていく。

（我ながら単純だなあっておもうけど……でも、うん。頑張れるし、頑張ろう…出来る限り、だけど）

やる気がガッツリ体中に巡りきって、ずいぶん遠くなった須川さんに駆け寄るべく足に力をいれて地面を蹴った。綺麗に晴れた青い空と山に囲まれている御陰で澄んだ空気も手伝って、少しずつ須川さんとの距離を縮めていく。

須川さんの隣、この一年間で定位置になった左側にたどり着いた時には、前々から不思議と抱いていた不安や悔しさ……そういつた感情も、妙なプライドもどうでも良くなっていた。

悩むのは性に合わないし持続することもないから頑張ってみよう！
……って思えるようになった。
そもそも、悩む脳みそも持ち合わせてないしね！。

お婆ちゃんは、人生が云々じゃなくて自分に出来る事を精一杯頑張ればいいって言ってた。
お爺ちゃん……ごめん……やっぱりお婆ちゃんの言ってた事の方がわかりやすいよー。

.

きっかけは学ラン（後書き）

校内にすら入っていないと言つて。
えらいすんませんです、ハイ。

きっかけは口裏合わせ（前書き）

男子校編は…男まみれ。

実際にこんな状況だったら多分泣ける。

きっかけは口裏合わせ

緊張しすぎると空腹感がどこかへなくなってしまうらしい。

変な感じがする。

校舎に近づくに連れて、なんだか凄く変な感じがひたひたと迫ってきているような気がした。

校門と後者を繋ぐ道は広い。

大人が広がって歩いても20人は歩ける位のスペースがある。

近づけば近づくほどに増していく違和感に、私は中央付近で足を止めた。

「（別に変なものはない筈なんだけど…見た目は普通の学校だし。大きいけど）」

周囲を見回してみるけれど、広いグラウンドのような土でできた道と石を堺として植えられている芝生と桜の木。

広さがあるから圧迫感みたいなのではないし、見晴らしは文句なしにいいと思う。

正面だけを見ると男子校とは思えないキレイさだ。

ドラマや小説、漫画で呼んだ男子校って落書きがいつぱいで、なんかうつすらどんよりしてるイメージだったから驚いた。

「———どうか、しましたか？」

「なんか、変な感じがするんですけど……よくわからなくて。気にしないでください。えーと、まずはどこに行くんですか？」

「校長室です。そこに協力者を集めて貰ったので、口裏を合わせます。こういうことはきちんとしておかないと後で不具合が障^{しょう}じますから」

「それを覚えなきゃいけないですよね？…か、簡単でわかりやすくって覚えやすいのをお願いします」

「そのつもりですよ、優君はすぐにボロをだしてしまいそうですから」

反論できない言葉にうつと言葉に詰まった私を置いて須川さんはずんずん進んでいく。

慌ててその後を追いながら徐々に強くなっていく違和感に眉をしかめる。

どうやら、違和感の元は校舎の中か奥にあるみたい。

強化ガラスが張り巡らされている玄関から足を踏み入れて、まず学校の正面玄関ホールなのに物がなさすぎることに気づく。

花瓶や置物を置くスペースも棚のようなものも凹凸もあるのに、なーんにもない。

額に飾られた肖像画や絵画もない。

キョロキョロしつつ、どうにかはぐれないように須川さんの後ろを歩いていると廊下の窓から庭が見えた。かなり広い。広さはちゃんとしたサッカーができそうな位。

木もあるし、芝生もいい具合だ。後はベンチがあるくらいで噴水とかはないんだけど、十分すぎるほどいい景色だ。木は紅葉の木みただから秋になれば物凄く綺麗な中庭に変身するんだろうなあ。

「優君、空いている口を閉じてください。着きましたよ」

「！は、はい」

反射的に口を抑えて初めて自分が口を開けていたことに気づいた。なんで本人が知らないのにずーっと前を向いて歩いてた須川さんが知ってるんだろう。

背中に目でもあるのかな？……これ以上人間離れしなくてもいいと思うんだけど。

「何を考えているのかまではわかりませんが、挨拶はきちんとしてください。基本的に私に習って礼をする程度でいいです。ああ、発言は控えてくださいね？話が逸^それてしまいますから」

「脱線するの確定なんですか」

「確定です」

短いやりとりの後、須川さんが動いた。

コンコンとノックの手本のようなノックをして、中から校長先生らしき人の声。

入室の前に名を告げるとこちらから開ける前に勝手に扉が開いた。

扉が開いて直ぐに満面の笑みを浮かべた校長先生がいたことから、校長先生が自ら扉を開けて私たちを出迎えてくれたらしい。

それなりの値段がするであろう絨毯にスリッパで上がる。

このスリッパもよくある叩けばいい音が出そうなものじゃなくって、高級感あふれるスリッパと喚ぶには申し訳ないような代物だった。殺風景な正面玄関に二足分ちよこんと置いてあつただけど……どうやら正解みたい。

室内は私立高校の校長室らしい作りで派手すぎない、どちらかと言えば安定感のある上品な感じ。

立派なデスクに応接用のソファとテーブル、壁には歴代の校長の肖像画を飾るための額縁が並んでいる。

3枚目に今、目の前で須川さんの手を握って戦々恐々としながらも嬉しそうな顔をした校長先生の顔がずばーんと飾られていた。

「（あ、教頭先生だ。あとは…えーと？）」

見覚えのある細身で心配症っぽい顔をした教頭がソファの後ろの辺に控えていた。

で、問題はその隣で嫌味のない笑みを浮かべている白衣の男の人。

雰囲気からして須川さんと同じくらい。

柔らかそうな玉蜀黍色の髪に温かみのある茶色の目をした、美形さんがいる。

多分、保健室の先生なんだろうけど……女の人じゃないんだね。残念。

まあ、優しそудだからいいんだけどさ。

「いやあ、外は暑かったでしょう、どうぞソファにお掛けください」

「ありがとうございます。ここへ」

「あ、は、はい」

促されて恐る恐る須川さんの隣に腰を下ろす。

ふつかふつかのソファに後ろに転がりそうになったけど背もたれがしっかり支えてくれた。

いい仕事をしたな、背もたれよ。

ふかふか具合に驚いている私をよそに、校長先生が教頭先生からボードをテーブルの上に乗せる。

丁寧にボードへ張り付けられている紙には今回の潜入調査に対する学校側からの受け入れ体制について書かれていた。

「えー、あの後すぐ学校に戻りまして先生達と話合った結果なんです、鍵のかかる部屋を一つ校舎と寮に用意させましたので、好きに使ってください。それから必要な物品に関しては昨日の内に部屋へ運び込んでいますので安心してください。リストをお渡しできると思います。あとは提示していただいた条件のとおり教員には何も話しておりません、知らせたのは保健医の白石先生（しいいし）だけです」

「白石 葵です、どうぞよろしく」

白衣の男の人は白石先生というらしい。
うん、覚えやすくてよかった。

「では、彼は後で主にプール授業やここでの生活、体育などでの着替えについて彼女と打ち合わせをしていただきます。決まり次第我々にも固まった設定を聞かせてください」

「わかりました、じゃあカルテも作っておきます」

「そうしていただけると幸いです。では、彼女に協力していただけ
る学生は決まっていますか？」

「ええ、もちろんですとも！いやあ、実に適任だと思いますよ。成績は優秀ですし生徒を統率する力もあるので多少のことなら冷静に対処してくれるでしょう。前任の生徒会長に変わって推薦によって一年で生徒会長になったんですが本当に優秀でして……必ずや須川先生のお役に立てることでしょう。彼には、あらかじめ説明はして本人・ご両親共に快く快諾してくださいます」

「成る程…分かりました。彼とは後で話をさせて下さい」

「そうおっしゃると思います。生徒会室で待たせてあります。あー…それで、ですね……江戸川さんのことなんです。女性が男装して在学している事がばれたら大変だということは？」

「十分承知していますし、万が一、外部に漏れたとしてもその時の対処は考えてあるので問題ないと思いますよ。縁町近郊でもウチの名前は効きますから」

それなら安心だ、と豪快に笑う校長の後ろに控えていた教頭が心底安堵したように胸をなでおろしているのをバツチリ私は見た。ひやっぱり校長先生より教頭先生の方が心配してみたみたい。

「では早速ですが私は依頼人と共に協力してくれる生徒と直接話をしてるので、そちらも話を進めてください。1時間ほどで戻る予定です」

「わかりました」

頷いた私を見届けた須川さんは、依頼人と共に校長室から出ていった。

残されたのは私と白衣を身にまとった白石先生の二人だけ。

どうしたらいいのかわからなくて動けずにいる私に気づいたらしい白石先生は楽しそうに笑って、まずは座ろうか、と話を切り出してくれた。

「じゃあ、二度目だけど改めて自己紹介。俺の名前は白石 葵――

生徒には白石先生だとか葵先生だとか、まー、葵ちゃんなんて呼ぶやつもいるけど、個人的には葵先生って呼んでくれるのが一番嬉しいかな」

「は、はい！ええと、私は江戸川 優です。男子校ってやっぱり名前で呼び合っんですか？」

「んー、人によりけりだなー。呼び捨てで呼ぶ奴やらあだ名付ける奴やら、大体がノリって感じ？教師はやっぱその先生による。俺は普段好き勝手呼んでるけど、規律厳守な先生がいるときは苗字で呼ぶ。あとはその場の雰囲気に合わせてやればなんの問題もないよ」

「はい。ええと、プール授業ってやっぱり見学ってことになりますよねー……」

「そうなるだろうね。流石に男物の水着は無理だし、もしそんなことしたら確実にバレるからさ」

その言葉に私はガツクリうなだれる。

プール！夏といえばプールなのに入れないなんて！！

仕事中だつていうのはわかってるけど楽しそうにプールで泳ぐ人を指くわえてみてるだけなんて悔しすぎるじゃないか！！…それに、プールの見学つて暑いし。

彼は私の落ち込みように苦笑しながら、どこから取り出した紙にさらさらと何かを書き始める。

それをのぞき込むと、少し角張った時でプール授業を回避する為の言い訳が単語で書き出されていた。

「ありがちなので塩素アレルギーだけど…これじゃあ見学も出来ないしちよつと面倒だから却下か。後は事故にあつて傷跡があるつて言つのと水恐怖症つていうのがあるんだけど…どっちがいい？」

「うーん…事故の方がいいかな、と。そうすればサラシを巻いてても誤魔化せるだろうし…水恐怖症つてどんなのだから想像、つかないですし」

「OK。じゃ、適当にでつち上げて置く。傷は前つてことにして置いた方がいいな…万が一着替えていて背中見られた時の言い訳がし易いから…よし。で、次は健康診断なんだけど、一応身長と…血液型とかかいてくれるかい？書きにくいだろうけど、体重も…あ、この付箋貼って隠していいからね」

こんな感じで和やかに会話をしつついくつかの必要書類を書き上げた頃にはあつという間に時間が経っててビックリ。うーん、話していると時間が経つのは早い。

保健室から持ってきたカルテに全て記入し終わってペンを置いた瞬間に校長室の扉が開いた。

扉の向こう側には須川さんと校長先生、教頭先生の3人だけ。

生徒会長さんは連れてこなかったみたい。

戻ってきた須川さんは葵先生からカルテを貰い、一瞥した後納得してくれた。

葵先生がコピーを取りに行って、コピーしたてのカルテを受け取り再び確認してから私に「正し屋へ戻りますよ」と仕事モードの顔で告げる。

慌てて立ち上がり、須川さんの隣に立って一緒に挨拶をしたあと玄関へ向かう。

いくら休みで生徒がいなくても全く誰にも見られないという保証はないから、用事が済み次第帰るという話はしてあったみたい。

ま、道のりが分からないだろうからって葵先生がわざわざ玄関までの道案内をしてくれた。

歩きながら話して、彼は『正し屋』を知っていたこと、学生寮の常勤として舎監の先生とは別で寝泊りしていることや、須川さんと同じ歳であることが分かった。

「うーん、やっぱりこの学校広すぎるとおもいませんか？……って、須川さん？」

「私は白石先生に確認しておきたいことがありますので、先に車に戻っててください」

「？はい」

笑顔は普段通りなのに妙に不機嫌そうな須川さんに首を傾げつつ私は職員用の駐車場へ向かった。

なんっていうか、少し怖い感じ。なにかあったのかなー？
車に着いて5分位で須川さんが戻ってきたんだけど、葵先生とどんな話をしたのか教えてくれなかった。

帰り道は葵先生と決めた設定のことを詳しく話したり予行練習をしつつ、途中で商店街で夕食の買出しをしたり和菓子屋さんに寄って貰ったり、十二分に寄り道を楽しんでから正し屋へと帰還した。

これから知らない沢山のことが私を待ってるんだろうな、と思った
男装初体験の日

きっかけは口裏合わせ（後書き）

ストックがストックの役割を果たしていないことに気がついた今日。

きっかけは低身長（前書き）

クリスマスは、一人でケーキを食べるのだけが楽しみです。

きっかけは低身長

まさか成人してから自己紹介を沢山の若い男の前でするなんて
思いもしなかったよ…。

がやがやと騒がしい教室の前で私の足は動かなくなった。

これがただの金縛りだったらどんなにいいだろうと考えられるよ
うになったことに少し驚いて、須川さんのお仕置き（嫌がらせ）よ
りは酷くないことに気付く。

それに気づいてしまえば体の硬直はあっさり解けた。
ぶっちゃけ、須川さんのお仕置き程怖いものを私は知らない。

「（何がきついつてじわじわくる苦痛が長時間続く上にキラキラした満面の笑顔で駄目出しし続けてくれることだよね……正座の状態で強制金縛りかけられて放置されたときはいろいろダメかと思った……トイレ先に済ませてほんとよかったね、うん）」

遠くも近くもない絶妙な思い出を振り返っていた私を呼び戻したのは、独特の音を立てたドアだった。

左にスライドしていく音は随分なめらかではあったけど、確かに開けた音。

ぬつと体を屈めて現れた大柄の男は、美味しいスイーツを出す喫茶店の店主・雅さんと似通っていた。

何がって背の高さとかガタイの良さが。

「（デカイ、怖い。やっぱり怖い……手にオヤツを持っている場合のみ特例で別になるけど）」

手にはオヤツのオの字すらみあたらない。
あるのは白いチョコレートだけだ。

「おら、さつさといれ。ホームルームが終わらねえだろ」

いや、私はただ2・3教室の前で待っているように言われたから来ただけです。

ついでに言っしまえば入るタイミングが掴めなくて右往左往すること五分、内情を探ろうとドアに耳をつけて中の音を聞くべきかどうか迷って苦悩すること5分。

で、諦めて自分からノックをする勇気を振り絞る前に極度の緊張で動けなくなったのはついさっき。

「…それ、俺が悪いんですか…」

がつくりと頂垂れた私の頭をポンポンとやや強めの力で叩いて、顎でしゃくる。

もー腹を括るしかないよね！半泣きになりそうなのをぐっところえで（涙って勝手に出てくるんだよ…目薬いらなからいいけどさ。肝心なときに出ないのに、ね）足を踏み出した。

教室の中は、意外に広く感じられて少しだけほっと息を吐く。

多分、男子校だから全てサイズが成長期の男の子もしくは成人男性にあわせて大きめに作られているのだろう。な、なんか天井も高い気がする。

私を見た周りの反応はざわざわ、がやがや…擬音として言い表したらこんな感じだった。

自己紹介の時に、ざわめきが突然消失しなければいいと思った。だってこの賑やかさなら緊張しなくて済むような気がするし！

必死に手足を動かしながら進む先は教団の横、つまり黒板の中央部分。

自己紹介の時に言う言葉を脳内で繰り返していた私は、今の自分がどれほど滑稽でお約束な行動をとっているのかわからなかった。気がついたのは呆れと苦笑が入り混じった担任の山里先生が声をかけてくれたから。

「江戸川、お前ベタだな…手と足同じ方でてるぞー」

「おあう…っ！？あ、あはは…す、すいません…」

「ま、この生物が編入してきた江戸川だ。面白いからってあんまり苛めないように」

ほれ、自己紹介しろとニヤニヤ笑いながら私の頭を肘掛に使う姿は到底教師には見えない。

でも肘掛にされるのは慣れているので気にせずに、必死に考えた自己紹介をしようと口を開く。

不安でつい、学ランの裾を握りしめる。手汗がひどいし、物凄く目も泳いでると思う。

「えーと、江戸川 優です。家庭の事情とかで編入してきました…好きな物は甘いモノと楽しいこと、嫌いなのは辛いものと数学。よく迷子になるので迷ってたら助けてください——宜しく」

肘掛になっている為、頭は下げられない。

だから、反射的に普段通りのへらつとした笑顔を浮かべてみる。

…多少のどよめきがあったのは、あえて聞かなかった振りだ。気にしてたら生きていけないんです。

いや、ほらバッシングとかって直に受け止めるのはきついんだ…大人になったって嫌われるのは好きじゃないんだ。

そんなことを考えながら、私を肘掛にしている先生をねめつける。

「そろそろ腕どけてください。背がこれ以上縮んだらどーしてくれるんですか」

「んじゃ、ありきたりだが質問はないかー。ねえならこのまま授業

に突入するぞ」

「つちよ、スルーされた?!」

仕方ないので自分で腕をよけようと悪戦苦闘していると、生徒側から焦ったような声と椅子がガタガタ動く音。なんだなんだ、と視線を向けるとそこには手をまっすぐに上げて慌てたように立ち上がった男子生徒がいた。

「げ、は、はいはい!! 質問ある!」

「よし。じゃー、靖十郎」

手を上げているのは窓側から2番目の席に座った元気よさそうな子。

地の色なのか染めているのかは分からないけど、こげ茶色のぴよんぴよんと跳ねた髪に深い桑茶色の瞳の彼は今時の高校生から見るとかなり可愛らしい感じがした。今どきの高校生は大きくて怖い。

骨格は成長途中の男の子っぱいけど、背は低くて私と10センチくらいしか変わらないようにみえる。

怖い感じもないし、話しやすいそうだなとーなんて観察していると彼は妙にキラキラした目で私を見つめた。う、日頃見る機会のない純粹すぎる瞳がおねーさんには少しキツイです。自分の汚さが浮き彫りになる気がする…。

「江戸川っ、お前身長は？」

「・・・へ？」

「だから、身長何cm？」

身を乗り出して訊ねてくる彼に私はしどろもどろになりながら昨日保健室で計った身長を告げる。

いつの間にか山里先生の腕は頭から外されていて、先生自体も黒板の横にあるパイプ椅子に腰掛けていた。いつの間に。

「よっしゃー！江戸川…いいや、優！俺とお前はこれからコンビだ！何でも聞けよ！」

「あ、うん？えーと、宜しく」

よく分からないけれど、とりあえず友人は出来た…っばい。

これだけノリがよければ学校の案内とかもしてくれそうだし、社交的っばいから色々聞けるかな？

出だしは好調だ！とか思っている余裕もなく、授業開始を阻止する命？をかけた質問攻めに合う羽目になった。

いやー、流石に新しい苛めかとも思ってたね！

でも、相手は胡散臭い笑顔を浮かべる上司ではなく純粋な青少年達

だ。

頑張つて答えられるものには答えだし、反応も悪くなかったもののクラスではやっていけそうな気がした。

…1つ言つておくけど自分の年齢を忘れたわけじゃないから恥ずかしさは変わらない。

そう、例え何の違和感もなく受け入れられても恥ずかしいものは恥ずかしいんだ。

（お、おわつたああああ！うう、やっと座れた…ッ）

1時間目が終わる5分前に自分の席を知らされてへろへろしながららつつ伏す。

どうやら私の席は特等席ともいえる窓側の一番後ろらしい。

窓が近いから多少涼しいし、居眠りしてもばれないという…最高の席なんだけども。

「（でつかいです、周り全部）」

目の前は普通に背中。基本見えるのは背中。

唯一、目が合うのは靖十郎という身長を尋ねてきた彼のこと。

隣の席だから話をする機会は多くなるとおもう。靖十郎は話しても面白そうだし、顔も広そうだからありがたい。潜入調査は情報収

集が一番大事なんだって。

そんなこんなで一時間目は自己紹介と質問で終わったんだけど、二時間目は普通に授業だった。

でも、まだ私の教科書が届いてないという事を知った靖十郎は丁寧にも机をくつつけて、前回やったところを教えてくれた。ま、机やらノートやらに落書きやら筆談をした所為で先生に怒られたりもしたけれどそれなりに楽しかった。

なーんか、清十郎は妙に親しみやすいんだよね。年齢も性別も違うはずなんだけど…変なの。

午前の授業中、こしょこしょと二人で話していると…気がつけば4時間目終了のチャイムが鳴っていた。

「（あ、やば。授業なんにも聞いてなかった）もうご飯の時間か…」

「よっしゃー！んじゃ、とつとと食堂行こうぜ！」

「え？ちょ、待った…！まだ机の上の授業道具片付けてな——
——うわわわ」

「そんなの後でいいって！それよりさっさといかねーと席なくなっちまうんだ」

やや強引に私の手を握った彼は、生き生きとした様子で教室から飛び出す。

勿論私は手を握られたままなのでこう、つんのめりながら必死に顔面スライディングを免れようと必死に足を動かす。

いくら背が低めだとはいえ、体力も若さも性別も違うのだからこちらら必死だ。

途中色々な人間にぶつかって（その度に必死に謝って）どうにか食堂に着いたときには息は切れてるし身体はだるいし、汗はかくしそれはもう悲惨な事になっていた。

「せ、せいじゅうろうっ、たのむ、から…廊下…特に階段ではスピード、落として…っ…し、しぬかとおもった…」

「おお！？わ、悪い！大丈夫か？！」

ゼーゼーと食堂の入り口付近の壁に寄りかかりながら息も絶え絶えに言葉をつなげた私に清十郎が慌てて走りよってくる。

平気だ、と告げたかったのだが酸素を取り込むのに忙しい今の身体ではソレは叶わなくて、ひらひらと手を振ってみた。

靖十郎はわかってくれたみたいで、ほっと息をついて心配そうに私の横を歩く。

なんか、もの凄く申し訳なさそうな顔は叱られた時のシロの顔とおんなじで思わず吹き出した。

いつも弄られて、誤ってばかりだったから新鮮だ。

「――ふう…もう大丈夫。俺、体力ないし運動得意じゃないからああいうのはちよつと勘弁して」

「そつか…悪かったなー…んじゃ、詫びといつちやんだけど昼飯奢らせてくんね？ほら、編入記念日も兼ねてさ」

「え？いや、それはちよつと…あ、どうせなら飲み物の方が良いかな」

「わかった…んじゃ、まずは腹ごしらえしますか！」

私の提案に初めはきょとんとしていたが私の意志を尊重してくれたのかニカツと満面の笑みを浮かべて券売機へ。彼の背を追いながら、ふと授業中に考えていた事の答えが出る。

「そつか、犬っぽいのか」

「？何か言ったかー？」

「いや、別になーんにも？ほら、靖十郎早く買わないと！」

「だん…んー…今日は大ラーメンと大盛り日替わり定食っつー気

分だしこれでいいか」

真面目な顔で券売機のメニューを見た後、清十郎はなんのためらいもなく大盛りラーメンと日替わり定食（大）のボタンを押して券を取った後興味深そうに私がメニューを選ぶのを見ている。

視線がちよつと気になったけど、こういうのにはパンダ状態だった御陰で慣れた。

いや、ほんとすごかったんだよ…廊下からの視線が。

私みたいな編入生は初めてだったらしくて物珍しさから生徒が見に来る見に来る。

どつから湧いてきたんですかって位にひっきりなしに私を見て“小さい”と感想を漏らし去っていく。

うう、おねーさん悲しい。

「（それはそれとして、っと）んー、何にしようかな」

じーっと券売機を一通り見つめて大好物を発見した。

すかさずエビフライ定食のボタンとデザートと書かれたボタンを押す。

デザートはすり減らされたMP回復のための必需品です！なれない環境で巨人かつ未知の生物・男子高校生と同じ空間にいるのって疲れるんだから。

ちなみにデザートは6枚ほど購入。

つつい、うきうき飛び跳ねながら券売機の前から離れた私に清十郎は眉をしかめて私の手にある食券と私の顔をなんとも見比べてついつつと食券を指さした。

「あのカウンターで券渡して受け取ればいいんだよね……ってどうかした？」

「いや、お前まさか今それ全部食う、ってわけじゃないよな？授業の合間とかに……」

「やだなあ、靖十郎—— 全部この時間に食べるに決まってるじゃんか。甘味は鮮度命なんだから」

「鮮度って…魚かよ」

ガツクリとうなだれた靖十郎をみて私は男の子ってやっぱり難しいと改めて思う。

いつか理解出来る日が来るんだろうか。

…って、ご飯食べたら色々噂とか聞いて回らないと！！危ない危ない。

……とりあえず、腹が減っては戦は出来ぬ！ってことでエビフライを食べようと思います。

きっかけは低身長（後書き）

メリークリスマスでした。

ふ、なんだか時間かかった…後日読み直して気に入らなかったら書き直します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0334y/>

正し屋本舗へおいでなさい

2011年12月25日23時05分発行